

八雲町

# ポンシラリカ1遺跡・黒岩3遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財調査報告書—

平成 11・12 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

八雲町

# ポンシラリカ1遺跡・黒岩3遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財調査報告書—

平成 11・12 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

## 例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成11・12年度に実施した八雲町ボンシラリカ1遺跡と、平成12年度に実施した黒岩3遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、ボンシラリカ1遺跡は平成11年度に第2調査部第5調査課及び第1調査部第2調査課、平成12年度に第2調査部第1調査課が担当した。黒岩3遺跡は第2調査部第1調査課が担当した。
3. 本書の執筆は、IV章及びVI章-1については大泰司 統、それ以外については福井淳一が担当し、全体の編集は福井淳一が担当した。
4. 遺物の整理は、ボンシラリカ1遺跡については、大泰司 統・田中哲郎、黒岩3遺跡については福井淳一・田中哲郎が担当した。
5. 調査での写真撮影は大泰司 統、福井淳一、田中哲郎が、室内での遺物の撮影はボンシラリカ1遺跡については大泰司 統、黒岩3遺跡については菊地慈人が担当した。
6. 石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡正光の指導のもと、大泰司 統、福井淳一が行った。
7. 報告書刊行後、出土資料及び記録類は八雲町教育委員会が保管する。
8. 調査にあたっては下記の諸機関、諸氏にご協力、ご指導を頂いた。

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、八雲町立黒岩小学校、八雲町郷土資料館 三浦孝一・柴田信一、横山英介、菊地博、七飯町教育委員会 石本省三、函館市教育委員会 田村良信・野村祐一・野辺地初雄、市立函館博物館 長谷部一弘、市立函館博物館五稜郭分館 佐藤智雄、松前町教育委員会 久保泰・前田正憲、知内町郷土資料館 高橋豊彦、木古内町教育委員会 菅野文二・大谷内愛史・木元豊・三上英則・山田央、上磯町教育委員会 森靖裕、戸井町教育委員会 鈴木正語、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田祐二、南茅部町埋蔵文化財調査団 佐々木日登美、森町教育委員会 藤田登、長万部町教育委員会 佐藤稔、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斉藤邦典・三浦秀俊・松田輝哉、乙部町教育委員会 森広樹・藤田巧、奥尻町歴史民俗資料館 木村鉄朗、北檜山町教育委員会 谷岡康孝、今金町教育委員会 寺崎康史、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 佐藤一夫・赤石慎三、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉・小島朋夏、虻田町教育委員会 角田隆志、平取町教育委員会 森岡健治・長田佳宏、竹花和晴、青森県埋蔵文化財センター 平山明寿・福田友之・成田誠治・相馬信吉・神康雄・坂本真弓・小田川哲彦、八戸市教育委員会 小笠原善範・村木淳、鷹巣町教育委員会 奥山一絵

## 凡 例

1. 本文中及び図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した

H：住居跡 P：土坑 F：焼土 FC：フレイク・チップ集中 HP：住居跡内の柱穴

なお、土坑については、従来当センターでは土壌を用いる例が多い。しかし、「坑」は「はかあな」の意を持つことからここでは「あな」としての「坑」を用い、墓と認定できるものについて「土坑墓」を用いた。

2. 遺構図の方位は真北を示す。遺構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は原則として40分の1である。遺構平面図の+はグリッドライン交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高(単位m)である。焼土については網をかけてある。
3. 遺構図中の遺物のシンボルマークは以下のとおりである。

床面 覆土		床面 覆土		床面 覆土	
土器	● ○	礫石器	▼ ▽	剥片石器	▲ △
礫	◆ ◇	剥片	■ □	その他	★ ☆

4. 遺構の規模は全て確認面での規模で、住居跡・土坑は「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」、焼土は「長軸×短軸×確認面からの最大深・最大厚」、フレイク・チップ集中は「長軸×短軸」を単位cmで示してある。なお、一部破壊されているものは( )で示し、不明のものは-で示した。
5. 土層名は下記の記号を用いた場合がある
- Ko-d：胸ヶ岳-d 火山灰  
KO-g：胸ヶ岳-g 火山灰
- 火山灰の略号は、北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。
6. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、スケールなどが入っているもの以外は原則として土器・礫石器が3分の1、剥片石器・磨製石器が2分の1である。
7. 土器・土製品・石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、実測図中でたたき痕は√-√、すり痕は|—|で範囲を表した。

# 目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
(1) ボンシラリカ 1 遺跡	1
(2) 黒岩 3 遺跡	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	2
4 調査の概要	2
(1) ボンシラリカ 1 遺跡	2
(2) 黒岩 3 遺跡	3
II 遺跡の位置と環境	7
1 位置と環境	7
2 周辺の遺跡	7
III 遺物の分類	13
1 土 器	13
2 石 器	14
IV ボンシラリカ 1 遺跡	15
1 発掘区の設定	15
2 調査の方法	15
(1) 発掘調査の方法	15
(2) 整理の方法	17
3 基本層序	18
4 遺構と遺構出土遺物	20
概 要	20
(1) 住居跡	20
(2) 土 坑	25
(3) フレイク・チップ集中	27
5 包含層の遺物	33
(1) 土器・土製品	33
(2) 石 器	49
遺構一覧表・掲載遺物一覧表	69

V	黒岩3遺跡	79
1	発掘区の設定	79
2	調査の方法	79
(1)	発掘調査の方法	79
(2)	整理の方法	80
3	基本層序	80
4	遺構と遺構出土遺物	83
	概要	83
(1)	住居跡	83
(2)	焼土	90
(3)	フレイク・チップ集中	90
5	包含層の遺物	94
(1)	土器・土製品	94
(2)	石器	100
	遺構一覧表・掲載遺物一覧表	115
VI	調査の成果と課題	121
1	ボンシラリカ1遺跡について	121
2	黒岩3遺跡について	122
	引用・参考文献	124
	写真図版	127
	報告書抄録	

## 挿図目次

II	遺跡の位置と環境	
図II-1	遺跡の位置	8
図II-2	周辺の遺跡	9
図II-3	黒岩4遺跡出土遺物	10
図II-4	遺跡周辺の旧地形	11
IV	ボンシラリカ1遺跡	
図IV-1-1	調査区設定図	15
図IV-2-1	グリッド設定図	16
図IV-2-2	調査方法	16
図IV-3-1	メインセクション図	19
図IV-4-1	遺構配置図	20
図IV-4-2	H-1	21
図IV-4-3	H-1出土遺物	22
図IV-4-4	H-2及びH-2出土遺物	24
図IV-4-5	P-1, P-2及び出土遺物	26
図IV-4-6	FC-1, FC-2及び出土遺物	28
図IV-4-7	FC-3, FC-4及び出土遺物	30
図IV-4-8	FC-5, FC-6, FC-7及び出土遺物	31
図IV-5-1	包含層出土の土器(1)	34
図IV-5-2	包含層出土の土器(2)	35
図IV-5-3	包含層出土の土器(3)	35

図Ⅳ-5-4	包含層出土の土器(4)	38	図Ⅴ-3-3	土層断面図(2)	82
図Ⅳ-5-5	包含層出土の土器(5)	39	図Ⅴ-4-1	遺構配置図	83
図Ⅳ-5-6	包含層出土の土器(6)	41	図Ⅴ-4-2	周辺の地形と調査区	84
図Ⅳ-5-7	包含層出土の土器(7)	42	図Ⅴ-4-3	H-1(1)及び出土遺物	85
図Ⅳ-5-8	包含層出土の土器(8)	43	図Ⅴ-4-4	H-1(2)	86
図Ⅳ-5-9	包含層出土の土器(9)	45	図Ⅴ-4-5	H-2及びH-2出土遺物(1)	87
図Ⅳ-5-10	包含層出土の土器(10)	47			
図Ⅳ-5-11	包含層出土の土器(11)	48	図Ⅴ-4-6	H-2出土遺物(2)	88
図Ⅳ-5-12	包含層出土の土製品	49	図Ⅴ-4-7	F-1・2	89
図Ⅳ-5-13	包含層出土の石器(1)	51	図Ⅴ-4-8	FC-1・2及び出土遺物	92
図Ⅳ-5-14	包含層出土の石器(2)	52			
図Ⅳ-5-15	包含層出土の石器(3)	55	図Ⅴ-4-9	FC-3・4及び出土遺物	93
図Ⅳ-5-16	包含層出土の石器(4)	56			
図Ⅳ-5-17	包含層出土の石器(5)	58	図Ⅴ-4-10	FC-5及び出土遺物	94
図Ⅳ-5-18	包含層出土の石器(6)	59	図Ⅴ-5-1	包含層出土の土器(1)	96
図Ⅳ-5-19	包含層出土の石器(7)	60	図Ⅴ-5-2	包含層出土の土器(2)	97
図Ⅳ-5-20	包含層出土の石器(8)・石製品	62	図Ⅴ-5-3	包含層出土の土器(3)	98
			図Ⅴ-5-4	包含層出土の土器(4)及び土製品	99
図Ⅳ-5-21	包含層出土遺物分布図(1)	63			
			図Ⅴ-5-5	包含層出土の石器(1)	101
図Ⅳ-5-22	包含層出土遺物分布図(2)	64	図Ⅴ-5-6	包含層出土の石器(2)	103
			図Ⅴ-5-7	包含層出土の石器(3)	104
図Ⅳ-5-23	包含層出土遺物分布図(3)	65	図Ⅴ-5-8	包含層出土の石器(4)	105
			図Ⅴ-5-9	包含層出土の石器(5)	107
図Ⅳ-5-24	包含層出土遺物分布図(4)	66	図Ⅴ-5-10	包含層出土の石器(6)	108
			図Ⅴ-5-11	包含層出土の石器(7)	109
図Ⅳ-5-25	包含層出土遺物分布図(5)	67	図Ⅴ-5-12	包含層出土の石器(8)	111
			図Ⅴ-5-13	包含層出土遺物の分布(1)	112
図Ⅳ-5-26	包含層出土遺物分布図(6)	68			
			図Ⅴ-5-14	包含層出土遺物の分布(2)	113
			図Ⅴ-5-15	包含層出土遺物の分布(3)	114

## V 黒岩3遺跡

図Ⅴ-1-1	発掘区設定図	79
図Ⅴ-3-1	基本層序	80
図Ⅴ-3-2	土層断面図(1)	81

# 表 目 次

## I 調査の概要

表 I-1	ボンシラリカ 1 遺跡遺構出土遺物 点数一覧	4
表 I-2	ボンシラリカ 1 遺跡包含層出土遺 物点数一覧	4
表 I-3	黒岩 3 遺跡遺構出土遺物点数一覧	5
表 I-4	黒岩 3 遺跡包含層出土遺物点数一 覧	5

## IV ボンシラリカ 1 遺跡

表 IV-1	検出遺構一覧	20
表 IV-2	H-1 出土遺物点数一覧	69
表 IV-3	遺構規模一覧	69
表 IV-4	遺構出土掲載土器一覧	69
表 IV-5	遺構出土掲載石器一覧	70
表 IV-6	包含層出土掲載土器一覧	70

表 IV-7	包含層出土掲載再生土製品一覧	76
--------	----------------	----

表 IV-8	包含層出土掲載石器一覧	76
--------	-------------	----

## V 黒岩 3 遺跡

表 V-1	検出遺構一覧	83
表 V-2	H-1 出土遺物点数一覧	83
表 V-3	遺構規模一覧 (住居跡)	115
表 V-4	遺構規模一覧 (焼土)	115
表 V-5	遺構規模一覧 (フレイク・チップ 集中)	115
表 V-6	遺構出土掲載土器一覧	115
表 V-7	遺構出土掲載石器一覧	116
表 V-8	包含層出土掲載土器・土製品一覧	116
表 V-9	包含層出土掲載石器一覧	118

# 図 版 目 次

## ボンシラリカ 1 遺跡

図版 1	1. 遺跡遠景 (南から)	129
	2. 遺跡遠景 (南西から)	129
図版 2	1. 25% 調査状況 (北西から)	130
	2. FC-2 検出状況	130
図版 3	1. 遺構確認調査状況 (北から)	131
	2. 遺構確認調査終了状況 (北西から)	131
図版 4	1. Pライン以西 表土除去後状況 (北東から)	132
	2. 包含層調査状況 (北東から)	132
図版 5	1. 旧河道埋没後の土層出土遺物 (北東から)	133
	2. 旧河道検出状況 (南西から)	133
図版 6	1. L100グリッド遺物出土状況 1	

	(東から)	134
	2. L100グリッド遺物出土状況 2 (北から)	134
図版 7	1. P~M103ライン土層堆積状況 (北から)	135
	2. Pライン以西 包含層調査終了状 況 (北西から)	135
図版 8	1. Pライン以东 表土除去後状況 (北東から)	136
	2. S~P103ライン土層堆積状況 (北から)	136
図版 9	1. FC-3 検出状況および Q103、R 103 III層上面遺物検出状況 (北東か ら)	137
	2. Q103、R103 III層中位遺物検出情	



	況(北東から) ……………137	図版26	包含層出土石器(6) ……………154
図版10	1. R103Ⅲ層中位石器検出状況 (北東から) ……………138	図版27	包含層出土石器(7) ……………155
	2. R103Ⅲ層下位石器検出状況 (北東から) ……………138	図版28	包含層出土石器(8) ……………156
図版11	1. FC-4 検出状況(南から) …139	図版29	包含層出土石器(9) ……………157
	2. FC-5 検出状況(南東から) ……………139	図版30	包含層出土石器(10)包含層出土再生土 製品 ……………158
	3. R109グリッド土器検出状況 (西から) ……………139	図版31	包含層出土石器(1) ……………159
図版12	1. H-1 覆土上位遺物出土状況 (南から) ……………140	図版32	包含層出土石器(2) ……………160
	2. H-1 覆土下位遺物出土状況 (北から) ……………140	図版33	包含層出土石器(3) ……………161
図版13	1. H-1 完掘状況(南東から) …141	図版34	包含層出土石器(4) ……………162
	2. H-1 土層断面(西から) …141	図版35	包含層出土石器(5) ……………163
図版14	1. H-2 遺物出土状況(西から) ……………142	図版36	包含層出土石器(6) ……………164
	2. H-2 土層断面(西から) …142	図版37	包含層出土石器(7)包含層出土土製品 ……………165
	3. H-2 完掘状況(南西から) …142	黒岩3 遺跡	
図版15	1. FC-6 検出状況(東から) …143	図版38	黒岩3 遺跡周辺の空中写真 ……………166
	2. P-1 土層堆積状況および完掘 (北から) ……………143	図版39	1. 遺跡遠景(北西から) ……………167
図版16	1. P-2 遺物出土状況(北西から) ……………144		2. 遺跡近景(北から) ……………167
	2. P-2 土層堆積状況(西から) ……………144	図版40	1. 調査状況(西から) ……………168
	3. P-2 完掘状況(北西から) …144		2. 調査状況(南西から) ……………168
図版17	1. Pライン以東作業状況(北西から) ……………145	図版41	1. 遺物出土状況(南から) ……169
	2. 遺跡遠景と無名の沢(南西から) ……………145		2. 調査区完掘状況(南から) …169
図版18	遺構出土遺物(1) ……………146	図版42	1. メインセクション(Mライン) (東から) ……………170
図版19	遺構出土遺物(2) ……………147		2. メインセクション(105ライン) (南東から) ……………170
図版20	遺構出土遺物(3) ……………148		3. Mラインセクションアップ (東から) ……………170
図版21	包含層出土石器(1) ……………149		4. 105ラインセクションアップ (南から) ……………170
図版22	包含層出土石器(2) ……………150	図版43	1. H-1 完掘状況(南西から) …171
図版23	包含層出土石器(3) ……………151		2. H-1 検出状況(西から) ……171
図版24	包含層出土石器(4) ……………152		3. H-1 覆土上面焼土検出状況 (西から) ……………171
図版25	包含層出土石器(5) ……………153		4. H-1 土層断面(東から) ……171
		図版44	1. H-1 炉跡完掘状況(東から) ……………172
			2. H-1 炉跡検出状況(北東から) ……………172
		図版45	1. H-2 完掘状況(南東から) …173

	2. H-2土層断面(東から) …173		(南西から) ……………174
	3. H-2炉跡完掘状況(東から) ……………173	図版47	1. H-1の遺物 ……………175
図版46	1. F-1検出状況(南から) …174		2. H-2の遺物 ……………175
	2. F-2土層断面(南西から)…174	図版48	1. FC-1の遺物 ……………176
	3. FC-1検出状況(北東から) ……………174		2. FC-2の遺物 ……………176
	4. FC-2検出状況(北から)…174		3. FC-3の遺物 ……………176
	5. FC-3検出状況(東から)…174		4. FC-5の遺物 ……………176
	6. FC-5検出状況(西から)…174	図版49	包含層出土土器(1) ……………177
	7. R-108土器出土状況(南東から) ……………174	図版50	包含層出土土器(2)・土製品……………178
	8. N-101石錘集中出土状況	図版51	包含層出土土器(1) ……………179
		図版52	包含層出土土器(2) ……………180
		図版53	包含層出土土器(3) ……………181
		図版54	包含層出土土器(4) ……………182

# I 調査の概要

## 1 調査要項

### (1) ポンシラリカ1遺跡

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

受託期間：平成11年4月1日～平成12年3月31日

平成12年4月1日～平成13年3月31日

遺跡名：ポンシラリカ1遺跡（道教委登録番号B-16-61）

所在地：山越郡八雲町黒岩702-2他

調査面積：1960㎡（平成11年度：1352㎡、平成12年度：608㎡）

発掘期間：平成11年7月12日～平成11年10月29日

平成12年6月13日～平成12年7月19日

### (2) 黒岩3遺跡

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

受託期間：平成12年4月1日～平成13年3月31日

遺跡名：黒岩3遺跡（道教委登録番号B-16-63）

所在地：山越郡八雲町黒岩593-2他

調査面積：960㎡

発掘期間：平成12年6月1日～平成12年8月29日（中断期間6月13日～7月13日）

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

（平成11年度）

理事長	大澤 満
専務理事	佐藤 哲人（平成11年5月31日まで）
専務理事	宮崎 勝（平成11年6月1日から）
常務理事	木村 尚俊（平成11年8月16日から）
総務部長	中田 仁

第2調査部長	鬼柳 彰
第5調査課長	熊谷 仁志
主 査	谷島 由貴
主 任	笠原 興（発掘担当者）
文化財保護主事	広田 良成
文化財保護主事	柳瀬 由佳

## I 調査の概要

第1調査部長	畑 宏明 (平成11年8月15日まで)
	木村 尚俊 (兼務、平成11年8月16日から)
第2調査課長	佐藤 和雄 (発掘担当者)
文化財保護主事	大森司 統 (発掘担当者)

(平成12年度)

理事長	大澤 満
専務理事	宮崎 勝
常務理事	木村 尚俊
総務部長	柳瀬 茂樹
第2調査部長	鬼柳 彰
第1調査課長	種市 幸生
主 任	田中 哲郎
文化財保護主事	坂本 尚史
文化財保護主事	福井 淳一 (発掘担当者)

### 3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道(函館～名寄間)は函館市を起点として室蘭・苫小牧・札幌市を經由し、名寄市に至る総延長488キロの路線で、このうち長万部～旭川鷹栖間は既に共用されている。七飯～長万部間の路線については平成5年11月から事業が進められている。この事業に対する埋蔵文化財調査については平成2年4月、日本道路公団札幌支社から事前協議がなされ、協議を受けた北海道教育委員会では平成2年4月及び平成7年11月に所在確認調査を、平成7年10月以降順次範囲確認調査を実施した。ボンシラリカ1遺跡、黒岩3遺跡については、平成2年4月及び平成7年11月に所在確認調査、平成10年10月に範囲確認調査が実施されている。

ボンシラリカ1遺跡及び黒岩3遺跡は日本道路公団長万部工事事務所管内にかかる。これまでの調査によると工事計画の変更が不可能なことから発掘調査を必要とする遺跡は同管内には長万部町内8か所、八雲町内5か所がある。八雲町内では北から黒岩3遺跡、シラリカ2遺跡、ボンシラリカ1遺跡、山崎5遺跡、山崎4遺跡が発掘調査を必要とし、平成10年度から北海道埋蔵文化財センターが委託を受け調査を実施した。平成10年度は9・10月に山崎4遺跡の一部3000㎡(カルバート建設予定地)について調査を行い、平成11年度はシラリカ2遺跡4980㎡、ボンシラリカ1遺跡の一部1352㎡、山崎4遺跡の一部6905㎡、山崎5遺跡の一部855㎡について調査が行われた。今年度は新規に黒岩3遺跡を着手し、残部としてボンシラリカ1遺跡、山崎5遺跡、山崎4遺跡の調査を行った。また、八雲町内では函館工事事務所管内の山越・野田生・落部地区の調査が今年度から着手された。なお、黒岩3遺跡調査時、道路路線内の隣接する段丘上に遺物の散布が見られた。そのため、試掘調査を行い、遺跡であることを確認した(黒岩4遺跡)。しかし、遺構が確認されず、遺物の散布を希薄であったことから立会調査となった。

### 4 調査の概要

#### (1) ボンシラリカ1遺跡

本遺跡は、八雲市街地から北方向へおよそ9.5km離れた、標高約30mの海岸段丘上に立地する。こ

の段丘は大川集落の南側に河口を持つ無名の沢によって開析されており、当遺跡はその河口から500mほど離れた左岸に位置する。また、調査区内の南側には小沢がある。なお、ボンシラリカと地元で呼称されている沢は無名の沢河口に対して大川の集落を挟んで800m北側に河口を持つ。

調査は、平成11年度、工事範囲内の遺跡の範囲、性格を確認するため8月上旬までトレンチ調査が行われた。その結果、早期の遺物と遺構とみられる落ち込みが確認され、さらに遺物出土の濃淡が明確になったため9月以降本調査を開始した。最終的に平成11年度は遺構確認調査を含め1352㎡を調査し、縄文時代中期の土器がまとめて出土した。

平成12年度の調査は608㎡について行った。確認された遺構は、住居跡2軒、土坑2基、フレイク・チップ集中7か所。住居跡、土坑は共に縄文時代早期の所産で、いずれも半分が東側の調査区外に広がる。土坑のP-2では、覆土上面に焼土と、半完形の中茶路式土器（早期）がみられ、墓の可能性が高い。遺跡は早期には調査区内の沢に面して、海側に広がっていたものと考えられる。

遺物は土器・石器合わせて11869点出土した。土器は、縄文時代早期、前期のものがある。早期の土器が最も多く、その中でも東側路Ⅲ式に相当するものが大半を占める。ほかに貝殻条痕文系平底土器、中茶路式がみられる。前期の土器は円筒上層式である。

石器は、石錘、スクレイパーが多く、次いでたたき石、すり石、砥石、つまみ付きナイフ、偏平打製石器、石鏃が続くが10点前後である。石鏃、笥状石器、両面調整石器、磨製石斧などは少ない。

## (2) 黒岩3遺跡

遺跡は、黒岩奇岩の北西約1km、内浦湾に面する海岸段丘上（標高35～50m）にある。この遺跡周辺は地形の変換点にあたり、当遺跡から南の山崎までは海岸段丘と海岸線の間が狭いが、当遺跡より北では段丘と海岸線の間に海岸平野、砂丘を挟んでいる。調査区は段丘を開析する無名の沢に面し、かつ高位の段丘崖に近い部分にあたる。遺構の確認状況、遺物の出土状況から遺跡の主体は海岸に面するとみられる。調査は平成12年度の単年度で実施した。

確認できた遺構は、住居跡2軒、焼土2基、フレイク・チップ集中5か所。調査区はほぼ全面風倒木による攪乱を受けており、とくに沢側の攪乱が著しかった。また、杉の植林地となっていたため、根による攪乱もあり、遺構の確認が困難であった。住居跡は調査区南西側の尾根上の高まりで確認された。周囲を風倒木に攪乱されていたために確認が遅れたが、それでも浅く、柱穴はほとんど確認できなかった。中央に石囲炉があり、H-1では部分的に土器が差し込まれていた。中期末の所産とみられる。フレイク・チップ集中は中期～後期のものと考えられる。そのうちFC-3は、30cm四方に良質の頁岩の石器素材、剥片だけが集中したもので、石器素材の埋納遺構とみられる。

遺物は土器・石器合わせて6625点出土した。土器は、縄文時代早期、中期後半～後期前半のものがあるが、ほとんどが破片資料で、摩滅が激しい。早期は平底の条痕文土器、東側路Ⅲ式、中茶路式がみられる。中期後半～後期前半では円筒上層式、ノグップⅡ式、多市式、大津式などがある。

石器は、遺跡の立地する段丘堆積物に質の悪い頁岩の角礫が多く含まれることから礫が非常に多い。剥片石器の石質はほとんど頁岩であるが、現地の頁岩が用いられることは少なく、より良質の頁岩を素材にしている。石器の出土量を見ると、石錘、Rフレイク、すり石が多く、石鏃、磨製石斧、石槍、スクレイパー、笥状石器が続くが10点前後である。つまみ付きナイフ、白石、砥石、石鏃、ナイフ、石皿、楔形石器などは少ない。石器では特に石錘、断面三角形のすり石といった早期の特徴を持つ石器が多い。また、両面調整石器は石槍素材と見られるものが多く、また剥片接合資料にも石槍製作を目的としたものが散見される。

## I 調査の概要

表I-1 ボンシラリカ遺跡遺構出土遺物点数一覧

分	類	H-1	H-2	P-1	P-2	FC-1	FC-2	FC-3	FC-4	FC-5	FC-6	FC-7	合計
土器	I群a類						1						1
	I群b1類	118	14				5	15		13	1		166
	I群b2類	5	4	5	14								28
	I群b3類				28		2						30
	II群a類	7											7
再生土製品	土製品						19						19
	土製品						1						1
剥片石器	石鏃		1				1						2
	石槍		1										1
	石鏃			1									1
	スクレイパー		3		1								4
	石一核					1	1		1				3
	両面調整石器								1		1		2
	Uフレイク	3											3
Rフレイク								2		2		4	
剥片	剥片	69		2	8	59	804	1157	239	141	84	56	2619
	石鏃				1								1
礫石器	たたき石				2								2
	砥			1									1
礫	礫	14	7					60					81
	合計	216	30	9	54	60	834	1235	240	156	86	56	2976

表I-2 ボンシラリカ遺跡包含層出土遺物点数一覧

分	類	細分	Ⅲ層	Ⅲ層上位	Ⅲ層中位	Ⅲ層下位	Ⅳ層	雑品、風倒木	表面採集	合計
土器	I群	I群未細分				6				6
		I群a類	39	27	64	124	176	27	15	472
		I群b類未細分	26	53	62	173	103	31		448
		I群b1類	202	458	728	367	1417	88	17	3277
		I群b3類	6	68	117	29	25		2	247
	I群合計									
	II群	39	2	1	5	0	0	0	47	
	III群	86	804	332	238	52		1	1513	
	不明		25	78	178	73			354	
	土器合計	398	1437	1382	1120	1846	146	35	6364	
土製品等	再生土製品			2	6				8	
	焼成粘土塊	1				44			45	
剥片石器	土製品等合計	1		2	6	44			53	
	石鏃	1	2	2	2	6			13	
	石槍、ナイフ	1		1	2	2			6	
	スクレイパー	10	9	16	11	22			68	
	つまみ付きナイフ	1	2	5	4	3	1		16	
	石鏃			2	1	1			4	
	石鏃一核	9	4	8	8	9	3	1	42	
	両面調整石器	2	3	1					6	
	Rフレイク	1	3	3	5	7			19	
	Uフレイク	3	6	2	2	1			14	
剥片石器合計	28	29	40	35	51	4	1	188		
磨製石器	石	2	1			1			4	
	たたき石	3	10	13	15	8		1	50	
礫石器	すり石		4	11	7	2			24	
	北海道式石筥		3	2	1				6	
	偏平打製石器		7	2	5				14	
	砥		1	10	11				22	
	石鏃	4	10	20	23	19	2	1	79	
	石風・台石	1	1	1	2	3			8	
	磨製石器、礫石器合計	10	37	59	64	33	2	2	207	
剥片	剥片	260	361	465	445	511	23	4	2069	
	(うち黒曜石剥片)	3	17	35	18	60	1		134	
石製品	製品		1	1					2	
	総点数	697	1865	1949	1670	2485	175	42	8883	

表 I-3 黒岩3遺跡遺構出土遺物点数一覧

分 類	遺 構					名			合 計
	H-1	H-2	FC-1	FC-2	FC-3	FC-4	FC-5		
土 器	Ⅱ 群 a 類			1					1
	Ⅲ 群 b 類	9	22						31
	Ⅳ 群 a-1 類			9					9
	未 分 類			4					4
土 器 合 計	9	22	13	1	0	0	0	45	
土 製 品								0	
剥片石器	石槍またはナイフ							1	1
	スクレイパー		1						1
	両面調整石器		3						7
	石 核			1	2	1		1	5
	R フレイク		3	1		9		1	14
	U フレイク					1			1
	剥片石器合計	37	514	154	135	44	51	267	1202
石器素材					6			6	
剥片石器合計	37	521	160	137	61	51	270	1237	
磨製石器	磨製石斧							1	1
礫石器	たたき石		2						2
	石 錘		1						1
	石皿・台石		1						1
	礫		1	1			1	1	4
礫 石 器 合 計	11	5						16	
礫 石 器 合 計	11	10	1	0	0	1	1	24	
総 計	57	553	174	138	61	52	272	1297	

表 I-4 黒岩3遺跡包含層出土遺物点数一覧

分 類	層					位		合 計
	I	Ⅱ	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ	攪乱ほか		
土 器	I 群 a 類		5	25	82	123	20	255
	I 群 b 類			2	9		67	78
	Ⅲ 群 a 類		3	12	33		24	72
	Ⅲ 群 b 類		1	8	16		14	39
	Ⅳ 群 a-1 類		6	145	108	1	48	308
	Ⅳ 群 a-2 類	1	60	109	19	2	15	206
未 分 類	1	25	266	137	11	52	492	
土 器 合 計	2	100	567	404	137	240	1450	
土 製 品			1					1
剥片石器	石 錘		1	6	2	1	1	11
	石槍またはナイフ			3	3			6
	石 錐		1					1
	つまみ付きナイフ			3	4			7
	銃 状 石 器		1	4	3	1		9
	スクレイパー		2	12	3	1	1	19
	楔 形 石 器			1				1
	両面調整石器			5	2			8
	石 核		14	58	29		2	103
	R フレイク		3	10	8	1	1	23
U フレイク			1	2			4	
剥片石器合計	16	507	1775	877	38	124	3337	
石器素材	16	529	1878	933	42	131	3529	
磨製石器	磨製石斧			5	3	1	1	10
	たたき石		1	8	5	1	2	17
	すり石		4	10	8	1	1	24
	砥 石			2				2
	石 錘			17	48	7	6	78
礫石器	石皿・台石		4	2				6
	礫		53	92	51	5	10	211
礫 石 器 合 計	0	58	133	114	14	19	338	
総 計	18	687	2548	1454	194	391	5328	

## II 遺跡の位置と環境

### 1 位置と環境

八雲町は北海道西南部渡島半島のほぼ中央東部に位置し、内浦湾（噴火湾）に面している。

遺跡が位置するのは八雲町の北側、黒岩地区にあたり、標高約37～50m海岸段丘上に立地する（図Ⅱ-1）。ボンシリリカ1遺跡の南の川は現在無名の沢で、地元でボンシリリカ川と呼称されている川は大川集落を挟んで北側にある。また菅江真澄の『えぞのてふり』ではシリリカ川の北を本シリリカとしている。しかし、菅江の記録の地名は松浦武四郎の記録した地名と順序が前後している部分がある。ちなみに『えぞのてふり』には「シリリカのコタン」の様子が詳細に記録されており、当時のコタンの様子が良くわかる。コタンには段丘上（記録では崖とされる）から滝となる細流が傍らにあり、段丘上にチャシがあると記録される。菅江の記述を信じるならば「シリリカのコタン」はシリリカ川の南に位置したことになる。このチャシの存在は現在知られていない。

黒岩3遺跡周辺は地形の変換点にあたり、黒岩3遺跡から山崎1遺跡までは海岸段丘と海岸線の間が狭いが、黒岩3遺跡より北では段丘と海岸線の間にはやや広い海岸平野、砂丘を挟んでいる。黒岩地区には「黒岩奇岩」が海岸にみられる。この奇岩は、玄武岩質安山岩で、メノウを含有する。奇岩には、遠いコタンから兵士が攻めて来たとき、岩を兵士が大勢屯しているものと思ひ、逃げ帰ったという話を菅江真澄が『えぞのてふり』に記録されている。そのため「石神（シュマカムイ）」としてイナウをたて敬われたという。また松浦武四郎はクン子シュマ（黒い岩）と記録している。また、奇岩の北にルコツ川があるが、ルコツないしロクツは「遺」を指し、瀬棚への山越えの道の跡があったという。また、カムイエカシ（クマ老人）の伝説があり、話が足跡をたどることで展開することから、「足跡」という意味を含むのかもしれない。

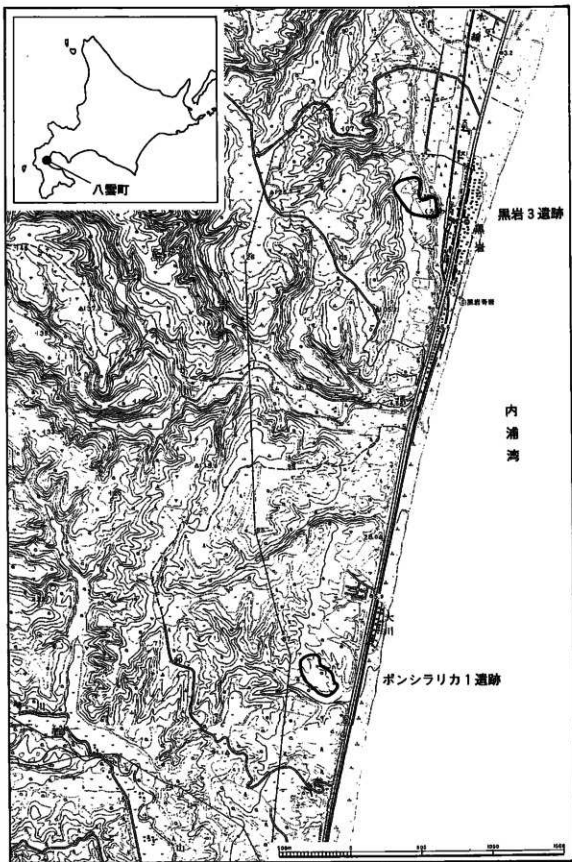
### 2 周辺の遺跡

八雲町内の遺跡についてはすでにまとめられている（遺埋文センター2000）ので、ここでは周辺の遺跡についてのみ述べる。黒岩地区周辺には北からルコツ1遺跡、黒岩4遺跡、黒岩3遺跡、黒岩2遺跡、黒岩1遺跡、シリリカ2遺跡、シリリカ遺跡、シリリカ3遺跡、ボンシリリカ1遺跡、山崎5遺跡、山崎4遺跡、山崎1遺跡、山崎3遺跡、山崎2遺跡が確認されている（図Ⅱ-2）。時期は縄文晩期を除く縄文時代早期～撥文時代にわたる。平成11・12年度調査された山崎5遺跡では縄文前期後半の集落跡が、また山崎4遺跡では縄文時代中期後半の集落跡が確認されている。

このうち黒岩4遺跡は、黒岩3遺跡北側に隣接し、平成12年度黒岩3遺跡調査時に確認したものである。工事現場進入路及び縦貫道路線内において遺物の散布が認められたため、試掘調査が行われた。結果、戦後開拓の耕作土が調査範囲内に広く認められ、プライマリーな層位からの遺物の出土は極めて少なかった。旧土地所有者の耕作当時の情報からも、遺跡の主体は段丘の海岸側に位置するものとみられ、工事立会調査となった。遺物は、土器片、石槍またはナイフ、すり石、叩き石、北海道式石冠、石皿、剥片がみられた。土器片は小片で時期は不明であるが、北海道式石冠の形態から中期後葉の可能性がある。ここでは、ナイフ（1・2）、すり石（5）、叩き石（3・4）、北海道式石冠（6・7）を図示した（図Ⅱ-3）。1は黒曜石製、2は頁岩製。7は未製品で、下面に擦り痕はなく、凹凸が残る。

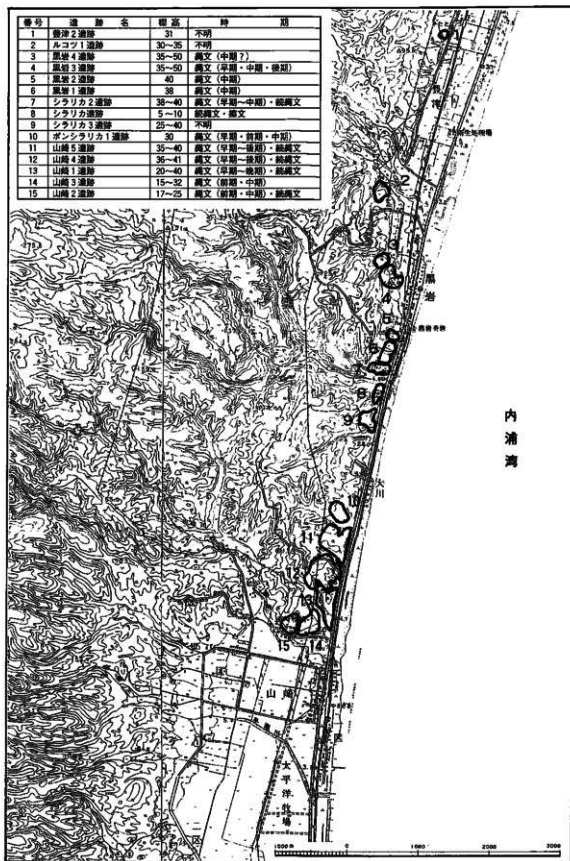


Ⅱ 遺跡の位置と環境



図Ⅱ-1 遺跡の位地

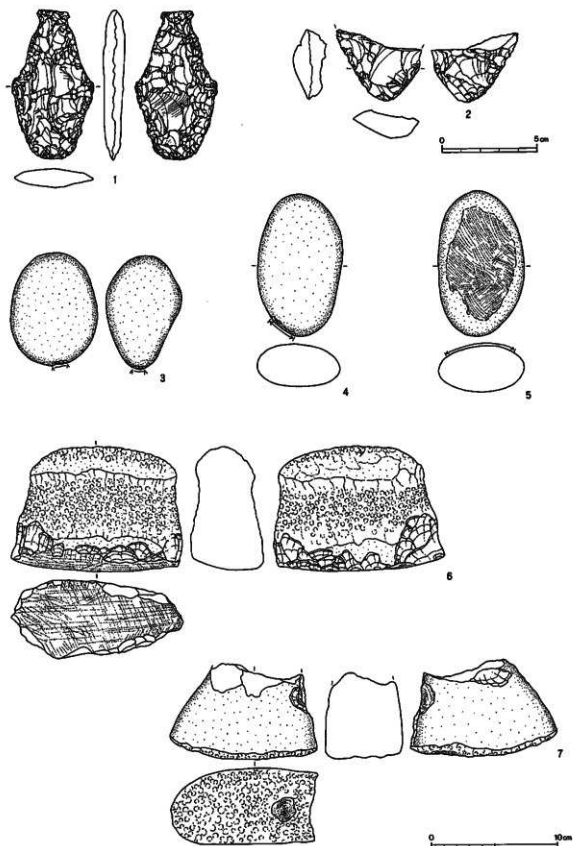
(この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「黒岩」「八雲」を複製したものである)



図Ⅱ-2 周辺の遺跡

(この図は国土院発行5万分の1地形図「国鏡」「今金」「道楽部岳」を複製したものである)

Ⅰ 遺跡の位置と環境



図Ⅱ-3 黒岩4遺跡出土遺物

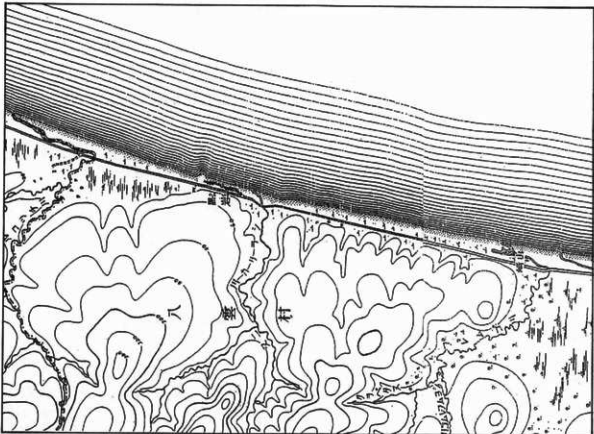
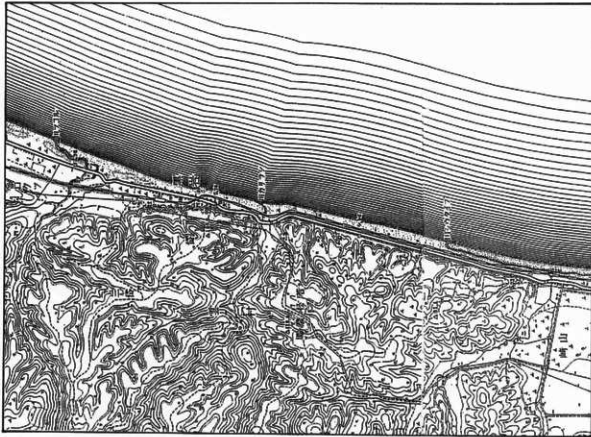


図 II-4 遺跡周辺の旧地形

### Ⅲ 遺物の分類

#### 1 土 器

分類については、本遺跡においては良好な出土状況のものは少ないことから、これまで渡島半島、噴火湾～太平洋沿岸で発掘調査された成果に基づく分類を踏襲することとした。出土した土器は、早期、前期、中期、後期がありそれぞれⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群、Ⅳ群とした。

##### Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群。

- a類 貝殻条痕文のあるもの。
- b類 縄文、撚糸文、絡条帯匠痕文、組紐匠痕文、貼付文などの施されるもの。
  - b-1類 東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当するもの。
  - b-2類 コックロ式に相当するもの。
  - b-3類 中茶路式に相当するもの。
  - b-4類 東銅路Ⅳ式に相当するもの。

##### Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群。

- a類 縄文尖底土器群。
- b類 円筒土器下層式に相当するもの。

##### Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群。

- a類 円筒土器上層式に相当するもの。
- b類 覆林式、大安在B式、ノダップⅡ式に相当するもの。

##### Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群。

- a類 余市式、入江式、大津式に相当するもの。
  - a-1類 「余市式」の範疇に入るもの。
  - a-2類 大津式・白坂3式に相当するもの。
- b類 船泊上層式、手稲式、鮭洞式に相当するもの。(今回は出土していない)
- c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。(今回は出土していない)

##### V群 縄文時代晩期に属する土器群。(今回は出土していない)

- a類 大洞B式、上ノ国式に相当するもの。
- b類 大洞C1式、大洞C2式に相当するもの。
- c類 大洞A式、大洞A'式、タンネトウL式に相当するもの。

##### Ⅵ群 統縄文時代に属する土器群。(今回は出土していない)

##### Ⅶ群 撥文時代に属する土器群。(今回は出土していない)

## 2 石 器

石器は剥片石器、磨製石器、礫石器に大別し、以下のような器種分類を行った。

剥片石器：石鏃、石槍又はナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、筥状石器、スクレイパー、楔形石器、両面調整石器、石核、Rフレイク、Uフレイク、石器素材、剥片が含まれる。

剥片石器については剥片を素材とする石器を指すが、ここでは剥片石器製作に伴う剥片、石核を含めた。石材は頁岩を主に用い、ほかに黒曜石、安山岩などを用いている。

石槍又はナイフは、粗い両面調整後、細部調整により刃部を作出する石器。先端が尖り、左右対称のものを石槍、左右非対称で、先端が尖らず、刃部が部分的に作出されているものをナイフとした。ただ、後者は石槍の未製品の可能性もあり、破片では区別が困難であることから、同一分類に括った。

石錐は、剥片の一部を両面から細部調整し、尖った先端部を作り出したもの。

つまみ付きナイフは、つまみ部をもち、片面調整により刃部を作出したもの。

筥状石器は、左右がほぼ対称で、基部で幅が狭く、刃部で幅が広く両面調整された石器。刃部は片刃状を呈するものが多い。鋭い剥離面を残し刃部としたトランシェ様石器とされるものもここに含む。

スクレイパーは、剥片を主に片面調整によって刃部を作出したものを指す。刃部の作出の仕方次第で削器、搔器、ノッチなどの別があるが、ここでは一括した。

楔形石器は、両極打法による剥離が見られるもの。

両面調整石器は、剥片の両面が調整されたもので、刃部作出に至っていないものを指す。便宜的にRフレイクと区別した。

Rフレイクは、刃部作出に至っていない剥離を有する剥片を一括した。石器未製品も含む。

Uフレイクは、微細な剥離のある剥片である。

石器素材は、形状が楕円形又は卵形で、両面を調整するが、刃部作出に至っていない石器を指す。深川市内園3遺跡などでみられるものと類似するため、Rフレイクとは区別した。

磨製石器：磨製石斧が含まれる。磨製石器は研磨により刃部を作るもので、石材に、緑色泥岩、蛇紋岩、片岩を用いる。

礫石器：たたき石、すり石、偏平打製石器、北海道式石冠、砥石、石鏃、石皿・台石、加工痕のある礫、原石、礫・礫片が含まれる。

礫石器については、礫を素材とする石器をさすが、ここでは原石、礫・礫片も含めた。石材は主に安山岩、砂岩などを用いる。

たたき石は、礫の一部に敲打痕がみられる石器。

すり石は、礫の一部に擦り痕がみられる石器。縄文時代早期に特徴的な断面三角形のすり石が主体を占める。また、偏平打製石器と北海道式石冠は別に分類した。

砥石は、礫に凹んだ擦り痕がみられる石器。

石鏃は、偏平な礫の長軸両端を打ち欠いたもの。

石皿・台石は、大型の礫に敲打痕・すり痕がみられるものを一括した。

## IV ポンシラリカ1遺跡

### 1 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）八雲北工事区測量図（縮尺1000分の1）を使用した。工事区予定中央線上の中心杭であるS T A. 802とS T A. 803を結んだ線を基準のMラインとした。4m毎に西側にはL、K、J…、それより北側に4mごとに101、102、103…、とした。発掘区ではこの4m方眼を基準にし、その南西側の交点（図では左上）のアルファベットと数字の組合せで、グリッドの名称とした。（例；M-100又はM100）。

また、調査の必要に応じて2m方眼に分割し、遺物の取り上げを行った部分もあり、そこではグリッドの基準（南西角）から反時計回りにa、b、c、dとした。（例；M-100-a又はM100a）。

なお、この方眼の平面直角座標は第Ⅵ系で、以下の通りである。

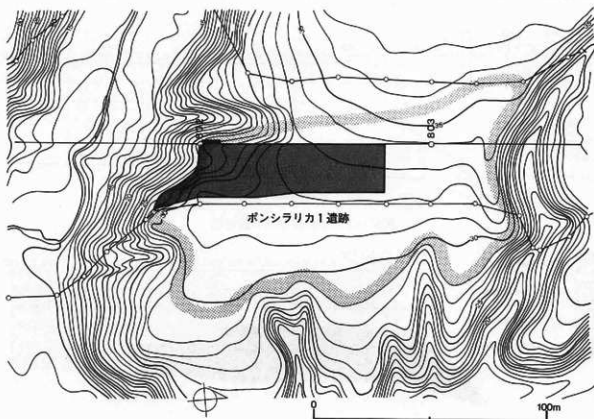
S T A. 802（調査区M-100）	X = -184, 852, 7484	Y = +2, 493, 2275
S T A. 803（調査区外）	X = -184, 753, 1450	Y = +2, 502, 1222

### 2 調査の方法

#### (1) 発掘調査の方法

調査は3次に分けて行われた。

平成11年度は8月5日まで2部5課によってトレンチ調査が行われた。トレンチは将来の調査区を

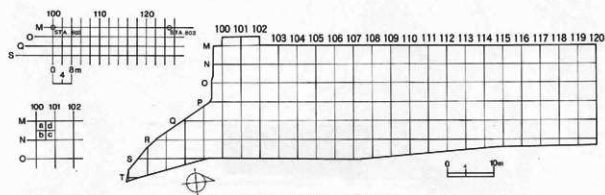


図Ⅳ-1-1 調査区設定図

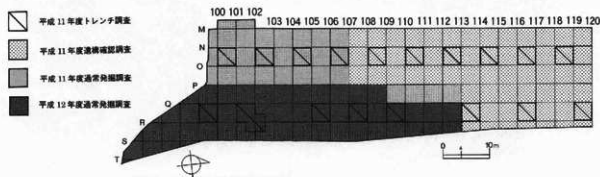
見越しての4m四方のグリッドを規準とし、NラインとQラインに沿って行われた。調査に先立って、重機により、Nラインのグリッド列及び、Qラインのグリッド列について表土除去を行った。予備調査であるため、包含層への影響を考慮し、抜根は行わなかった。表土は基本層序の項目で述べるところのI、II層を除去する事を目的とした。調査区の設定杭、4m方眼の規準杭の設定は業者に委託した。全体の4分の1を調査する事を目的とし、Nラインについては、N-100、102、104、106、108、110、112、114、116、118の各グリッドを、QラインについてはQ-99、101、105、107、109、113、116、119の各グリッド、合計18グリッドを層別的に掘り下げた。その結果、調査区南半分側に遺物分布が集中する事が明らかとなった。また、遺構としては、土壌の可能性のある黒色土の落ち込みを2か所と、フレイク・チップの集中を2か所検出した。調査区の西側には密に礫が詰まった層がローム直上に分布していた。M~O-107ライン、P~S-113ライン以北を遺構確認調査範囲904㎡、それ以南を通常発掘1056㎡とするものと判断した。遺跡は無名の沢に面する台地の縁辺に沿って南側へと広がりを持つという判断である。

平成11年8月23日以降、本調査が1部2課によって開始された。調査に先行し、重機によって、調査区全体について、表土の除去及び抜根が行われた。調査区の設定杭、4m方眼の規準杭の設定は業者に委託した。NラインとQラインのグリッドに関連する杭については、再度の表土除去によって、狂いを生じている可能性があったため、再度確認及び打ち直しを行った。表土除去は通常調査範囲については、基本層序のI、II層を除去、遺構確認調査範囲については基本層序VI層中位まで除去する事とした。

調査はまず遺構確認調査を行った。トレンチ調査の結果設定した調査範囲を勘鑑とスコープによって精査し、黄褐色ローム質土中に入り込む黒色土の落ち込みから、遺構の有無を確認した。明瞭な平



図IV-2-1 グリッド設定図



図IV-2-2 調査方法



面形の輪郭を持つ黒色土の落ち込みは確認できなかった。検出した黒色土の落ち込みは全て風倒木の可能性があったが、確認のためサブトレンチを設定し、再確認を行なった。その結果、遺構確認調査範囲について、遺構はないものと判断した。

次に通常発掘調査範囲について調査を開始した。今年度の目標としては、Pラインより西側を終了させることを目標とした。基本層序Ⅲ層からⅣ層上面については、移植鍬による3～5cmの深さで層位的に掘り下げ、鋤簾による面的な確認を心がけた。Ⅳ層中位からは遺物の出土が少なく、多くの礫が入り込んでいたためスコップと鋤簾を多用した。北側(107ライン側)から南側(100ライン側)に向かって調査を進めた。調査区の西側Mラインにそって、無名の沢の支流として位置する小さな沢地がある。そのため通常発掘調査範囲の西の外側は開析されている。包含層調査の際、調査範囲内にも、さらにより小さな無名の沢に流れ込む形の沢地地形がOラインに沿っている様を検出した。調査区内の沢地地形について、101ラインに設定したメインセクションからは、Ⅲ層上面に、Ⅱ層がラミナ状に堆積しているのを確認した。Ⅲ層中位で、沢地地形に廃棄した土器を確認し、図化して取り上げた。Ⅲ層下位から礫が多く検出し始め、Ⅳ層下位からⅤ層上面において川床と推定できる礫層を確認し、周囲のⅤ層がグライ化している様子が見てとれた。トレンチ調査の際の礫層はこの川床であった。調査区は風倒木の凹みから縄文時代中期前半Ⅲ群a類土器の集中ままとまった出土状況が数か所あった。そのような土器が集中しているところでは先述の2mメッシュでの取上げを行った。また、調査区MラインL100グリッドの壁面から、にまとまって土器破片が出土し、拡張したところ、3個体のⅢ群a類土器と被熱した白石が、風倒木の凹みにまとまっていた。この出土状況から調査区内外西側の崖線まで、遺物出土の可能性があり、調査区外について、予定の範囲より一部拡張、及びサブトレンチによる確認を行ったが、それ以上の目立った遺物の出土はなかった。

当初の目標を終了した後、P109～112グリッドの包含層について掘り下げを行った。また並行して、来年度の掘調査範囲内にあるトレンチ調査時のトレンチを越冬のため、ブルーシートで覆い、養生に努めた。両方の作業が終了した段階10月25日で、現場での調査を打ち切った。合計の調査面積は1352㎡である。

2000年度6月13日から7月13日にかけて残り608㎡についての調査を行なった。まず人力で、重機で除去しきれなかった表土あるいは融雪とともに動いてきた土砂を除去した。その後調査区東(Sライン)側から西(Pライン)側に向かって調査を開始した。移植鍬によって3～5cmの深さづつ層位的に掘り下げた、かつ、鋤簾によって面的な確認を行った。Ⅲ層上面からⅣ層上面にかけてI群土器を主とする遺物の出土が顕著であった。また同じ層位から掘り込まれたと考えられる堅穴住居2軒と、土壇2基を検出した。いずれも縄文時代早期の遺構と考える。フレイク・チップ集中については、Ⅲ層上面からの検出であり、縄文時代早期より新しいものとした。また昨年度検出したOライン沢に面したQ103グリッドを中心とする斜面と、無名の沢に面したR97グリッドを中心とする斜面の2ヶ所からは、廃棄を思わせる遺物の集中があった。

以上のように今年度は調査面積に対して昨年度より遺構と遺物の集中が目立ったため、2mグリッドでの取上げを行った。掘り込みを持つ遺構について、住居の場合、基本的に出土位置、標高、層位を記録したが、その他、遺構を覆う自然堆積のもの、フレイク・チップ集中については、一括して取り上げた。

## (2) 整理の方法

現地では、遺物取り上げの後、水洗・注記し、大まかな分類をした後、遺物台帳を作成した。遺物台帳は下書きをした後、マイクロソフトエクセルに入力し、集計した。なお、注記は以下のようにした。

## 包含層出土遺物

平成11年度；ボンシラ1—（グリッド）—（遺物番号）—（層位）

平成12年度；ボン1 —（グリッド）—（遺物番号）—（層位）

## 遺構出土遺物

平成11年度；ボンシラ1—（遺構名）—（遺物番号）—（層位）

平成12年度；ボン1 —（遺構名）—（遺物番号）—（層位）

冬季の室内整理作業では、台帳の補正、土器の接合作業、剥片類の接合作業、遺物の実測及び作図、集計、記録簿の整理を行った。

土器については分類の見直しを行い、接合を行った。接合にあたっては同一個体の把握に努めた。接合により器形の復元が可能であったものについては実測図を作成した。特徴的な破片資料については拓影図及び断面を示した。土器破片について再成形の造作がみられたものについては、再生土製品の名称で土製品として扱い、展開方法もそれに準じた。しかし、遺構出土の再生の造作がみられたものについては、製品として扱うには不備な点が多く、土器破片として図は展開した。

石器については分類の見直し後、完形品を中心に器種や形態に隔たりのないよう代表的なものを選び出し実測した。また、掲載石器については長さ、幅、厚さ、重量を計測した。また、剥片資料については石器も含め、同一母岩の識別に努めながら接合作業を行なった。接合資料の掲載は剥離課程がわかるものを中心に、接合状況の良好なものを掲載した。

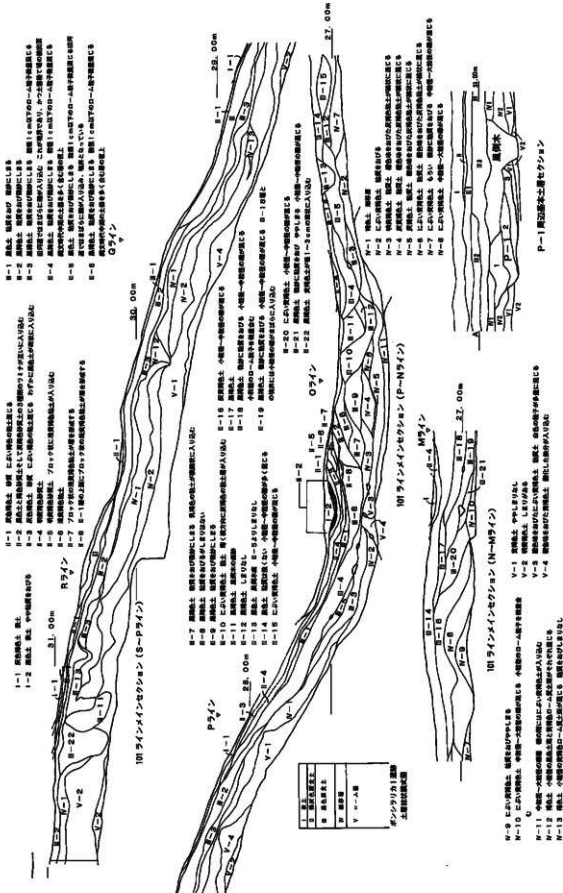
取納については、報告書掲載のものは図面に対応するように1点づつ取納した。それ以外については遺構出土ごとに分類別に取納し、包含層出土のものは、アルファベットラインごとかつ層位別に取納した。

## 3 基本層序

包含層の基本層序はローマ数字でⅠ～Ⅴ層に分かれる。Ⅰ層は表土である。Ⅱ層は灰色褐色をした腐植土であり、Ⅲ層は黒色の腐植土である。Ⅴ層は黄褐色のローム質土であり、Ⅳ層としたのはⅢ層からⅤ層への漸移層である。恒常的には、Ⅲ層は下位について褐色味が強かった。上位及び中位を特にⅢ1層（101ラインのロングセクション図ではハイフン付きでⅢ-1層とした。）下位を特にⅢ2層とした。区別がつかない場合はⅢ層としてまとめた。

遺物の取上げにあたってはⅢ層の上面、中位、下位（Ⅲ2層に相当）の概略3回に分けた。0ライン以東あるいは以南の台地上については、Ⅲ2層以下Ⅳ層にかけて縄文時代早期の土器が目立って多い。0ライン以西、以北ではⅢ層の上から下にかけて縄文時代中期の土器が目立つが、これは風倒木や流水による遺物の上下の攪乱が激しいと考える。実際の縄文時代中期の面はⅢ層中位であると考える。旧河道が埋まりきった、あるいはL100グリッドで縄文時代中期の土器がまとまって出土した層位がⅢ層中位である。0ラインの旧河道に面した斜面及びその際はメインセクションが示した通り土が動いており、一連のフレイク・チップ集中に伴う土器が時期比定の根拠と成りえないように、出土した遺物がそのまま土層の時期を表すとは考えにくい。

101ラインのロングセクション図では早期の遺構が立地する台地上から0ライン上の旧河道と称した沢地形も含めた土層堆積状況である。急斜面でかつ風倒木もいくつかかかっており、土の動きが激しいためⅠ～Ⅴ層を細分してはいるが、基本的には基本層序のローマ数字が示すところのもので構成されている。



図IV-3-1-1 メインセクション図

#### 4 遺構と遺構出土遺物

##### 概 要

今回調査した範囲からは住居跡2軒(H-1, 2)、土坑2基(P-1, 2)フレイク・チップの集中7か所(FC-1~7)の遺構を検出した。

時期について、住居跡は、掘り込み面の層位、及び、覆土中の土器から、縄文時代早期後半東銅路Ⅲ式又はその直前直後と推定できるものである。新旧関係については不明である。土坑P-2は中茶路式の墓と考えたものである。隣接したP-1は、類似した規模と形態であり、埋め戻された可能性があるため、P-1と同様な可能性がある。フレイク・チップ集中は他の遺構の掘り込み面より明らかに上位からの検出である。縄文時代早期後半より新しい。調査区内から、出土している土器を踏まえる、縄文時代前期、あるいは中期の遺構と考える。

##### (1) 住居跡

H-1 (図Ⅳ-4-2、3、表Ⅳ-4-1~5、図版13、18)

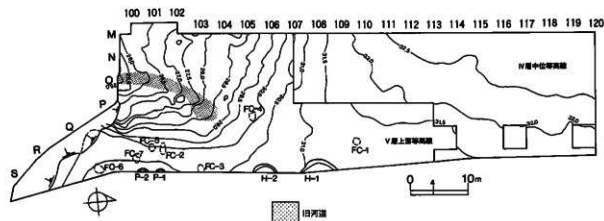
位置 R-108

規模 (324)/(296)×(102)/(084)×36cm

平面形 隅丸五角形

確認 表土除去終了後、R107、R108グリッド、調査区南東壁において基本層序Ⅱ層の落ち込みがあった。サブトレンチを入れて確認したところ、それが、Ⅲ、Ⅳ層を主体とする土の落ち込みであることを確認した。

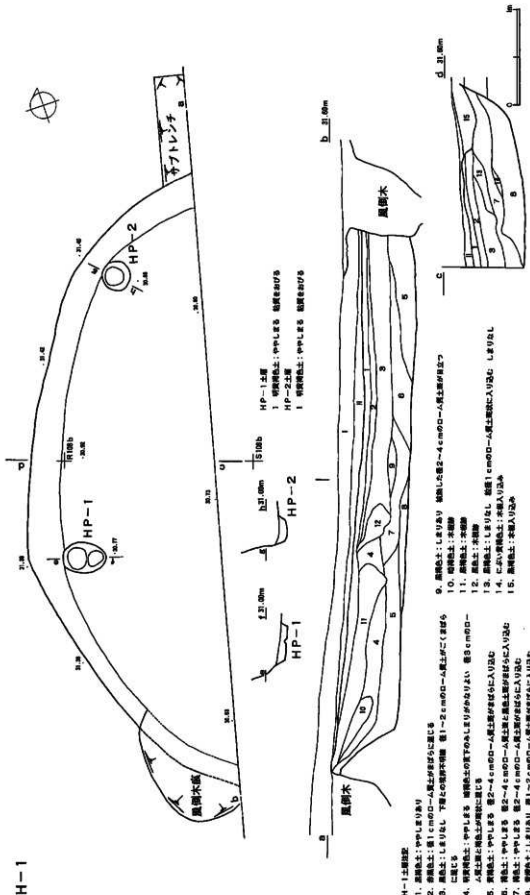
壁・床 東側には明瞭な壁面も検出した。108ラインにベルトを残し、落ち込みへの覆土を掘り下げた。黄褐色の覆土5層、8層を掘り下げたところしまりのある黄褐色土を検出した、北西側に広げていくと立ち上がり始め、基本層序Ⅲ層まで到達した。さらにサブトレンチを調査区壁面に沿って入れ、床面と壁面であると判断した。落ち込みの南西側は風倒木によって破壊されていた。調査区外へ続く遺構であり、規模から住居と判断した。形状は検出した2か所の角がおおよそ120度の角度を持つ事から五角形であると判断した。



図Ⅳ-4-1 遺構配置図

表Ⅳ-4-1 検出遺構一覧

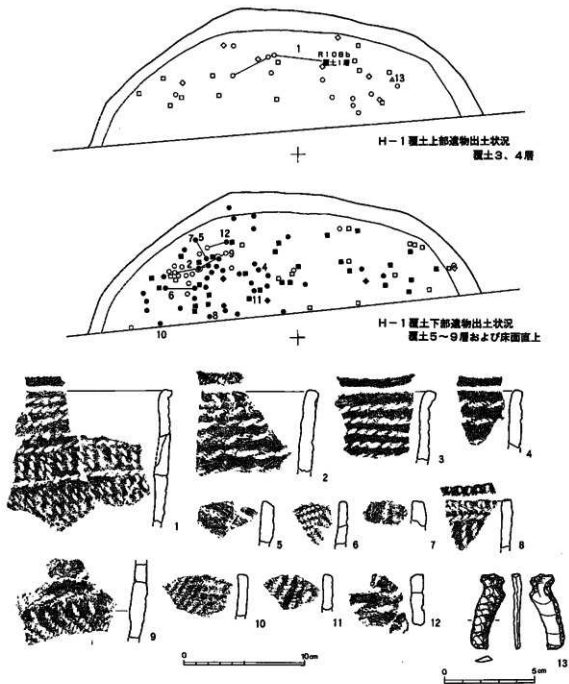
検出層位	H	P	FC
Ⅲ層上面			7
Ⅳ層上面	2	2	
合計	2	2	7



H-1

- H-1 土層図説
1. 黒褐色土：中押し盛りあり
  2. 黒褐色土：厚1 cmのローム層が厚く見られる
  3. 黒褐色土：しりとりなし、下層のローム層がごく薄く見られる
  4. 黒褐色土：中押し盛り、黒褐色土の厚さが中押し盛りより多い、厚3 cmのローム層が厚く見られる
  5. 黒褐色土：中押し盛り、厚2~4 cmのローム層が厚く見られる
  6. 黒褐色土：中押し盛り、厚2~4 cmのローム層が厚く見られる
  7. 黒褐色土：中押し盛り、厚2~4 cmのローム層が厚く見られる
  8. 黒褐色土：しりとりあり、厚1~2 cmのローム層が厚く見られる
  9. 黒褐色土：しりとりあり、厚2~4 cmのローム層が厚く見られる
  10. 黒褐色土：本層跡
  11. 黒褐色土：本層跡
  12. 黒褐色土：しりとりなし、厚1 cmのローム層が厚く見られる
  14. 七かき内黒褐色土：本層入り込み
  15. 黒褐色土：本層入り込み

図IV-4-2 H-1



図Ⅳ-4-3 H-1 出土遺物

炉 跡 明瞭な炉跡はない。しかし、埋没課程に何らかの行為があったのか、覆土9層に焼土が混じっていた。

覆 土 8層に分層し、木の根の入り込みなどを示す為に、補助的に15層まで分層した。

柱 穴 2基確認した。床面の明黄褐色ローム質土により褐色味の強い土が2ヶ所入り込んでいた。半截、住居床面と同じしまりのあるローム質土を検出し、住居の付属遺構と判断、完掘した。いずれも住居プランの角部に対応する位置にあった。調査終了後、床面を10cm掘り下げて他の付属遺構を探したが、確認できなかった。

遺 物 土器は130点出土した。I群b1類土器は120点、I群b類土器は5点、II群b類土器は5

点出土した。剥片は72点出土した。礫は13点出土した。合計216点の出土である。

3段階に分けて取り上げた。1段階目は、覆土1、2層からの出土遺物を主とした。1層は、住居灰絶後の凹みへの覆土3層を主体とする落ち込みである。2層はⅢ-2層の落ち込みの土層である。この段階では、R108bグリッド調査区壁際に遺物分布の中心がある。下の覆土からは出土していない円筒下層式土器の破片がこの層から出土している。

次にⅢ-3層の流入である覆土3層を主体とする、「覆土上部」と図示した遺物を取り上げた。今回、住居覆土上部、下部及び床面から出土した土器の主体となるものは、I群b1類、東銅路Ⅲ式が主体である。それらの特徴として土器破片を円形ないしは四角形等の形に整えて、再利用する再生土製品を造ろうとしたのか、ほとんどの遺物について、打ち欠きや擦りの痕跡が確認できる事である。上部出土遺物についてもその傾向が確認できた(掲載遺物1)。

覆土下部出土遺物とは覆土4層、5層からの出土遺物である。同様に東銅路Ⅲ式の破片について再生土製品を打ち欠いて製作したと考えられる接合状況が伺えた。だが、定型的な形状ものはなかった。そのような土器破片を12点図化した。石器や剥片等については1点タールが付着したフレイクが出土したほか、めばしい接合関係等はなかった。つまみ付きナイフを1点図化した。出土遺物は覆土下位と床面に接合状況、覆土上位の2面で接合状況が良好であった。

1は東銅路Ⅲ式である口唇部はナデ調整を施した後、LRL縄線を縦に、その後、横に施す口唇はナデ調整である内面は横方向のナデ調整である接合破片の中心にある孔は意図的に打ち欠いたものの可能性がある。胎土にはやしまりがあり、繊維、粒径1mm以下の白色砂粒、小石粒、海綿骨針が混じる割れた後に被熱等があったと考えられ、煤がついている個体とそうではない個体がある。2は水ひしたかのようなキメの細かい胎土である表面はナデ調整で擦り消した後、LRL縄線を縦に連続して口唇部に施した後、横方向に縄線を連続して施す口唇部にはRL縄線を施す内面は横方向のナデ調整である繊維、粒径1mm以下の白色砂粒、小石粒、海綿骨針が混じる。

5、6、7、9、10、11、12は水ひしたかのようなキメの細かい胎土である繊維、粒径1mm以下の白色砂粒、小石粒、海綿骨針が混じる。9は縁を研磨及び破砕した痕跡がある。12は研磨後、破砕、破砕後、研磨している。6は側縁が研磨されている。研磨後、破砕している。5についても側縁が研磨されている。11は研磨調整が進んで、製品としてより完成に近づいている。10は打ち欠き調整である。より製品に近づいている。胎土は砂粒が目立ち、焼成は良好である。

3、4、8は口縁部破片であるナデ調整後、縄線によって施文する。水ひしたかのようなキメの細かい胎土である繊維、粒径1mm以下の白色砂粒、小石粒、海綿骨針が混じる。3、4は口唇が無文である。8は1縄によって連続押圧を行っている。また他に比べて焼成は良好である。13はつまみ付きナイフである。珪質分の多い硬質頁岩の、縦長剥片を素材として用いる。表面について剥離が全面におよぶ。裏面右側縁については連続する剥離が走る。調整面(西田分類)と考える。表面右側縁は搔器様な急角度の刃部形態を持つ。稜線は直線的で整然としている。つまみ部分は両面とも細かい剥離が走り丁寧に作り出す。つまみ部分の軸を垂直にすると刃部の軸は斜めとなる。

時期 床面遺物と周囲の遺物出土状況から、東銅路Ⅲ式の時期と想定できる。

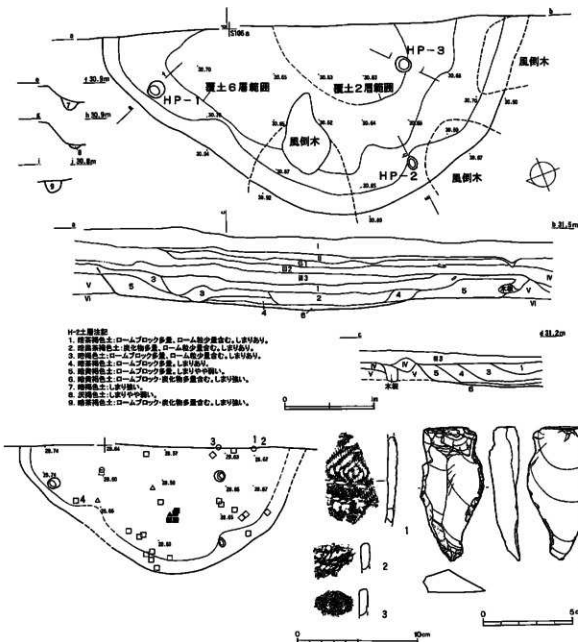
H-2 (図M-4-4、表M-4-1、2、4、5、図版14、18)

位置 R-105・106、S-105・106

規模 (220)/(230)×(196)/(204)×28cm

平面形 隅丸五角形か

H-2



図IV-4-4 H-2及びH-2出土遺物

確認 R-105・106グリッドの表土を除去した時点で、II層の落ち込みとして確認した。  
 壁・床 IV層上面に遺構構築面が存在したものとみられる。明瞭に掘り込まれるが、南側・西側は風倒木に破壊されていたため、壁は部分的に検出されたに過ぎない。確認された部分において壁はやや急な立ち上がりを検出した。床の直上には覆土6層とした良くしまる暗黄褐色土が堆積しているのが確認された。貼り床と考えられる。

炉跡 明瞭な焼土は認められず、炭化物の集中が床面中央付近に見られた。

覆土 6層に分層した。覆土2層は炭化物を多量に含むもので、住居跡の窪み中央に見られた。



平面形が楕円形。覆土3層、4層から掘り込まれた土坑とみられる。

柱 穴 3基確認した。HP-1・2は壁に沿うもので、浅いものであるが僅かに内傾していた。HP-3は他の2基に比べやや深く、ほぼ垂直の掘り込みであり、主柱穴であった可能性がある

遺 物 覆土から土器3点、剥片17点、剥片石器2点、礫5点が出土している。床面からは剥片石器1点、剥片4点が出土している。

土器については東銅路Ⅲ式あるいは摩滅によって判然とはしないものの東銅路Ⅲ式によく似たものみの出土である。接合する破片はなかったが、胎土的に類似しており同一個体の可能性が高いものがある。土器破片3点を図化した。1は結束第1種羽状縄文を地紋に持ち、ナデ調整を施した後LR縄線を施す。2も同一個体と考える。焼成は良好で、1mm以下の白色小砂粒を含む内面はナデ調整である丁寧な調整であるが、輪積み痕跡が残る。3は磨耗が著しいが、再生土製品の可能性がある縁辺は摩滅によって整った曲線の縁辺形態を持つ。

石器については、スクレイパー2点、石鏃1点、石槍1点はいずれも破片である。フレイクは珪質頁岩がほとんどで、目立って接合はしなかった。スクレイパー1点を図示した。4は硬質頁岩製で、縦長剥片の素材形状を生かす。表面右側縁に連続する押圧剥離が施され、刃部下端は両面調整である。右縁辺に浅い剥離が連続する、くびれ部分は相対する左側縁の素材元来のくびれと対応して、つまみ付きナイフのつまみ部分と共通した用途を思わせる。包含層からも類例がある(IV-5-15-28)。

時 期 遺物がいずれも住居廃絶後のものであるため、正確な時期を明らかにすることはできない。しかし、覆土出土遺物からすると縄文時代早期後半東銅路Ⅲ式以前と推定できる。

## (2) 土 坑

2基とも、調査区外へ広がっている。いずれも規模的に同じと考えられ、P-2が中茶路式の土坑墓である可能性があり、規模と検出面から、P-1についても同様な可能性がある。

P-1 (図M-4-5、表M-4-1、2、4、5、図版15、19)

位 置 R-101

規 模 (88)/(68)×(24)/(18)×14cm

平面形 隅丸方形か

確 認 包含層調査中、R100、R101グリッドの壁際、覆土IV層上面において、黒色土の入り込みを検出した。調査区壁面にそって、サブトレンチを入れ、黒色土を掘り下げたところ、ローム質土が斑状に混じった覆土が続いていた。さらに掘り下げると、基本層序VI層下位がややしまりを帯びて検出されそれをおっていくとⅢ層まで立ち上がってきた。調査区壁面でもその様子が確認できた。南壁は風倒木によって壊されているが、土壌であると判断した。遺構は調査区外へと続いている。

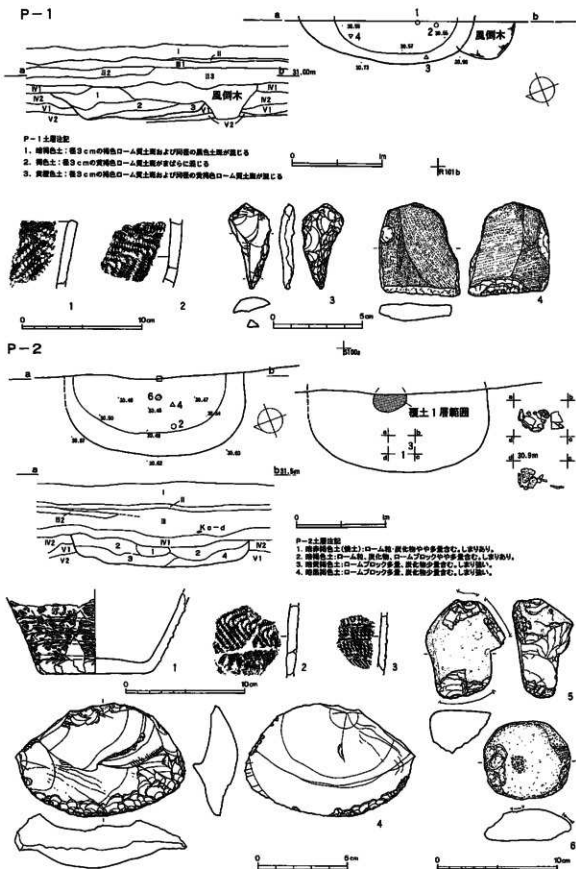
壁・床 IV層中に遺構構築面が存在したものと見られる。残存する壁面、床面について、掘り込みは明瞭である。

覆 土 3層に分層した。覆土にはバミスが混ざり、ややしまりがある。埋土の可能性はある。

遺 物 土器はI群b1類のみ5点出土した。剥片石器は石鏃が1点出土する。剥片は2点出土、礫石器は砥石が1点、合計9点の出土である。土器は、覆土中に混ざり込んだ、東銅路Ⅲ式土器が出土した、フレイクは珪質頁岩製のものである。土器片1点、石器2点を図化した。

1は口縁部破片である。ナデ調整の後、LR縄文を施す。口唇部はナデ調整によって丁寧に成形を行う。水ひしたかのようなキメの細かい胎土である繊維、粒径1mm以下の白色砂粒、小石粒、海綿骨針が混じる。混和材の種類は多いがそれぞれが目立って多いわけではない。2は砂粒及び小石が目立つ胎土である。胎土はしまりがある。内面はナデ調整で煤が付着する。

IV ポンシラリカ 1 遺跡



図IV-4-5 P-1, P-2 及び出土遺物

3は石錘である。珪質頁岩製である。表面右側縁と、裏面両側縁から連続する押圧剥離を施す。先端部には回転したような使用痕がある。4は砥石で、凝灰岩製である。2面を砥石として使用する。石斧を調整したかのような凹面が3ヶ所、矢柄研磨器を思わせる溝が1条ある。

時期 時期を確定できる遺物の出土状況はない。隣接するP-2と遺構構築面及び規模がよく似ているため、縄文時代早期後葉、中茶路式並行の可能性がある。

#### P-2 (図M-4-5、表M-4-1、2、4、5、図版16、19)

位置 R-100

規模 200/170×(85)/(60)×22cm

平面形 隅丸方形か

確認 R-100グリッドのIV層を掘り下げる途上で、落ち込みと焼土を確認した。

壁・床 IV層中に遺構構築面が存在したものとみられる。掘り込みは明瞭で、壁面は全体的に急激にたちあがり、底は鍋底状であった。

覆土 4層に分層した。覆土1層は焼土で、覆土2層が被熱したとみられる。覆土2・3層はロームブロックを多量に含み、しまりが強いことから埋土とみられる。したがって墓の可能性が高い。

遺物 土器は合計42点の出土である。I群b3類が28点の出土である。I群b類14点である。剥片石器はスクレイパーが1点である。剥片は8点、礫石器は石錘が1点、たたき石が2点出土、合計53点の出土である。覆土上部から、遺構に伴う、残存率の高い中茶路式が出土した。他は覆土に混ざり込んだ東銅路Ⅲ式土器である。先述の中茶路式を含め、土器を3点、石器を3点図化した。

1は中茶路式土器でP-2の土壌覆土上部からの検出である。残存率が高い底部破片であり、半完形品とも言えるものである。意図的に打ちかかれたと想定できる、直線的な壊されかたで、底部の1/6も欠いてある。燃りの細かい1縄を施した後、ナデつけてその上に微隆起線を貼り付ける。貼り付けた上からは爪による押圧が連続して施される内面、底面はナデ調整である器壁は薄い、胎土はやや粗く、繊維が目立ち、少量の小石が混じる。2は打ち欠きによって調整された再生土製品の未製品である。結束羽状縄文地紋で、胎土はしまりがあり、砂粒をよく含む。内面には煤が付着する。3は中茶路式である。RL縄、LR縄による絡糸体を器面に施した後、微隆起線を貼り付ける。胎土には砂粒が目立ち、しまりが無い。

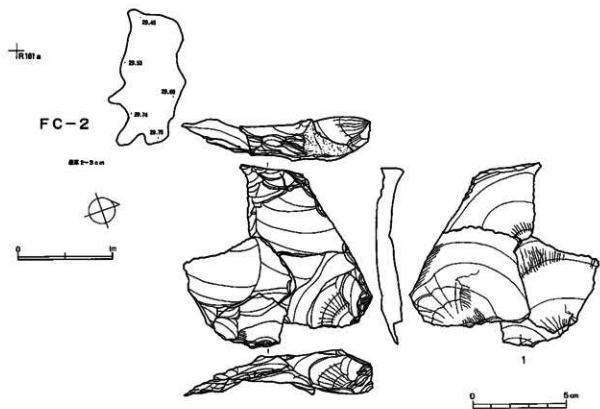
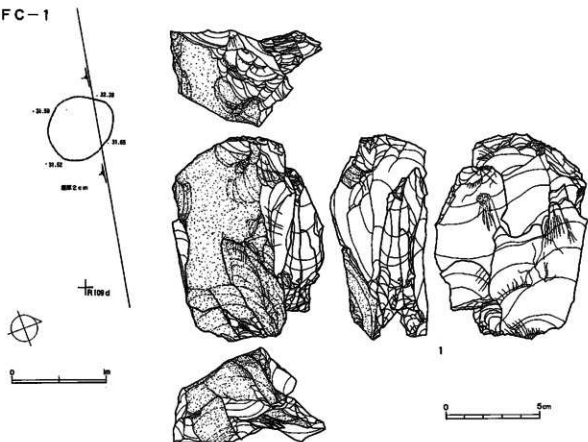
4はスクレイパーである。珪質頁岩製で、表面左側縁に押圧剥離が連続して施される。裏面縁の一部にも剥離が巡る。5はたたき石である。安山岩製で、楕円礫の両端にこう打痕跡が残る上端部を側縁と想定すると右側縁のこう打面を断面三角形の擦り石と解釈もできる。使用中あるいは、製作途中の擦り石をそのまま転用した可能性がある。6は安山岩製の石錘である。敲打痕と擦れについては、摩滅、たたき石への転用のどちらの可能性もある。両端は対向する片面からの打ち欠きである。

時期 覆土上面に半完形の中茶路式土器がみられたことから、縄文時代早期後半中茶路式期とみられる。

#### (3) フレイク・チップ集中

FCはいずれも基本層序Ⅱ層を除去した時に、検出した剥片の集中である。7か所いずれも包含層調査の際検出した旧河道をとりまく、台地の縁辺に並ぶように位置する。Ⅲ層上面を5cm下げた段階で、剥片の分布状況がより明らかになった。具体的な時期については不明だが、Ⅲ層上面からの検出であり、これらが形成された面もⅢ層上面と考える。比較的早期の土器が多い調査区において、早期

FC-1



図IV-4-6 FC-1, FC-2及び出土遺物

の土器が主だつて出土する層位よりあきらかに上位である。黒色土が発達した層位では前期、中期の土器が目立つ。それらを含め、遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものとする。

#### FC-1 (図M-4-6、表M-4-1、2、5、図版20)

位置 S108 規模 35×32cm 平面形 不定形

特徴 トレンチ調査の際、包含層を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面において、剥片のまとまりを検出した。そこで周囲を精査し、剥片の分布範囲を確認した。厚さ2cmにわたって、フレイクが59点、石核が1点出土した。フレイクは珪質頁岩である。

接合の結果、接合資料は4点あるが、3枚以上接合した資料は1点である。いずれも似た石質の、珪質頁岩である。そのうち1点を図化した。1は珪質頁岩製である。部分はないが縦長剥片を主に取っていたことが窺える。接合した剥片に使用痕はないが、調整面を持つものが2点あり、上下については打面の転移が行われていた。図示しなかった3点は、調整面を調整がみられず、折損を接合したものが2点、調整面を持ち、継続して剥片を取っている様子が窺えるものが1点である。

時期 周囲の遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものとする

#### FC-2 (図M-4-6、表M-4-1、2、5、図版2、20)

位置 P101d、R101a 規模 69×34cm 平面形 不定形

特徴 トレンチ調査の際、包含層を掘り下げていたところ、Ⅲ層上面において、剥片のまとまった出土を検出した。そこで周囲を精査し、剥片の分布範囲を確認した。厚さ3cmにわたって、剥片石器及びフレイクが866点出土した。まとまりには再生土製品を含め、縄文時代早期の土器が9点中期の土器が19点混じっていた。他に折損品の、黒曜石製石鏃もある。斜面際であり、流れてきたものとする。石質は視覚上の判断では、3種類以上の石質の頁岩が混じると推定できる。1は剥片の接合資料を図化したものである。硬質頁岩で、4方向からの剥離を取った様子が想定できる。打面の転移が頻繁にあった事が想定できる1点出土したRフレイクも本品と同一素材であるが、接合しなかった。R98d2の石核はよく類似した頁岩である。図化しなかったものは4点あり、3点は図化したものと同質の素材で、折損した剥片の接合である剥離自体を取った際の折れを想定する。残るもう1点については別の頁岩素材であり、折損を接合したものである。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものとする

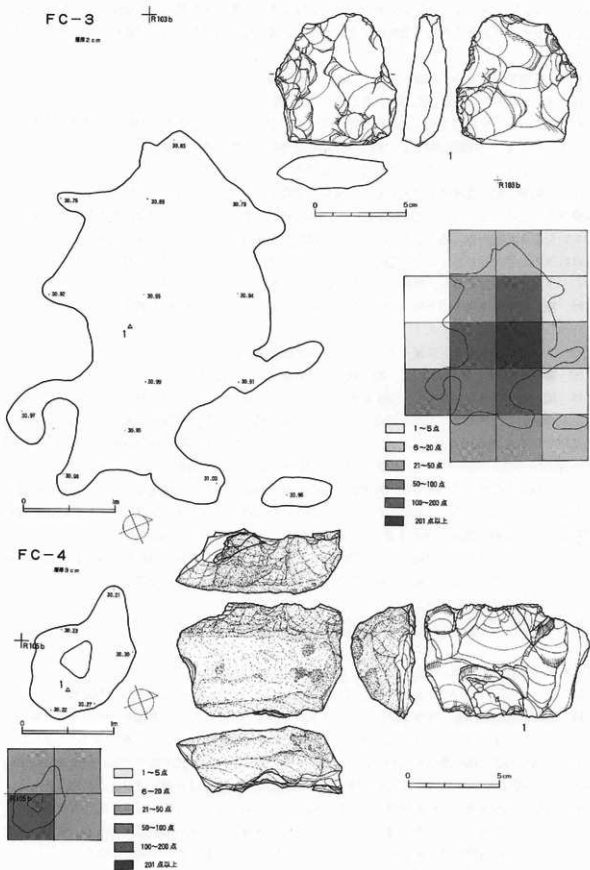
#### FC-3 (図M-4-7、表M-4-1、2、5、図版9、20)

位置 R102c、R103b、S102d、S102a 規模 200×124cm 平面形 不定形

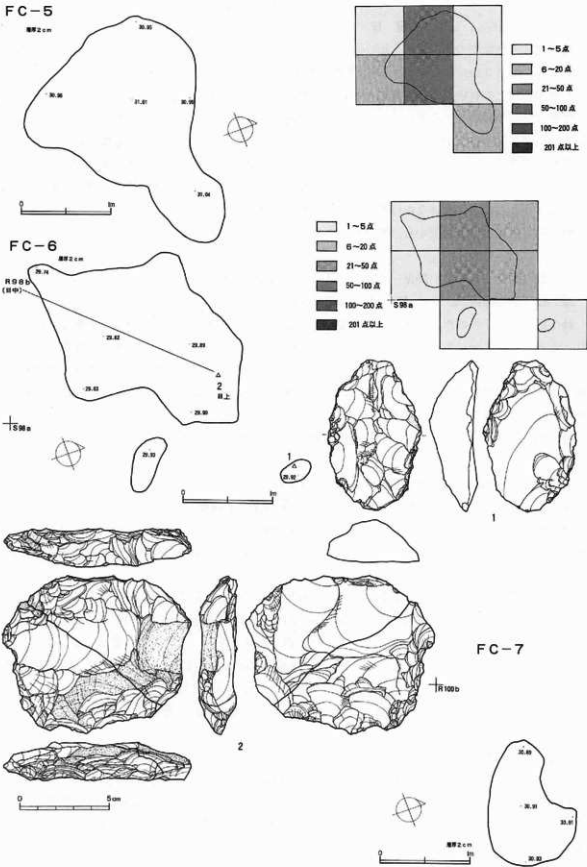
特徴 表土除去の際、Ⅲ層上面からフレイクのまとまりを検出した。周囲を3cm掘り下げ精査したところ、厚さ2cmにわたって、1160点のフレイク及び剥片石器を検出した。剥片1157点、Rフレイク2点、剥片石器は両面調整石器が1点である。まとまりには縄文時代早期の土器が15点まじっているが、斜面の際であり、流れてきたものとする。60点出土した礫片は頁岩に混じる不純物とする。

石質は視覚上の判断で、2種類以上の石質の頁岩が混じると推定できる。いずれも珪質分が高く、良好な素材と言える。接合状況は思わしくない。1は珪質頁岩製の両面調整石器である。全面に剥離が及び、刃部様の調整痕跡がある刃部としての使用痕跡はない。左右からの調整が全面におよぶ。左側縁については潰れ痕跡がある。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものとする



図IV-4-7 FC-3, FC-4及び出土遺物



図IV-4-8 FC-5, FC-6, FC-7及び出土遺物

FC-4 (図M-4-7、表M-4-1、2、5、図版11、20)

位置 P105 a、b 規模 80×50cm 平面形 不定形

特徴 表土除去の際、Ⅲ層上面からまとまったフレイクを検出した。周囲を3cm掘り下げ精査したところ、厚さ3cmにわたって、剥片が239点、剥片石器は石核が1点、合計が240点出土した。

石質の視覚上の判断で、2種類以上の石質の頁岩が混じっていると推定できる。素材は珪質分が高いが織状構造が観察できる素材が目立った。接合資料は6点である。いずれも良く似た石質の頁岩である。そのうち1点を図化した。1は珪質頁岩製の石核である。上端下端から剥離を取ろうとしている不純物が多いためか、小型の横長剥片のみとれている。散逸していた剥片もそのようなものが多い。図化しなかった5点のうち4点は折損が接合したものである。残る1点は調整面を持ち、継続して剥片を取ろうとしたが、良好な剥片素材が取れなかった様子がうかがえる。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものと考え

FC-5 (図M-4-8、表M-4-1、2、5、図版11、46)

規模 R100 b、c 位置 130×100cm 平面形 不定形

特徴 表土除去の際、Ⅲ層上面からまとまったフレイクを検出した。周囲を3cm掘り下げ精査したところ、厚さ2cmにわたって、剥片141点、Rフレイク2点合計143点のフレイクを検出した。

まとまりのなかには縄文時代早期の土器が13点混じっているが、斜面際であり、流れてきたものと考え。石質の視覚上の判断で、2種類以上の石質の頁岩が混じっていると推定できる。いずれも珪質分が高く、良好な素材と言える。接合状況は思わしくない。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものと考え

FC-6 (図M-4-8、表M-4-1、2、5、図版15、20)

位置 R98 b 規模 140×99cm 平面形 不定形

特徴 表土除去の際、Ⅲ層上面からフレイクが多数出土した。周囲を3cm掘り下げ精査したところ、厚さ2cmにわたって、剥片が84点、剥片石器は両面調整石器が1点の合計85点を検出した。同一面で流れ込んだと考えられる縄文時代早期の土器が1点ある。

石質の視覚上の判断で、2種類以上の石質の頁岩が混じっていると推定できる。いずれも珪質分が高く、良好な素材と言える。1は珪質頁岩製の両面調整石器である。両面ともに縁辺から刃部を調整する。刃部としての使用痕が認められる。2は珪質頁岩製の石核である。表面右側の破片は4m離れた斜面下側の包含層、(R98 b) から出土、接合した。潰れ痕跡がある。図化しなかった2点の接合資料は折損を接合したものである。その剥離自体を打ち欠いた時の折れと考える。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものと考え

FC-7 (図M-4-8、表M-4-1、2、5)

位置 R100 b 規模 70×50cm 平面形 不定形

特徴 表土除去の際、Ⅲ層上面からフレイクが多数出土した。周囲を3cm掘り下げ精査したところ、厚さ2cmにわたって、56点のフレイクを検出した。石質の視覚上の判断で、2種類以上の石質の頁岩が混じると推定できる。いずれも珪質分が高く、良好な素材と言える。

時期 遺物の出土状況から、縄文時代前期あるいは中期のものと考え



## 5 包含層の遺物

### (1) 土器・土製品 (図Ⅳ-5-1~12、21、表Ⅳ-5-6、7、図版21~30)

包含層から土器は6470点出土した。そのうちⅠ群土器は4450点、Ⅱ群土器は47点、Ⅲ群土器は1点出土した。分類不能な不明土器は70点である。土器の分布について中心は無名の沢から、に面した段丘への斜面、そしてOラインの沢地形の2ヶ所である。

Ⅰ群土器は住吉町式から虎杖浜式並行と考えられる貝殻条痕を持つⅠ群a類土器が出土した。確実な尖底が1個体、他は平底である。尖底の可能性が高い個体(1、2)については、松前町白坂遺跡、静内町駒場7遺跡出土遺物にモチーフがよく似た遺物がある。Oラインに沿った沢地形を取り囲むような台地の縁辺上に主として分布する。分布の中心は無名の沢に面した段丘への側にある。Ⅰ群a類とⅠ群b類について出土する層位の差はなかった。いずれもⅢ層の下位からⅣ層にかけて主に出土した層位である。Ⅱ群は円筒下層式、Ⅱ群b類である。型的には円筒下層b式並行と考える。その出土はOラインに沿った沢地形又はその延長上に集中している。出土はⅢ層中からである。Ⅲ群は円筒上層式、Ⅲ群a類が主体である。型的には円筒上層c式並行および、その直後のものが主体と考える。分布の中心はOラインに沿った沢地形および調査区外、Mラインに沿った沢地形に面した台地縁である。グリッドでいうところのPラインより西側、104ラインより南側に分布が集中する。出土はⅢ層の上位から下位まで分布するが、比較的上位から多く出土している。Ⅲ群土器の分布の中心は風倒木痕が多く、上下の攪乱が多いという事も併記し、土器集中の検出面はⅢ層の上位である事から縄文時代中期の生活面はⅢ層の上位である。

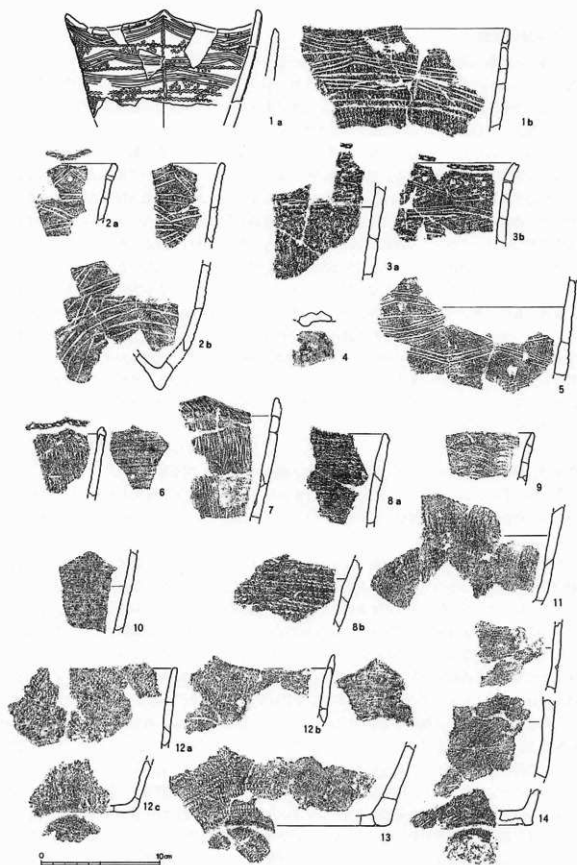
### Ⅰ群a類 (図Ⅳ-5-1~3-1~25、-5-21、表Ⅳ-5-6、図版21~23)

Ⅰ群a類土器は621点出土した。包括的に捉えるならば、虎杖浜式と並行するあるいはその虎杖浜式を含んで前後する土器群、又は沈線文様のモチーフから住吉町式と並行からやや新しい範疇の土器群と考える。

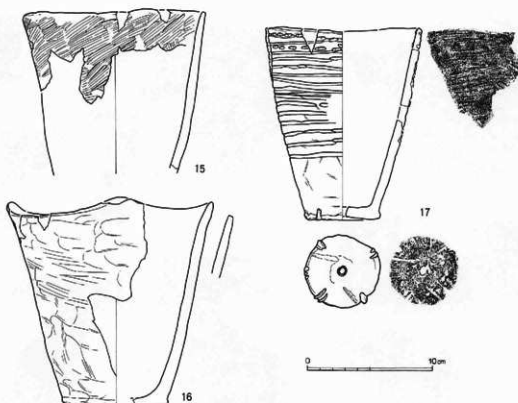
1~3、5は菱形をした、沈線文様を施す。胎土はしまり、1mm以下の黒色砂粒をよく含む。文様は静内町駒場7遺跡のものと同様である。明らかに尖底の個体は2のみで他は確証がない。1はサルボウ、3、5はハマグリに類した貝殻を原体としている。1は沈線によるひし形構成の文様ひし形の長軸を貝殻刺突圧痕による直線が貫通する。貝殻刺突圧痕による直線沈線が特徴的である。外面は貝殻押し引き圧痕が巡らされた後に、沈線構成のモチーフを描く。2は突起様尖底部である。外面には、丁寧なナデ調整で後沈線を施した様子である。一波頂部には焼成以前からの穿孔がある。菱形構成の沈線文様が口縁部から底部まで連続する。3は貝殻斜行腹縁圧痕を全面に施した後、沈線文様を施す。施文の最期として口縁部に連続して穿孔を施す。内面にも貝殻条痕による調整がある。5の施文具は貝殻腹縁連続波状圧痕文を丁寧なナデ調整の後に施す。貝殻条痕を施した後、ナデ調整を施した器面を持つ。最後に沈線によってひし形基調の文様を施す。内面の調整は不明だが、丁寧である。

4は突起部分である。胎土には繊維が目立つ。表面はよく磨かれる。形状から乳房状突起の一部若しくは、口縁部文様に付随する突起の可能性もある。物見台式の可能性もある唯一の破片である。

6~13は尖底か平底か底部が残存しない限り、断言できない土器群である。6~11は貝殻腹縁圧痕を施す。12~13は貝殻腹縁押し引き圧痕を持つ個体である。6、7は縦方向、8、9は横向きに腹縁圧痕を施す。6、8~13はサルボウに類似した貝である。7はハマグリに似る。6の波頂部は突起様である。口唇部は切り出し状である。内面には貝殻条痕調整、外面には貝殻腹縁圧痕を施した後押



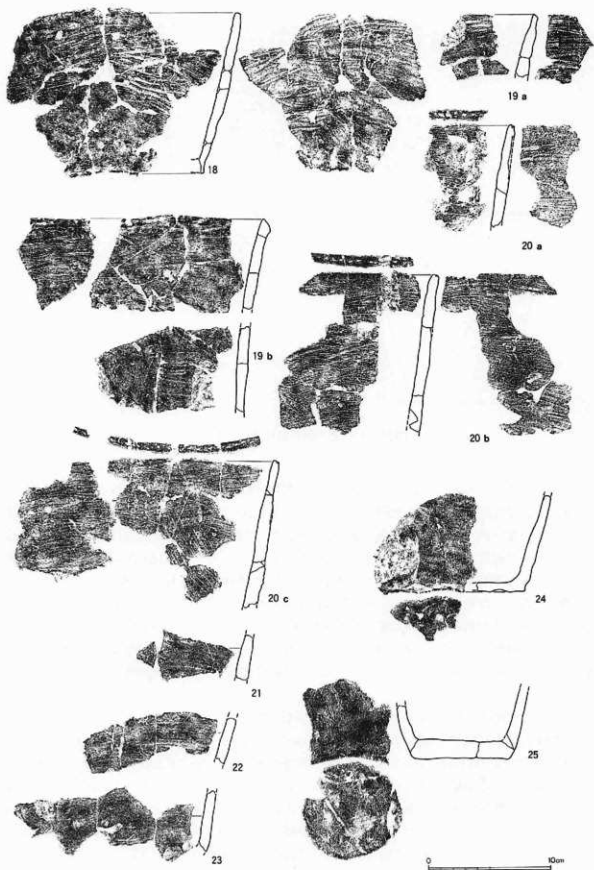
図N-5-1 包含層出土の土器(1)



図IV-5-2 包含層出土の土器(2)

し引く刺突によって鋸歯状のモチーフを描く。口唇部には押し引き気味の刺突が巡る。7は粘土ひもを1条貼り付けた後にナデつけて肥厚帯を整える。ナデ調整の後、貝殻縦腹縁圧痕を施す。8は削るようなナデ調整の後、貝殻横腹縁圧痕を施す。口唇部の切り出し状の面部分には貝殻縦腹縁圧痕を施し、内面はナデ調整である。9の口縁部形態はきわでより開く口唇は切り出し型に丁寧に面が取られた後ナデにより微妙に丸みを帯びる。ナデ調整の後、貝殻横腹縁圧痕を施す。内面はケズリのようなナデ調整である。10はナデ調整の後、貝殻縦腹縁圧痕を連続して施す。胎土はしまり、砂粒が多い。11は、貝殻押し引き圧痕が巡らせた後、ナデ調整が施される。12の外表面は貝殻条痕による調整後、貝殻押し引き圧痕が巡らされる。底部は平底だが微妙な丸みを帯びている。波頂部は、突起を思わせる鈍角の波頂部である。13は内外面共にケズリ風のナデ調整を施す。外面と底面はナデの後、貝殻押し引き圧痕を巡らせる。

14~25は、虎杖浜式あるいはややそれ以降の土器型式を含む一群の平底をした土器群である。しかし、今回出土したI群a類土器のうち、隆帯をもつもの、絡条体圧痕を持つものは確認できなかった。14~16、18~25は貝殻腹縁による条痕による器面調整を施す。24、25は底部破片である。14の施工具は櫛状に加工した貝殻腹縁である。貝殻腹縁連続波状圧痕文を丁寧なナデ調整の後に施す。内面には貝殻条痕による調整がかすかにある。15はいびつだが、4単位の波状口縁を持つ土器である。斜方向の貝殻条痕を全面に施した後、ナデ調整を施す。胴部下半分は特に丁寧なナデ調整である。口唇断面は丸みを帯びる。内面は貝殻条痕を施した後、ナデ調整を施す。底部は平底で丁寧なナデ調整を施す。16は平口縁の土器である。斜方向の貝殻条痕を全面に施した後、ナデ調整を施す。口唇は稜線が明瞭な面を取る。内面は丁寧なナデ調整である。17は平口縁の土器である。貝殻の調整痕が口縁部に微妙



図Ⅳ-5-3 包含層出土の土器(3)

に残るが、その後に施した、ケズリの様なナデ調整を全面に施す。さらに、胴部下半部までおよぶ14本の横方向の沈線と右方向に引く刺突を口縁部に2列に施す。内面は貝殻条痕を施した後、ナデ調整を施す。底部際には対向するように4ヶ所の短沈線様刺突がある。底面にはその刺突を結ぶ2本に加えもう一本の沈線が底面の直径をまたぐように施される。底面中央には、瓶を思わせる貫通穿孔がある。18は小型の平底器形である。底部は微妙に張り出す。内外面共にナデ調整を施した後、貝殻条痕による調整を施す。口唇部には丁寧な面取りを施し、平口縁である。

14、19～25の土器群について水びされたようなきめ細かな胎土でしまりがあり、粒径1mm以下の雲母を主とする、黒色砂粒をまばらに含む。24や25のように4mm前後の白色小石粒が混じるものもある。19と20、21、22、23はナデ調整を施す。切り出し型の口縁を丁寧に成形する。貝殻条痕による調整を施した後、ナデた痕跡がある。20については櫛状に加工した貝殻腹縁によって刺突を施す。上に行くに従って貝殻腹縁連続波状圧痕文の押される間隔は狭くなる。口唇部は切り出し状によく整えられ、右に押し引き気味の列点が巡る。口縁部形態は外側へ向かってより一段と開く。21は板ナデのような条痕が巡る。24、25はナデ調整による平底の底部である。24は内面には煤が付着し、器の表面は2次被熱によってはげたような剥落がある。25は成形後、自重で潰れたような形状である。

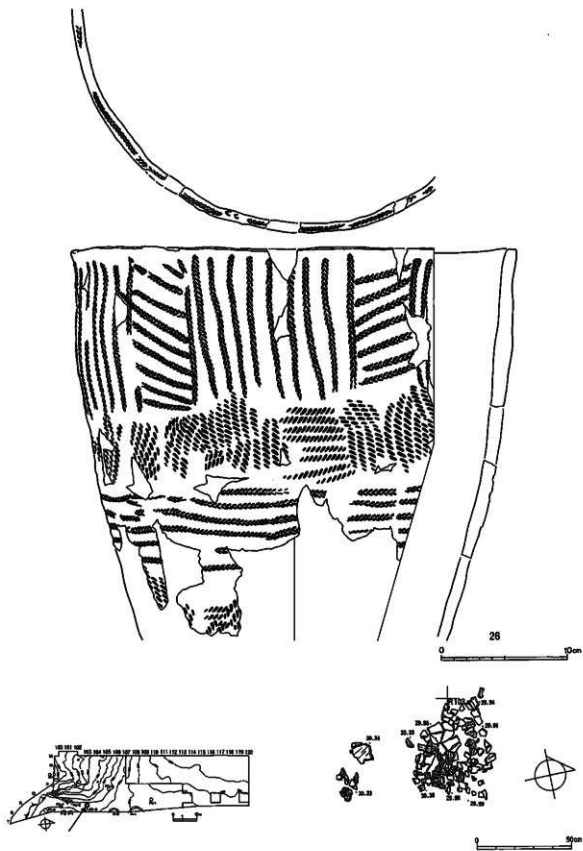
#### I群b類 (図Ⅳ-5-4～8-26～54、-5-22、表Ⅳ-5-6、図版24～27)

主として、I群b I類、東銅路Ⅲ式3277点が出土した。他にI群b 3類中茶路式の出土が247点ある。I群b類で細分できなかったものは409点である。東銅路Ⅱ式やコックロ式に比定できる土器破片はなかった。I群、I群b類で細分不能としたものについても、根拠に乏しいだけで、I群b類の細片という可能性が高いものが大半を占める。

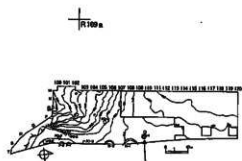
#### I群b 1類 (図Ⅳ-5-4～8-26～49、-5-22、表Ⅳ-5-6、図版9、10、11、24～27)

すべて東銅路Ⅲ式である。比較的厚手で、口唇には平坦面を取る。縄文地紋を施した後、擦り消して、無紋帯を造る。その際口唇の形状を整えているものが多いと判断した。そしてその無紋の帯の上を、縄線や組紐圧痕によって施文する。そのような文様帯は、口縁部、胴部中央、底部際にある事が多い。底部は張り出す形状を特徴とする。張り出し部分についても縄や指頭による圧痕を連続して施す。2種類の原体を特徴とする羽状縄文地紋がある。42のようにボタン状の貼り付けを持つ個体もある。土器の大きさとしてはI群a類より大型の器形が多い。胎土としては、やや密で、粒径1mm前後の砂粒が混じるものが多い。31から39のように粒径5mm前後の小石が目立つもの、および、26、27、48、49のように繊維が目立つものがある。内面はナデ調整である。板積みとでもいふべきか、粘土板を積みあげるような輪積み法によって成形しているものが多い。輪積みの痕跡を化粧粘土で充填し、上からナデつけている。調整時の指頭や板の痕跡が残るものが目立つ。

Q103グリッドを主とする斜面から、包含層Ⅲ層中位から下位にかけて、縄文時代早期の遺物が集中して出土した。その斜面に面した台地のへり、R103の枕の周辺から土器の集中を検出した。26に示した遺物である。L R縄を用い、施文方向を変えることで、縦方向の羽状に地紋を施す。口縁部文様帯も含め胴部にも地紋を、擦り消し、その上から、r縄、l縄の組紐を用いて器面を装飾する。口縁部は不定の間隔を持って6単位、その間隙を斜行に押圧して埋める斜行は鋸歯状をモチーフとする。右上り、右下りの連続として、一箇所だけ、右上がりである箸の所が、右下がりとなっている。口唇部は同一原体の矢羽根を対向させる押圧が巡る。底部底面間隙についても帯状の文様帯が巡る。やや張り出す底部形態で、L R L縄の連続する縦押圧が巡る。底面はナデ調整で、微妙な上げ底であ



図IV-5-4 包含層出土の土器(4)



図Ⅳ-5-5 包含層出土の土器(5)

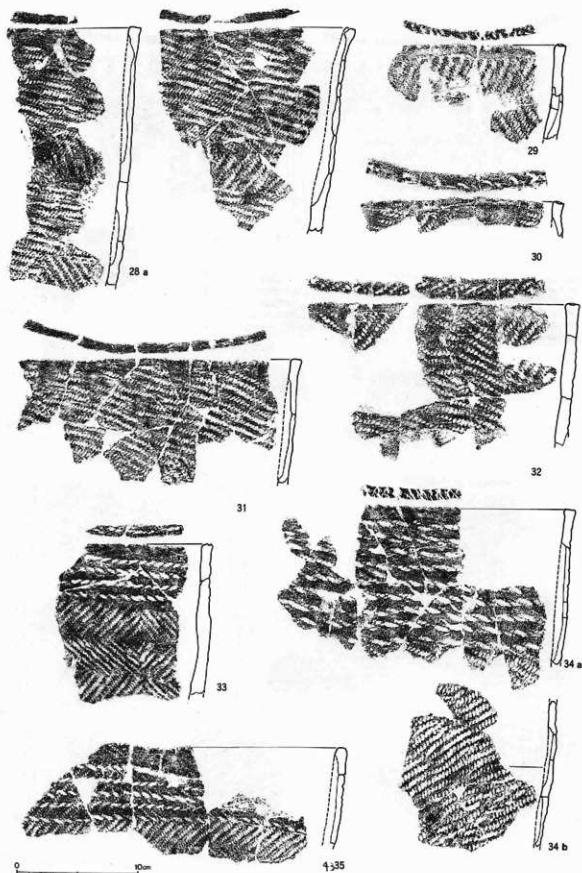
る。内面は指頭の圧痕が残るナデ調整である。一部板ナデを思わせる痕跡もある。

H-1の北隣、R109グリッドにおいて、Ⅲ層中位から下位にかけて土器の集中を検出した。27に示した。R L、L R縄を用いた結束第1種羽状縄文地紋である口縁部文様帯も含め胴部にも地紋を、擦り消しその上からR L R縄線の横走によって器面を装飾する。口唇部は指頭による押圧が巡る。底部底面間際についても帯状の文様帯が巡る。やや張り出す底部形態であり、R L R縄の連続する縦押圧が巡る。底面はナデ調整であり、微妙な上げ底である。内面は指頭が残るナデ調整である。

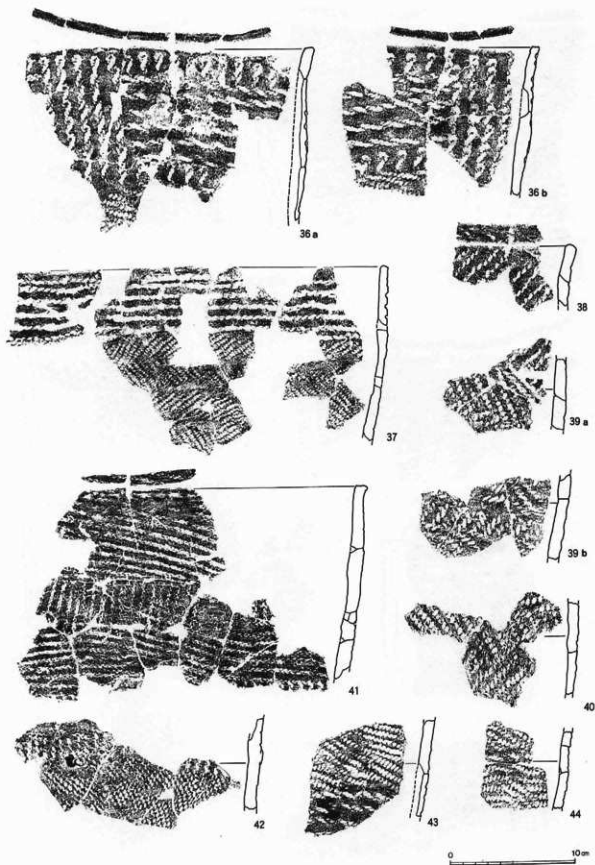
28はL R縄による地紋を持つ。胴部中央で羽状になるように交差させる。縄文を施した後に口唇部を成形する。44は28と同じ地紋を持つ。29は。L R縄とR L縄を交互に施し羽状とする。口唇にも羽状縄文を施す。その後、ナデ調整を施す。30は半径13~15cmの口縁部破片である。L Rを縦方向に羽状になるように施し、口唇部においてもL R縄圧痕を連続して施す整った口縁部は縄文施文後にナデ調整を施す。31はL R地紋を施した後に口唇部を擦り消して平坦面を調整する。32はL R地紋で、縦方向に羽状になるように施す口唇部にも同一原体で縄文を施す。縄文施文後ナデ調整。33はL R縄を施してから擦り消して無紋帯を造り、R L R、L R L縄線を交互に施す。34は口唇部にはL R L圧痕を施した後に鋭利な筧による刺突を上から重ねる。その後ナデ調整による成形。器面はL R地紋を施した後に口縁部文様帯を擦り消す。その後L R L縄線を施す。35はR L、L R縄を羽状に施す。羽状が対向する箇所がある。地紋を擦り消した後、R L縄、L R縄を二条づつ、交互に施す。口唇部にはL R L縄線を施した後、ナデ調整を施す。36はL R地紋を施した後、口唇部平坦面は、その際に整えたと考える。口縁部文様帯を擦り消す。その後、R L R圧痕口縁部文帯対に連続して施した後、横圧痕を縦と交互になるように4単位で施す。その際R L R圧痕縄端、環付縄の環部分、を器面上部に連続する様に残す。胴部についても、擦り消した後縄圧痕を施した文様帯を持つ。43は36と同じ地紋を持つ。底部際の際文様帯部分の破片である。37はL R、R L縄を交互に施し羽状にする。口唇部には6条の縄線を施す。縄線はR LとL Rの2種類あり、対向している。38はL R L縄を地紋として施し、口唇にR L R縄圧痕を連続する。その後、ナデ調整を施し、口唇部を整える。39はR L R縄とL R L縄を交互に施して横方向の羽状に施す40はL R L縄とR L R縄を交互に施すことによって羽状にする。41はナデもしくは擦り消し後の器面について、L+L+Rの三本組紐圧痕を横方向に施した後、上部に縦方向の同一原体による圧痕を施す。その後全面を擦り消して、L+L+Rの三本組紐圧痕を横方向に施す。整った口唇部についても組紐圧痕押圧後ナデ調整により成形する。42はR L Rの地紋を施した後、L+L+Rの三本組紐圧痕を横方向に、さらにL R Lの縦方向の環状圧痕を押圧する。その後表面にナデ調整を施す。その際に薄いボタン状の貼り付けを行なう。45~49は底部破片である。45はL R縄による地紋であり、施文後にナデ調整を施す。その後、張り出した底部形態に指頭圧痕を連続して押圧する。底面は微妙な上げ底であり、ナデ調整である。

46は微妙な張り出しを持つ底部形態である。底面はナデ調整である。内面は丁寧なナデ調整である。器面はL R縄文を施した後、底部きわをすり消して、R L R縄を縦方向に連続して施文する。胎土はやや密で、粒径1cm前後の砂粒が混じる。47は内面、外面ナデ調整である。R L縄文地紋擦り消した後、底部きわを擦り消してL R L縄による圧痕を施す。48はL R縄による地紋で、施文後にナデ調整を施す。その後、張り出した底部形態に指頭圧痕を連続して押圧する。底面は微妙な上げ底であり、小石が抜け落ちたような痕跡があり、丁寧な調整は見られない。49は微妙に張り出す底部形態である。磨耗が著しい。底部際を擦り消した後、環付縄の環形をした、縄端を連続して押圧している。底面の調整はナデ調整であるが、指頭による成形痕が残る。





図Ⅳ-5-6 包含層出土の土器(6)



図Ⅳ-5-7 包含層出土の土器(7)



図M-5-8 包含層出土の土器(8)

Ⅰ群b3類 (図Ⅳ-5-8-50~54、-5-22、表Ⅳ-5-6、図版27)

Ⅰ群b3類、中茶路式は284点の出土である。胎土はやや密で、ややしまりがあり、小石粒、砂粒を含む。内面はナデ調整である。

50はr無節縄を全面に施した後、微隆起線を貼付する。その後、r無節縄を隆帯上に転がす。内面と口唇にはナデ調整を施す。器表面は2次被熱によってはずれたか薄い剥落が目立つ。51はr縄を施した後、RL縄を施して、帯状の文様帯にそなえる。その後微隆起線を貼り付ける。その後r縄、さらには爪形を押す。口唇は断面が尖るように整えられる。52はLR縄を施した後、微隆起線を貼り付ける。貼り付けには縁をなぞったり縄を施文し直したりする。53はLR地紋を施した後、微隆起線を貼付する。微隆起線は貼り付ける前にモチーフにそってナデ付けて無地にした後、そこに微隆起線を貼付、その隆帯の縁をなぞって貼り付ける。微隆起線は曲線的なモチーフを描く。54はr縄を施した後、ナデ調整を施して、微隆起線を貼り付ける。微隆起線を施した後、上からr縄を施してより強く貼り付ける。

Ⅱ群b類 (図Ⅳ-5-8-55~57、-5-22、表Ⅳ-5-6、図版27)

Ⅱ群はb類のみ、110点出土した。堅穴住居H-1が埋まった後に凹みからややまとまって出土したりしているが量的には多くない。いずれの破片も、調整方法、繊維が目立つ胎土、地紋などから、円筒下層式でb式からc式の古手に比定できる遺物と判断したが、口縁部破片など明瞭な時期比定の規準となるものはなかった。内面は丁寧なナデ調整である。

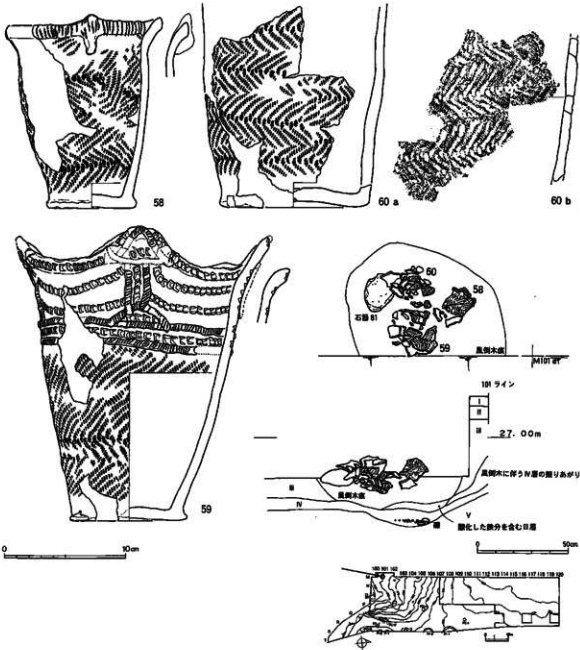
55は胴部破片である。網目状燃り糸文、短軸絡糸体第6類による施文である。56は胴部破片である。網目状燃り糸文、短軸絡糸体第6類による施文である。胎土には火山灰粒が混じる。57は底部破片である。底面部は平たく、磨き調整である。RLR縄による絡糸体によって地紋を施す。底部きわはナデ調整によって無紋にする。

Ⅲ群a類 (図Ⅳ-5-9-11-58~75、-5-22、表Ⅳ-5-6、図版5、6、28~30)

出土したⅢ群は全てa類である。1550点出土した。Ⅲ群で細分できないとしたもの25点もⅢ群a類の可能性が高い。いずれも、調整方法、胎土、地紋から、円筒上層c式並行およびその直後の期間を主体とするものと考ええる。3個体まとめて出土したものが、その時期の特徴をよく表していると考ええる。隆帯あるいは肥厚帯上には縄ない絡糸体による圧痕、又は絡糸体による回転施文を施しているものが多い。胴部の底部際については、ナデ消して無紋にする。底部形態は微妙に張り出す。胎土には長石と思われる白色砂粒を含み、繊維や、70~73のように海綿骨針が混じるものもある。

58~60はまとめて出土した土器である。包含層調査の際、M100グリッドを調査していた。すると調査区の際である、Mライン壁際、Ⅲ群中位において、土器の破片を検出したそのまま残し、調査区外ではあるが、L100、L101グリッドを掘り下げた。すると黒色土の落ち込み土器がまとまっている様子を抽出した。清掃すると、土器3個体とやや大型の礫が1個まとめている様子が明らかとなった。土器を取上げ後、黒色土落ち込みを人為的なものと想定して調査をしたが、土壌は伴わず、風倒木であることが明らかとなった。風倒木が埋まりかけて窪んでいるところに土器を廃棄したものと考える土器はいずれも使用されていると考えられ、礫は洗浄後、観察すると台石が、被熱したものであることが明らかとなった。これについては包含層の石器81に示した。

58は胴部についてLR縄、RL縄による結束第1種羽状縄文を施す。口縁部について擦り消してr縄線による縦圧痕を連続させる。平口縁であるが、突起様の波頂部を一箇所持つ。対になる箇所につ



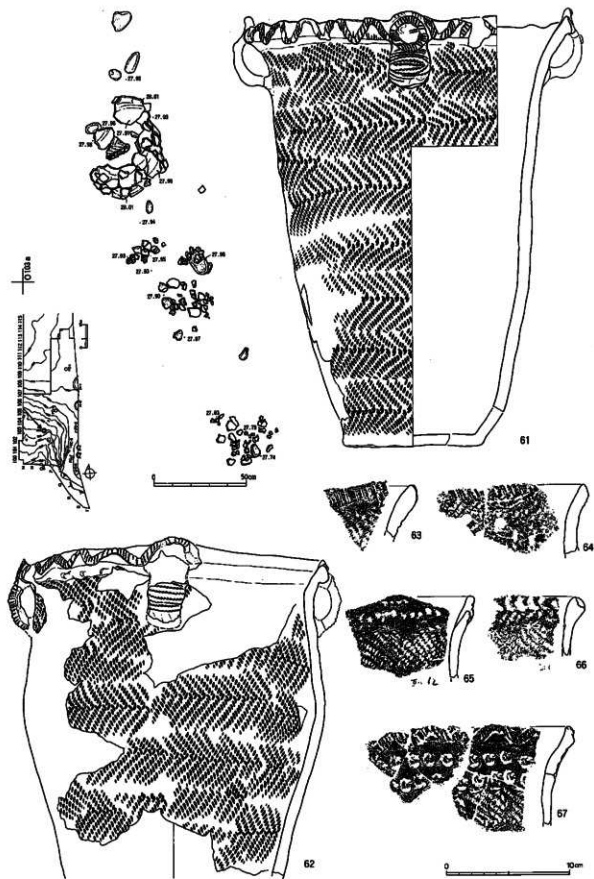
図IV-5-9 包含層出土の土器(9)

いても残存部からは波頂部の存在は考えにくい。波頂部からは垂下するように把手線の貼り付けを施す。底部際はナデ調整によって無紋にする。底部はやや張り出す形態である。底面はやや上げ底で、ミガキ調整を施す。内面は丁寧なミガキ調整である。内面上部について煤がよく付着する。59は胴部下半分についてL R縄、R L縄による結束第1種羽状縄文を施す。胴部上半について擦り消して、粘土紐を貼り付け、区画文様を施す。文様の区画内には草本による半截竹管を右側に押し引く様に連続刺突する。隆帯上にはr縄による絡条体を回転施文する。内面には丁寧にミガキ調整を施す内面の下部には煤が付着し、上部は薄く剥離する。底部きわはナデ消して無紋にする。底部は微妙に張り出す。底面は微妙な上げ底でよくミガキ調整を施す。60は胴部にL R縄、R L縄による結束第1種羽状縄文を施す。底部際はナデ調整によって無紋にする底部は卒まる形態である。底面は上げ底で、上げ底部

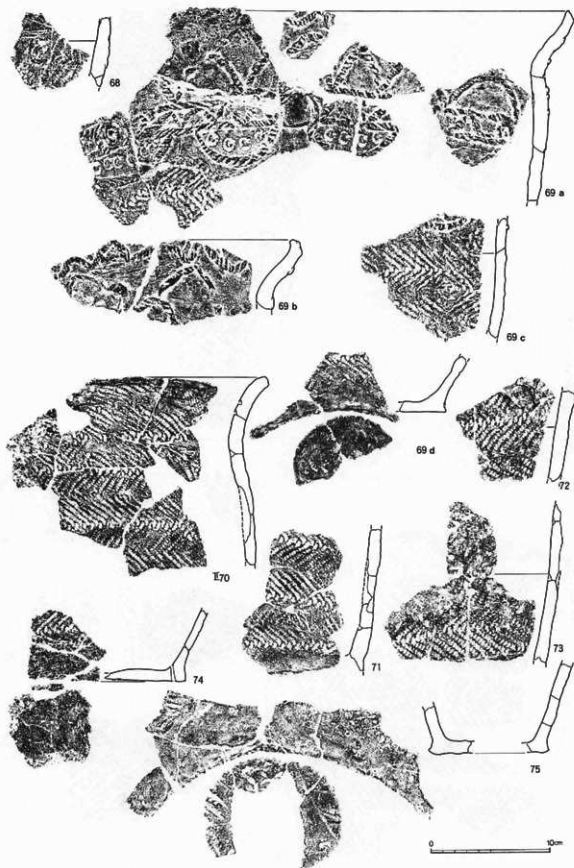
分にはよく煤が付着する。内、外面ともに摩滅が著しい内面は丁寧な調整である。内面には煤がよく付着する。胴部破片のみであり、口縁部文様帯を含んだ破片は見つからなかった。

61は旧河道がV層で埋まりきった時期に廃棄された土器である。O103 aグリッドでその場で上から潰されたかのように放射状に割れていた。割れた後、河道にそって流れたのか、破片が散らばっていた。旧河道はII層灰褐色土がラミナ状に堆積している事や、ロームまで掘り下げると覆流水が流れていた事も踏まえると大雨のときなどは流路になっていたと考えられる。土器は底部が窄まる形状で、やや膨らむ胴部を持ち、よく外反する口縁部を持つ。口縁部上端は屈曲するように立ち上がる。平口縁だが、4単位の突起のような波頂部を持つ。胴部はL R、R L縄による結束第1種羽状縄文である。縄文施文後波頂部から垂下するように把手をつける。把手には1縄による絡条体を回転施文した後、円形の粘土紐貼り付けを施す。口縁部の上端には波状に粘土紐を貼り付ける。粘土紐には1縄による絡条体を回転施文する。胴部下半部は二次被熱によってなにか赤色に発色する。上部には煤が付着する。煤の境界線は直線的である内面、外面ともに磨耗が著しい。底面は微妙な上げ底である。62はN99 dからまともに出て出土した。風倒木がからんでいた事と、また旧河道の流路上であり、動いていたため出土状況は固化しなかった。流路が埋まりきってからの遺物である。よく膨らむ胴部を持ち、胴部下半部は二次被熱によって赤色に発色する。R L縄、L R縄による結束第1種羽状縄文を器面に施す。よく外反する口縁部を持つ。口縁部上端は屈曲するように立ち上がる。平口縁だが、4単位の突起のような波頂部を持つ。縄文施文後波頂部から垂下するように把手をつける。把手には1縄による絡条体を回転施文した後、円形の粘土紐貼り付けを施す。口縁部の上端には波状に粘土紐を貼り付ける。粘土紐には1縄による絡条体を回転施文する。内面、外面ともに磨耗が著しい。内面には丁寧な調整が窺える。

63の口縁部断面は丸みを帯びるR L縄文を地紋として施した後、口縁部から口唇部にかけてナデ調整を施すナデ調整を施した後にr縄による縦圧痕が連続する。64はよく外反する口縁部形態を持つ。口縁端部の折り返した器面にはr縄による絡条体を回転施文する。2破片の接合であり、対になる位置にそれぞれ補修孔が開いている。65は鈍角で突起様の波状口縁を持つ。R L縄文地紋であり、口縁端部には粘土紐を貼り付けた上からナデつける。その肥厚部と、波頂部には草本の茎による半截竹管様の連続刺突が巡る。66は外反する口縁部形態である。R L縄を施した後、口縁端部には肥厚帯を成形する。肥厚帯にはL R縄による環状の連続刺突を持つ。肥厚帯貼付後、肥厚帯下部にはL R縄を施して器面を羽状にしている。67はR L地紋である。口縁部から口唇部にかけてナデ調整である。口唇部の屈曲部外面には粘土紐を波状に貼り付ける。粘土紐の上にはr縄、1縄による絡条体を回転施文する。内面は磨き調整である。口縁部文様帯には縄を環状にしたものを連続して2列に押圧する。68は波状口縁の波頂部付近である。地紋にL R縄文を施した後、口縁部を断面三角形に整えて、そこへr縄、1縄による絡条体を回転施文する。波頂部にはボタン状貼り付けを施す。波頂部の器面は擦り消した後、r、1縄線で波頂部を飾る。69の器面にはナデ調整を施し、その上に粘土紐を貼付する。口唇部は屈曲するように立ち上がり隆帯を貼付後、1縄による絡条体を回転施文する。口縁の屈曲部には二段にわたって弧線の貼り付けがなされ、r縄による絡条体を回転施文する。二段の貼り付けの交差部分にはボタン状の突起を貼り付ける。さらに連続して胴部が膨らむ部分について粘土紐を平行させ、間を粘土紐の貼付し、波状に充填する。それらにはr縄の絡条体を回転施文する。胴部には結束第1種の羽状縄文を施す。また、推定4単位の間隔でボタン状突起がこの文様帯には貼付される。その上からは、R L縄の環状にし、圧痕を押圧するその文様帯の下にも隆帯によって一定間隔の弧線文を施す。隆帯上にはr縄の絡条体を回転施文する弧型の区画中は先のR L縄の環状圧痕を一列横方向

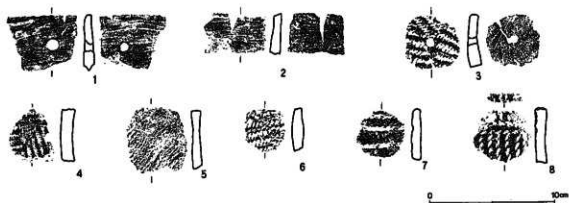


図N-5-10 包含層出土の土器(10)



図IV-5-11 包含層出土の土器(11)





図Ⅳ-5-12 包含層出土の土製品

に連続押圧する。文様帯は一部擦り消しての無紋地上に施す。地紋はRL、LR縄を用いた結束第1種羽状縄文である底部は窄まる形状であり、底部際についてはナデつけて無紋にする底面は平坦で、丁寧なナデ調整を施す。70、72、73は結束第1種羽状縄文を器面に施す。胴部にも縄文施文後、所々ナデ調整が最終的に施される。71は結束第1種羽状縄文が施された胴部である。70は膨らむ胴部とよく外反する口縁部を持つ。縄文施文後、口唇部をナデ調整で整える。口唇部側面には面を取る。底面際で窄まる形状であり、その部位はナデ調整により無紋である。74、75は底部破片である。74は磨耗が著しい。2次被熱によるものかよく焼ける。底面は平坦でよく磨く。内面には丁寧な磨き調整を施す。地紋は結束第1種羽状縄文であり、底面の際はナデ調整により無紋である胎土はややまばらで繊維を多く含む。75はRL縄文地紋であり、底面の際はナデ調整により無紋である。底部はミガキ調整であり、沈線様の痕跡がある。

#### 再生土製品 (図Ⅳ-5-12、表Ⅳ-5-7、図版30)

名称として、円盤状再生土製品も、土器片錘の可能性もあるものも一律に扱った。1、2、5はI群a類土器の口縁部破片である。3、4、6、7、8は東銅路Ⅲ式の土器破片である。1、2は貝殻条痕による器面調整を持つ土器である。口唇部には擦り切りによる切れ込みを入れる。切れ目に、紐ずれ等の痕跡はない。1には円形の貫通孔がある。3は円形で貫通孔を持つ。4については穿孔後に、再成形した可能性がある。5は楕円形で、長軸の両端を打ち欠く。縦方向の貝殻腹縁刺突を器面に連続して施している土器からの転用である。土器片錘といわれるものに相当する。6、7、8は円形に擦りによって成形する。分布、出土層位とも早期土器のそれと合致しており、早期の遺物と考える。

その他に焼成粘土塊の出土がR103 dから45点あった。図化できなかった。成形はされず、不定形で、胎土は水ひされたようなキメの細かさである。草本の圧痕様を持つものもある。時期は不明だが、周囲からは東銅路Ⅲ式が多く出土しており、類似した胎土を持つI群b1類の土器の出土がある(H-1の2等)。

#### (2) 石器 (図Ⅳ-5-13~20、21、23~26、表Ⅳ-5-8、図版31)

剥片石器は188点、礫石器は207点、剥片が2069点、石製品が2点出土した。分類にあたり、Rフレイクは二次的な連続する剥離が明瞭なものを選び、Uフレイクは二次的な潰れ痕跡などが明瞭なものを選んだ。剥片石器の素材としては、やはり産地であるためか頁岩が多い。

## 石鏃 (図M-5-13-1~9、23、表M-5-8、図版31)

13点が出土した。そのうち2点は未製品である。2点が黒曜石製で、残る11点は頁岩製であった。今回図化しなかった4点は折損しているが、柳葉形で早期の遺物と考える。1~3、5は柳葉形で頁岩製。1、2は基部と先端部が欠損している。先端部分は、折損後に再調整している。1は縦長剥片を使用。2は押圧剥離が剥片の全面にわたる。3は凹基で、基部の張り出し部分が折損する。白抜き部分は素材元来の不純物によって剥落したか所と、折損によって剥落したか所である。5は円基で先端を含む半分が欠損している。横長剥片を使用し、剥離は全面におよぶ。再生痕跡はない。素材はやや粒子が粗い頁岩である。4は珪質頁岩の五角形鏃で平基。先端部分の湾曲は再生によるものか。剥離は全面におよぶ。6は黒曜石で、凹基の三角形鏃を思わせる基部と棒状鏃を思わせる刺突部分を持つ先端部は折損している。剥離は全面におよぶ。側縁は細かい剥離によって潰れ気味である。7は硬質頁岩で凸基有蓋鏃。基部は丁寧に作り出される。縦長剥片を使用。8は硬質頁岩の石鏃未製品。凹基の三角形鏃を造ろうとしたものか。横長剥片を利用。裏面左側縁の剥離が施されないところは素材折損面縁によって加工し難かったものとする。対応する表面については、細かい剥離が密であり、加工を試みた痕跡であるとする。先端部についても同様である。9は黒曜石製。柳葉形で円基。ねじれが著しい縦長剥片を使用。両側縁が潰れた様になっている。未製品であり、剥離調整は全体に至っていない。

## 石槍またはナイフ (図M-5-13-10~12、-5-23、表M-5-8、図版31)

6点出土した。概略、線対称の形状と捉えられる。両面加工で、剥離が全面におよぶもので石鏃と似た一群より明らかには大型な一群をこれに分類した。破片となった場合スクレイパーと区別がつかない。分布は早期の遺物が多かったグリッドに偏る。3点図化した。先端についてはより鋭角的に造りだしたほうを切っ先とした。

10は硬質頁岩製で、一段窄まる基部を持つ。先端部は折損したのか切っ先はない。再生のためか押圧剥離が施される。剥離は全面におよぶ。11は硬質頁岩に珪質分が帯状に入り込む。基部は明瞭ではない。剥離は全面におよぶ。横長剥片を使用している。12はメノウ質とも言える珪質分が多い頁岩を使用する。基部は不明瞭。両面加工の石器に当初分類した。先端部は細かい押圧剥離によって丁寧に造りだされる。剥離は全面に及び、横長剥片を使用したと考える。裏面左側縁の刃部が無い側については、もともと素材とした頁岩の目による平坦部分で刃部を作り出せなかったものとする。

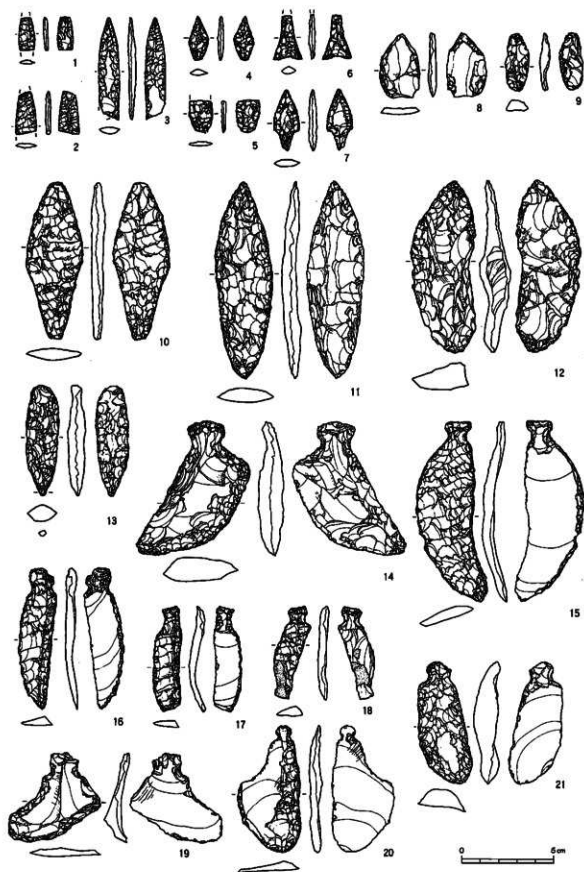
## 石鏃 (図M-5-13-13、23、表M-5-8、図版24~28)

4点出土した。剥片の一端を鏃として使用したようなものが3点出土した。調整をよく施したものが1点出土し、図化した。13は珪質分の多い硬質頁岩である。縦長剥片を素材として打面が明瞭に残る。剥離が全面に渡る。両側縁に刃部を持ち、先端に近い側縁は鏃による使用により、潰れている。先端は先細り磨耗が著しい

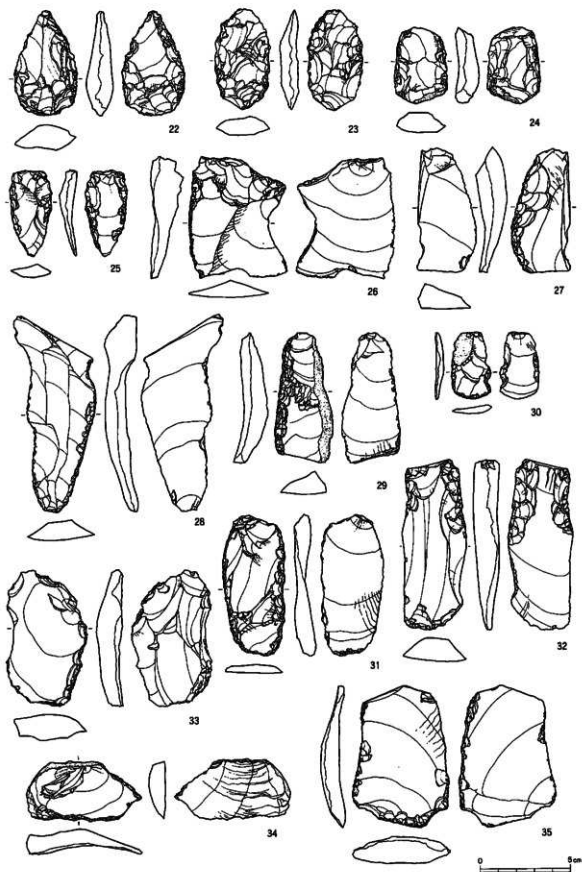
## つまみ付きナイフ (図M-5-13-14~21、-5-24、表M-5-8、図版31)

16点出土した。図化しなかったものも含めて、全て頁岩製である。そのうち8点を図化した。

14は横長剥片を素材としている。つまみの軸に対して刃部の軸は斜めである。刃部は下向きである。右側縁の刃部は厚みがあり、石核の調整面を思わせる剥離痕を持つ。両面とも右側縁に対して連続する剥離によって刃部を形成する。つまみ部分は両面からの細かい剥離によって造る。先端部は両面から成形する。このような両面調整のつまみ付きナイフはほかに3点出土し、そのうち2点は接合した。15は縦長剥片を素材として用いる。表面について剥離が全面におよぶ。裏面右側縁については縁辺に連続する剥離が巡る。表面右側縁は搔器様な急角度の刃部形態である。つまみ部分は両面からの細かい



図IV-5-13 包含層出土の石器(1)



図IV-5-14 包含層出土の石器(2)

い剥離が巡る。先端は鋭角的である。表面左側縁の挟れ部分は折損を再生した可能性がある。16、17は縦長剥片を素材としている。表面は剥離が全面におよぶ。裏面右側縁に連続する剥離が巡る。表面右側縁は搔器様な急角度の刃部形態である。稜線は直線的で整然とする。つまみ部分は両面からの細かい剥離を巡らせて丁寧に造る。16の挟れ部分は再生の痕跡と考える。17は湾曲する縦長剥片を素材として、切っ先は折損ではなく、原石の礫皮が残っている。この形状のものは他に3点出土している。今回の調査における、定型的な形状をしたつまみ付きナイフである。18は横長剥片を素材として用いる。表面、裏面共に礫皮の不純物による剥落箇所を除いて、表面について剥離が全面におよぶ。調整面なのか裏面右側縁については連続する剥離が巡る。表面左側縁について稜線を形づくる連続する長い剥離を施した後に、刃部調整のための細かい連続する剥離が巡る。表面右側縁は搔器様な急角度の刃部形態を持つ。稜線は直線的で整然としている。つまみ部分は両面とも細かい剥離が回り丁寧に作り出す。切っ先は折損ではない。原石の礫皮が残っている。16、17と比べてつまみ部分に対して刃部の軸がやや傾斜する。他に1点類例が出土している。19はつまみ部分に対して搔器様の急角度な刃部がつく。表面左側縁にも挟れた刃部がある。横長剥片の打面をつまみ部分にもってきており、つまみは両側縁の挟れ部分を両面から加工するだけである。類例が1点出土している。20は縦長剥片の打面部分を刃部末端にしている。右側縁について、長い剥離を用いて、片面加工の刃部にしている。左側縁についても押圧剥離がまばらに見受けられる。右側縁ほど丁寧な加工ではない。つまみは両側縁の挟れ部分を両面から加工しただけである。21は湾曲した横長剥片を使用している。素材本来の湾曲部によって加工がおよばない中央部を除き、二次加工が片面全面におよぶ。つまみ部分は両面とも細かい剥離が回り丁寧に作り出す。

#### スクレイパー (図Ⅳ-5-14・15-22~39、-5-24、表Ⅳ-5-8、図版32)

68点が出土した。黒曜石製は2点のみで、頁岩の縦長剥片を使用したものが目立つ。17点を図化した。通常に調査した範囲で偏りなく出土する。分布の中心は縄文時代早期土器の状況と合致する。

22~24、27、30~32、38は硬質頁岩、25~26、28、29、33~37、39は珪質分の多い頁岩である。

22から25は両面調整のスクレイパーのうちで、側縁の調整ないしは刃部が明瞭なものである。

22は唯一の寛状石器であり、1点のみの出土である。そのためスクレイパーのうちに入れこここで記載する。硬質頁岩の縦長剥片を使用。表面右側縁について、調整痕跡が著しい。裏面については、両側縁とも調整痕跡が著しい。末端の刃部についても著しい潰れ痕跡がある。表面右末端部分について階段状の剥離は刃部再生に伴うものと考え、裏面の平たい形状により、下部部は急角度の刃部形態である。

23~25は両側縁が刃部のものである。いずれも両側縁の上端が潰れ気味である。これが装着痕跡か、縁端部を頻りに使用したのかはわからない。他に類例が5点出土している。23は横長剥片を使用する。下部部には折り取るような剥離による、成形痕跡はあるものの、刃部は造らない。両側縁からの二次加工は全面におよぶ。24は上下端部について調整痕はない。厚い横長剥片を使用している。25は縦長剥片を使用。剥離は両面だが縁辺のみに留まる。26は幅広の縦長剥片を使用表面裏面共に左側縁のみに細かい連続する押圧剥離を施す。下部部についても表面について微細な剥離が巡る。素材の形状をそのまま生かしている。このような不定形で厚みのない刃部を持つ類例は15点出土している。27、29は肉厚で搔器ともいえるような断面形態のものである。いずれも縦長剥片を利用する。刃部は両側縁のみに有する。27は26と剥離が連続する方向については同一である。29は裏面右側縁について、微細な剥離がある。28は縦長剥片を使用する。表面右側縁上端側のくびれ部分を装着痕跡とするならば、打面を下にしたスクレイパーである。表面両側縁のみに連続する押圧剥離が巡る。くびれに対応

した張り出しの元にも裏面にも剥離がおよんでいる。素材の形状をそのまま生かしている。このようなつまみ様の装着部が想定できる刃部とみなしえる、連続する剥離を持つものは他に1点出土している。30、31、32は縦長の剥片を使用する。縁辺の調整のみで、両側縁に刃部を持つ。下端部についても片面のみの調整を持つが、厚さの薄い石器であり、搔器とは言いがたい。形状は輪部のみ筧又はそれに類似する形である。30は表面右側縁についてはノッチ様の挟れ部分が2箇所ある。31はねじれた縦長剥片を利用する。縁辺に調整が巡る。32は上部について、両側縁が両面ともによく調整される。装着痕の可能性はあるが、見解としては23~25と同様である。これらに類する遺物は他に10点ある。33、34横長剥片素材の形状をほとんど変えず、不定形で一部に厚みがある搔器を思わせる刃部を持つものである。33は表面裏面共に右側縁のみの加工である。表面右側縁の刃部について再生が著しい。34は表面裏面共に縁辺のみの加工である。裏面上端に調整痕が著しい。35は縦長剥片を利用し、表面左側縁、下端、裏面両側縁のいずれも縁辺のみを加工している。素材を生かした形状であるが、表面下端の刃部については両端について欠損が著しく、再生の為の調整が何える。このような両側縁に刃部と見なし得る、連続する剥離を持ち、形状が筧に類似し、端部に刃部があるものである。図化したもの以外の類例は4点、そのうち側縁両端が潰れているものは1点あった。

36~39は両面調整の内厚の刃部を持つものである。形状は筧に類似する。36は横長剥片を利用する。刃部は表面裏面の縁辺に押圧剥離調整が連続するが、表面について刃部調整痕跡が連続する。刃部について両端が使い込まれる。37~39は縦長剥片を使用する。37は全面に剥離がおよぶ。表面下端と上端、両側縁上部について調整痕跡が著しい。38は表面右側縁の刃部について、両面共に調整が著しい。39は表面下端、表面両側縁について調整が著しい。鋸歯状の刃部が特徴的である。

他にスクレイパーとして分類した遺物には、破片のみでは石槍又はナイフとも判断できるものが6点入っている。他は形状等が推定し難い刃部破片が1点である。

石核・両面調整石器（図Ⅳ-5-15・16-40・41、-5-24、表Ⅳ-5-8、図版32、33）

石核は42点出土した。両面調整石器は6点出土した。

両面調整の石器で。連続する剥離を有するが、刃部とは認めがたく、石核に性格が似ていると判断したものを両面調整石器とした。石核・両面調整石器いずれも珪質頁岩製のものがほとんどである。打面については様々な方向から打ち欠いているものが多い。フレイク・チップが集中しているところを目安に接合作業を試みたが、接合関係については、思わしい結果は得られなかった。

40は珪質頁岩製、粒子は一定ではない。上端の連続する剥離部分に使用痕跡はない。接合資料であり、割れている面も上端からの加撃である。剥離作業面の連続である可能性が高いと考えた。45は珪質頁岩製。剥離作業面からは、厚みのある横長の剥片しか取れなかった様子である。剥離作業の回数が少ないのは石質が適切ではなかったためか。

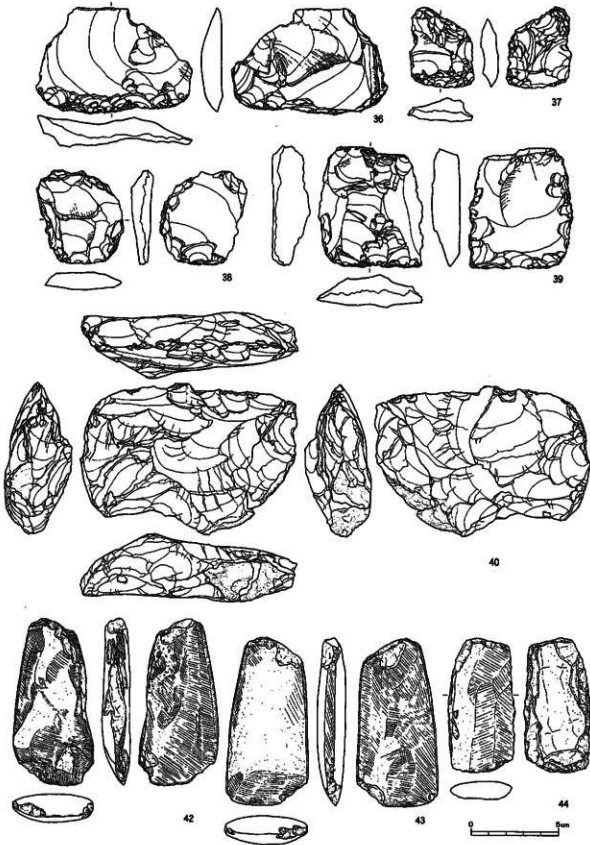
石斧（図Ⅳ-5-15-42~44、-5-24、表Ⅳ-5-8、図版33）

4点出土しており、3点を図化した。

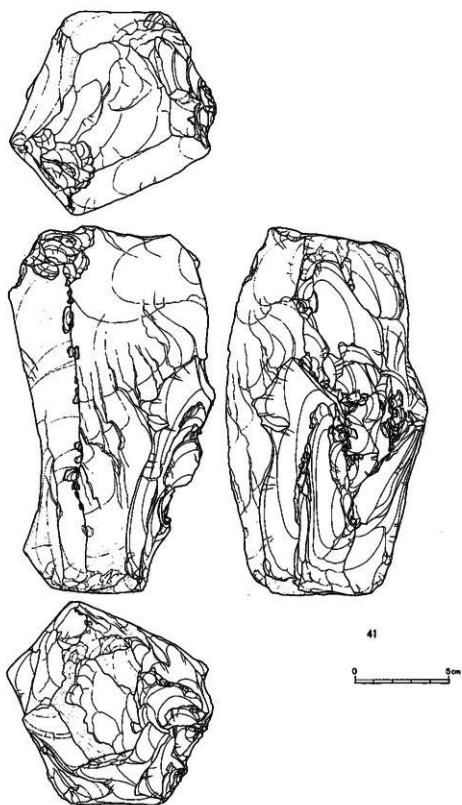
42は緑色泥岩製。鑄は明瞭である。打ち欠き調整後研磨している。基部に細かい調整痕がある。刃部の両端欠損している点は筧形石器に似る。43は緑色泥岩製。鑄は不明瞭である。こう打調整後研磨している。基部と刃部片端が欠損している。44は片麻岩製。刃部の表面が割られたものを打ち欠き調整によって小型の石斧に成形したものである。二次加工後の使用痕跡はない。

偏平打製石器（図Ⅳ-5-17・18-53~58、-5-25、表Ⅳ-5-8、図版35）

14点出土した。傾向としては安山岩が主に使われている。図化したものも、55の凝灰岩製以外は安山岩製中期の土器が多く出土したところに出土の傾向は偏る。



図IV-5-15 包含層出土の石器(3)



図IV-5-16 包含層出土の石器(4)



54、56は裏面には成形のための敲打調整がなされており、側縁に顕著である。機能部は比較的幅が広く、明瞭なすり面が確認できる。たたきつけて使用した可能性がある。53、55、57、58は打ち欠きによって縁辺は整然と成形される。機能部はベッキング痕が著しい。すり面は確認し難い。

北海道式石冠 (図M-5-18・19-59~62、表M-5-8、図版36)

6点出土した。包含層のみからの出土である。59、60は小島の道南中期、62は円筒下層c、d期に相当するが(1997 小島) 当期の土器は出土しているが、一致するグリッドレベルでの出土傾向は今回なかった。安山岩で、中期の遺物と思われる破片が3点前期は掲載の1点のみである。

59、60は安山岩製。楕円礫を割った後調整する。溝状の持ち手を持つ。59の器面に黒褐色の付着物があるが、埋没時のものと判断した。60は表面左側縁にはこう打調整底面部には潤滑痕と考えられるこう打による凹みがある。61は石皿であった可能性がある。割った後、敲打調整による溝状の持ち手を有する。底面は短軸に平行なすりをよく行う裏面方向について減りが著しい。62は凝灰岩製で、比較的大型である。全面敲打調整である。

たたき石 (図M-5-17・19-45・46・48~50・63、-5-25、表M-5-8、図版34)

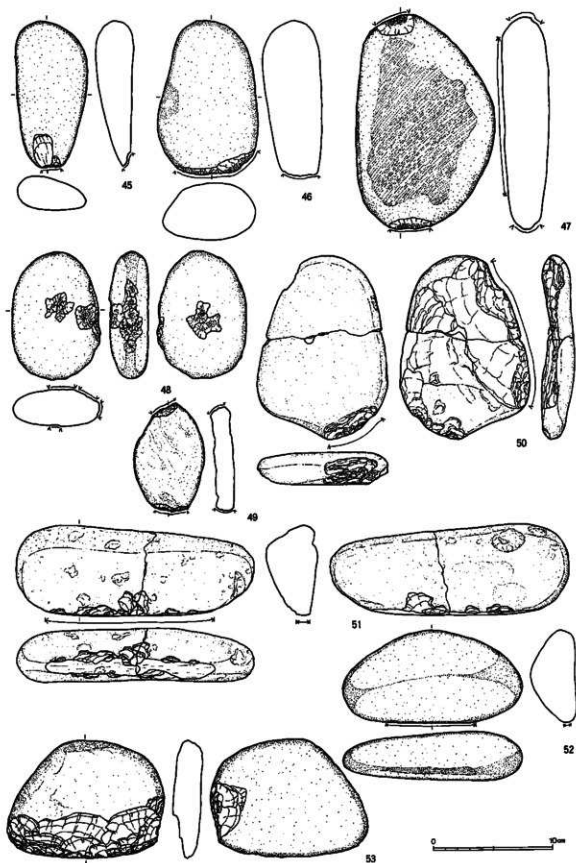
たたき石は50点出土した。そのうち凹み石と言えるものは4点を含む。分布は縄文時代中期の土器の中心と合致する。使用石材は3点が砂岩、2点が凝灰岩、他は安山岩製である。礫の使用部位について傾向をみると、楕円礫の両端が2点、楕円礫の一端と側縁の一部が1点、偏平礫の側縁が6点、楕円礫の一端と凹みがあるもの3点(うち1点の凹みは不明瞭)、楕円礫の2側縁が1点、楕円礫の一端が4点(うち2点は石錘未製品とでもいうべきものか)、円礫の側縁と凹みを持つもの1点、円礫の一端が1点、楕円礫の両端と側縁が2点、楕円礫の側縁というものが残りの7割以上であった。

45は安山岩製である。長楕円礫の一端を使用する。打ち欠きは作業に伴うものとする。使用、こう打の回数が多いとは考えにくい。46は砂岩製、楕円礫の一端を使用打ち欠きは明瞭ではないがこう打に使用した痕跡は明瞭である。48は凝灰岩製。楕円礫を使用、表裏の偏平面と側縁の3ヶ所の明瞭な凹みがある。側縁の凹み周辺にはたたき痕跡があり、たたき石としての使用は確実に見受けられる。49は砂岩製。小型の楕円礫の両端使用。当初は石錘の可能性を考えたが機能部の中心から垂直延ばした線と対になる機能部の中心から垂直に延長した線がずれているため、ひもを架けると想定するにあたり軸が設定しにくいという事で今回はたたき石に分類した。50は安山岩製。偏平な楕円礫を打ち欠いて成形中に割れており、偏平打製石器の製作工程をあらわすものか。割れた後、大型の破片側に敲打具として用いた痕跡がある。63は安山岩。礫の両端に敲打痕がある。下端のほうはより明瞭である。平坦面については、すりの痕跡がある。明瞭なすり跡ではないが、平坦で、擦痕が観察できる。

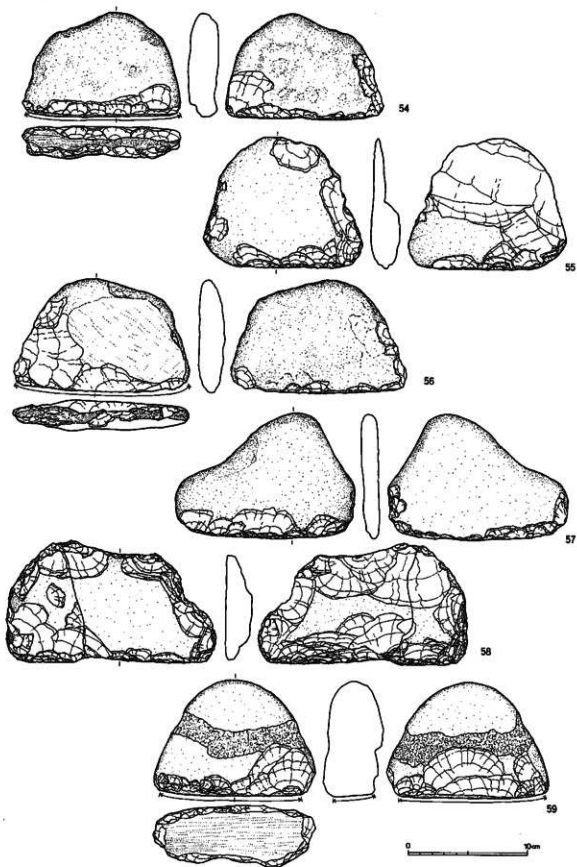
すり石 (図M-5-19-47・51・52・64、-5-25、表M-5-8、図版34、35)

すり石は24点出土した。早期に特有の断面三角形の擦り石、R98(Ⅲ中)、P101(Ⅲ下)、Q102(Ⅳ)から出土した。P101のみ花崗岩で、他は安山岩製である。

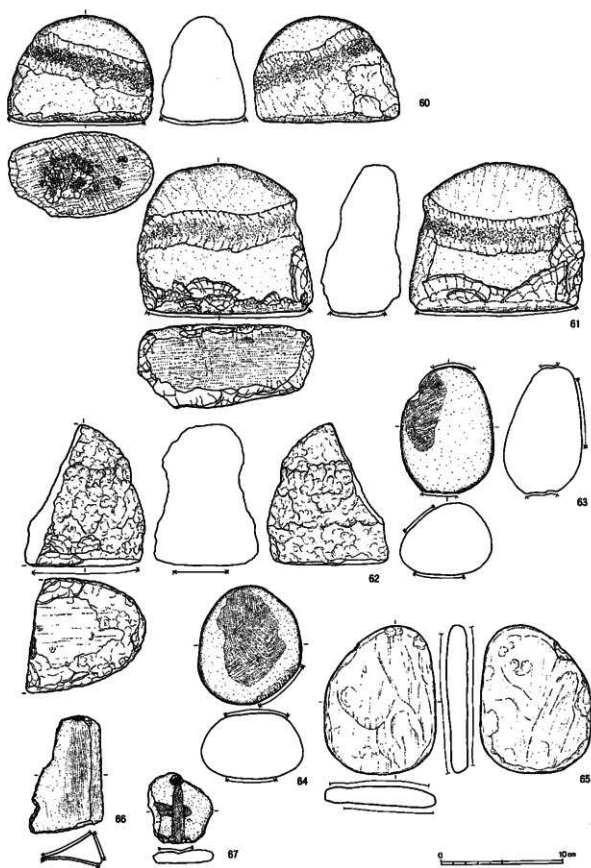
47は安山岩製。楕円礫の長軸上の両端をこう打に用いている。顕著なこう打痕であるが、成形のためか、機能部かの判定は難しい。明瞭な打ち欠き調整。偏平面のうち片側には明瞭なすり跡が残っている。砥石としての転用か。51は凝灰岩製。長楕円礫を使用。断面が鋭角三角形の礫を使用する。鋭角をなす、一辺をすり石として使用している。表面右側の破片は被熱している。すり面にはベッキング痕が明瞭である。たたきつける作業の際に割れた可能性もある。52は安山岩製。楕円礫を使用する。断面が鋭角三角形の礫を使用する。鋭角をなす、一辺をすり石として使用している。すり面は縦方向のすりが入っていなければ、見落とすようなほど微妙なものである。64は凝灰岩製。ほぼ球形の礫の比較的平坦な所を用いてすり石としている。明瞭なすり跡ではないが、平坦で、擦痕が観察できる。



図IV-5-17 包含層出土の石器(5)



図Ⅳ-5-18 包含層出土の石器(6)



図IV-5-19 包含層出土の石器(7)

## 砥石 (図M-5-19-65~67、-5-26、表M-5-8、図版34)

砥石は22点出土した。楕円礫の平坦面を平坦な砥石面にするもの3点(破片も含める)安山岩製が主であり、偏平礫の平坦面を砥面に使うものは11点ある。砂岩若しくは砂質の凝灰岩製である。

65は安山岩製。楕円礫の平坦面裏表を砥石として使用している。裏面右面の欠損は現代のもの。裏面について砥石特有の凹面を有していたため擦り石とはしなかった。66は砂岩製。3面を砥石として使用している。裏表両面について凹面を有している。67は有溝砥石である。凝灰岩製。一本の溝は使用中に砥石が折れたような状況を示している。その後折損残部を有溝砥石として使用している。

## 石鐘 (図M-5-20-68~81、-5-26、表M-5-8、図版36)

石鐘は79点出土した。それらのうち、12点を図化した。図化しなかったものの傾向を述べると、ほとんどが長軸上に対向する打ち欠きを持つものである。流紋岩製は10点、そのうち特徴的なものとして被熱しているもの1点、形態不明なもの2点である。砂岩が3点。安山岩47点のうち、四隅を打ちかいているもの1点、形態不明なもの2点。凝灰岩製7点のうち、小型だが四隅を打ちかいているもの1点(小型)、形態不明なもの2点である。図化したものについて、流紋岩製が68、69、70、77、安山岩製が71~75、78、80、粘板岩製が76、凝灰岩製は79である。

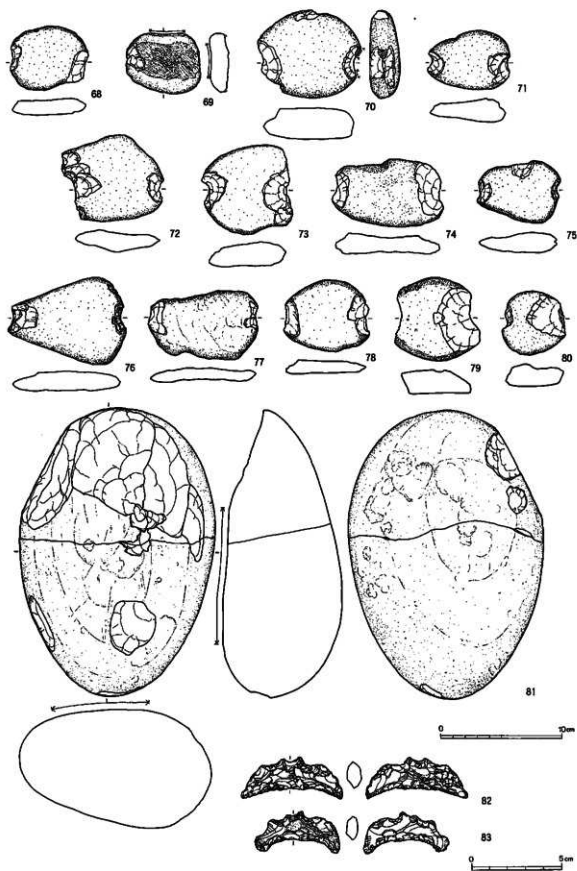
68、70、72~75は両端について両面から打ち欠いている。71、77、78片端が両面から、もう片端は片面のみ打ち欠いている。69は砥面を持つ。転用と考える。片端両面打ち欠きで、片端は潰れる。70の裏面は磨耗する。こう打痕表現で示したところは磨耗によるものか。73は片端折損後に罫製が入る。74は裏面が微妙に磨耗する。75の上端の欠損は成形に無関係である。76は比較的大型である。79の片端は欠損を利用している。80は両端欠損である。

## 台石 (図M-5-20-81、-5-26、表M-5-8、図版37)

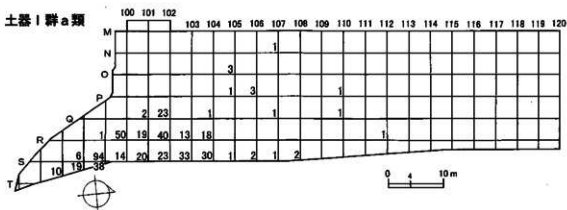
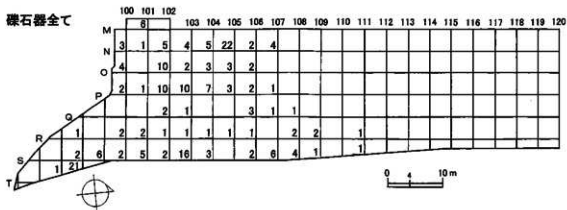
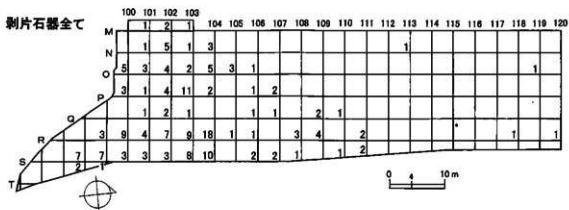
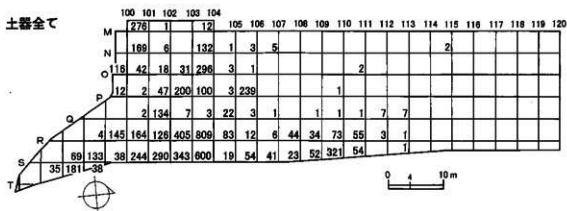
台石は8点出土した。成形にあたり、成形調整痕のあるものはない特に凹み面があるものは大型と中型の砂岩のみ、際立った機能部があるものはない。1点のみ掲載した。81は安山岩製。大型の楕円礫を利用する。被熱により赤みを帯びる。裏表に擦痕を伴う機能面を持つ。掲載しなかった遺物の特徴をあげると、偏平な楕円礫製で使用頻度の少ないものが1点、安山岩製で、大型の礫を使用し、接地面が平坦ではなく、それなりに使用頻度があるものが1点。小型の楕円礫を利用し、それなりに使用頻度があるもので、安山岩製が1点。砂岩製で、中型の楕円礫でそれなりに使用頻度があるものが1点、安山岩製が2点。

## 石製品 (図M-5-20-82・83、表M-5-8、図版37)

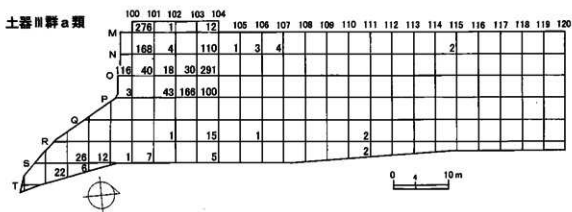
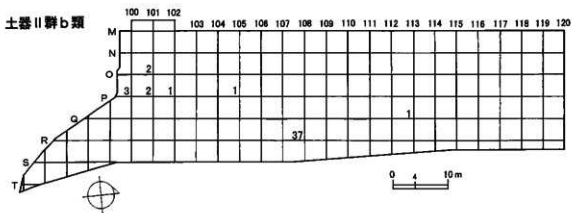
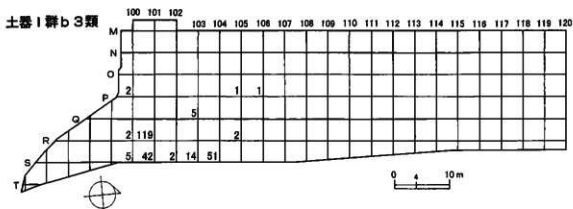
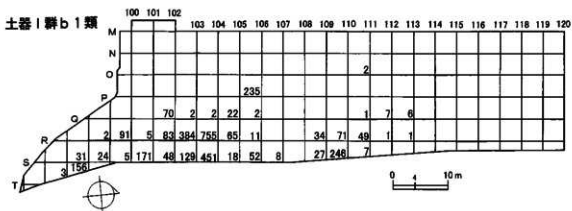
2点出土した。82と83は珪質頁岩類似する形状だが、83の方が裏裏面全面調整がおよんでおり、整った形状である。出土グリッドも同じである。層位が違うのは同グリッドに風倒木があったためと考える。線対称の形状で、翼状の張り出しと、頸部両耳を思わせる上方への張り出しがある。足様の張り出しも下方にのびる82は83に比べて不純物が糲状に混じる石のため成形は丁寧ではないが、同じモチーフと考える。周囲の土器の出土状況から縄文時代中期の可能性がある。形状が似たものではないが、全面に剥離調整が及び、線対称の形状をした石製品は、八雲町内での出土例では、山崎遺跡と柴浜1遺跡がある。いずれも包含層出土遺物として、縄文時代中期前半円筒上層式の土器が伴うが、山崎遺跡(1980 八雲町)では当遺跡とほぼ同時期、柴浜1遺跡(1987 八雲町)ではやや古手の土器が出土している。



図IV-5-20 包含層出土の石器(8)・石製品

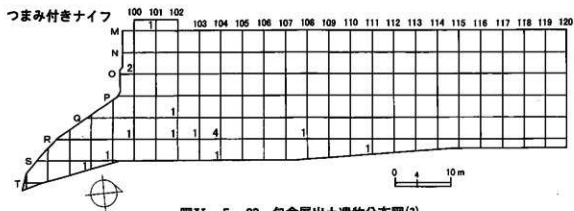
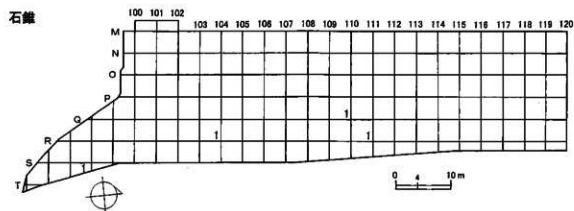
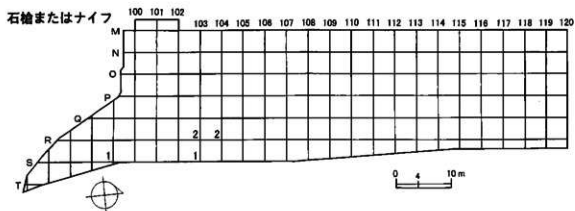
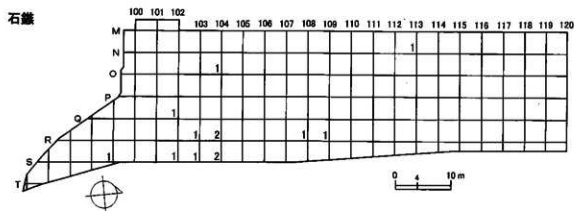


図IV-5-21 包含層出土遺物分布図(1)



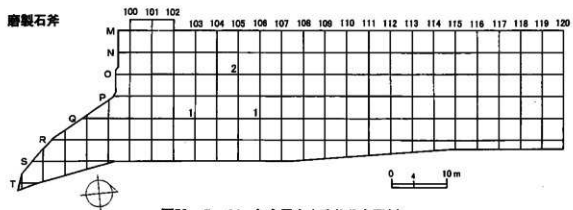
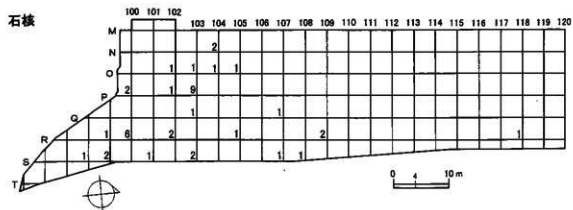
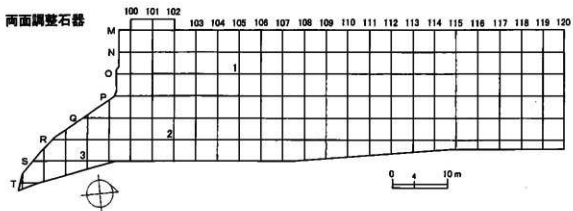
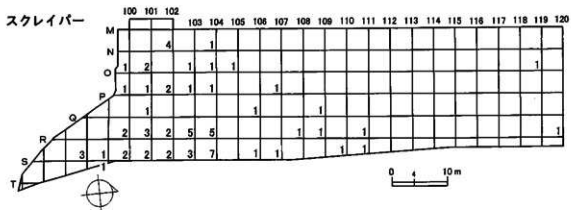
図IV-5-22 包含層出土遺物分布図(2)



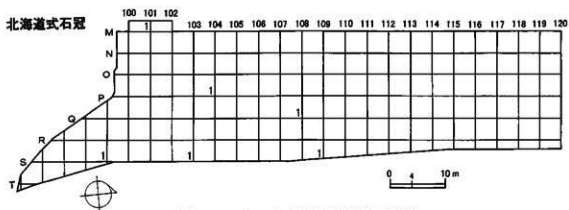
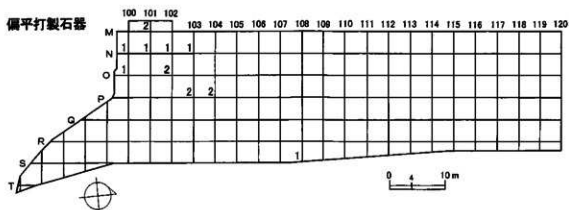
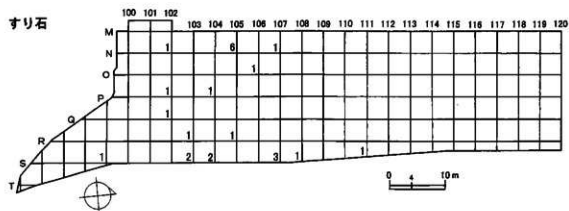
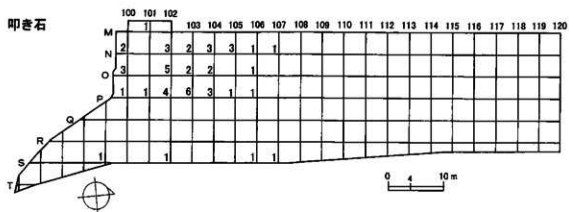


図IV-5-23 包含層出土遺物分布図(3)

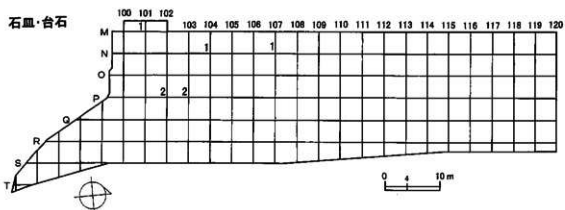
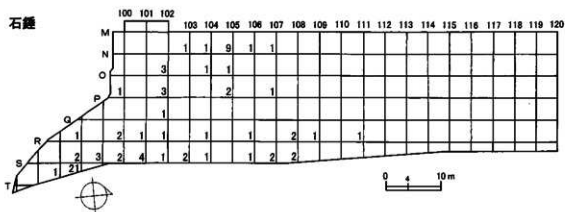
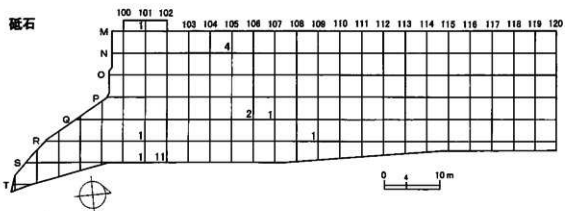
IV ボンシラリカ1遺跡



図IV-5-24 包含層出土遺物分布図(4)



図Ⅳ-5-25 包含層出土遺物分布図(5)



図IV-5-26 包含層出土遺物分布図(6)

表Ⅳ-2 H-1出土遺物点数一覧

	I群 b 1 類	I 群 b 類	II 群 b 類	Uフレイク	剃 片	鏢	合 計
覆土 1 層 野	23		7		5	4	39
覆土 2 層 上位	3				2		5
覆土 3 層	14	1			18	7	40
覆土 4 層	8				2		10
覆土 5 層	15	2			14	1	32
梳					3	1	4
床 面 直 上	58	2		3	26	1	90
合 計	121	5	7	3	70	14	220

表Ⅳ-3 遺構規模一覧

遺構名	種 類	検出面	構築面	位 置	規 模 (単位cm)			平面形	時 期
					長軸(上層/下層)	短軸(上層/下層)	深さ		
H-1	要穴住居跡	Ⅱ層下層	Ⅲ層下層	R108 a, b	(324)/(296)	(102)/(84)	36	隅丸五角形の可能性あり	縄文時代前期後半
H-2	要穴住居跡	Ⅱ層下層	Ⅲ層下層	R105・106, S105・106	(220)/(230)	(196)/(204)	28	隅丸五角形	縄文時代前期後半
P-1	土坑	Ⅱ層下層	Ⅲ層下層	R101	(88)/(68)	(24)/(18)	14	隅丸方形の可能性あり	縄文時代前期後半
P-2	土坑	Ⅱ層下層	Ⅲ層下層	R100	200/170	(85)/(60)	22	隅丸方形の可能性あり	縄文時代前期後半
FC-1	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	S108	35	32	—	不定形	縄文時代前, 中期
FC-2	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	P101 d, R101 a	69	34	—	不定形	縄文時代前, 中期
FC-3	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	R102 c, R103 b, S102 a, d	200	124	—	不定形	縄文時代前, 中期
FC-4	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	P105 a, b	80	50	—	不定形	縄文時代前, 中期
FC-5	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	R100 b, c	130	100	—	不定形	縄文時代前, 中期
FC-6	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	R98 b	140	99	—	不定形	縄文時代前, 中期
FC-7	フレイクチップ集中	Ⅱ層上層	Ⅲ層上層	R100 b	70	50	—	不定形	縄文時代前, 中期

表Ⅳ-4 遺構出土掲載土器一覧

遺構名	図番号	図版番号	掲載番号	遺物番号	点 数	層 位	総点数	備 考
H-1	Ⅳ-4-3	18	1	143	1	覆土3	6	編片87と接合
				8	3	覆土3		
				12	1	覆土3		
				57	1	覆土3		
				—	—	—		
				114	1	覆土3		
				—	1	覆土5層下	2	
				21	1	覆土1	1	
				31	1	覆土5層	1	
				126	1	覆土5層下	2	
				88	1	覆土5層		
				98	1	覆土5層下	2	
118	1	覆土5層下						
126	1	覆土5層下	2					
88	1	覆土5層						
91	1	覆土5層下	1					
79	1	覆土5層下	2					
103	1	覆土5層下						
137	1	覆土1	1					
73	1	覆土5層	1					
78 a	2	覆土5層下	3					
106	1	覆土5層						
H-2	Ⅳ-4-4	19	1	31	2	覆土中	2	
2			31	1	覆土中	1		
3			5	1	覆土中	1		
P-1	Ⅳ-4-5	19	1	2	1	覆土1	1	
			2	4	3	覆土1	3	
1			1	19	覆土1	19		
2			1	3	覆土1	3		
3			6	1	覆土1	1		



図録番号	発掘調査番号	発掘層番号	発掘方法	分類	調査品名・数量等(単位)×点数	検出層	備 考				
		11	拓影写真機	I 跡 a 類	R102b35(背)×5 R102b2(上)×1 R102b42(背)×1	7	内面はナラ調板、外面はヤルボウガイに類似した貝殻押し引き板が見える。その後、ナラ調板が見えなくなる。取り出されたような形の細かな土粒で、土はしまり、4mm前後の白色小石粒と、1mm以下の黒色砂粒が見える。				
			同一部断片	I 跡 a 類	R102b35(背)×1 R102b37(背)×1			2			
		12	a	拓影写真機	I 跡 a 類	P101c9(背下)×6	6	内面はナラ調板、外面は貝殻板による調整板、ヤルボウガイによるものと似た貝殻押し引き板が見られる。表面は平直だが凹凸があり若干の粗かな土粒で、土はしまり、4mm前後の白色小石粒と、1mm以下の黒色砂粒が見える。			
			b	拓影写真機	I 跡 a 類	P101c9(背上)×1 P101c5(背下)×1 R101b8(背下)×1 Q101c9(背中)×1			4	内面はナラ調板、外面は貝殻板による調整板、ヤルボウガイに類似した、貝殻押し引き板が見える。表面は平直だが凹凸があり若干の粗かな土粒で、土はしまり、4mm前後の白色小石粒が見える。	
			c	拓影写真機	I 跡 a 類	R101d26(背下)×3 R101c8(背下)×1 Q100c8(背中)×1					5
			同一部断片	I 跡 a 類	R101b27(背中)×1 P101c9(背下)×1	2					
		13	拓影写真機	I 跡 a 類	R102b38(背下)×4 R102c2(背下)×2	16	内外両面にケズリのようなナラ調板を施す。外面はナラ調、ヤルボウガイに類似した貝殻押し引き板が見える。表面についても同じである。調整板は表面に均等によく穿てる。取り出されたような形の細かな土粒で、しまりがある。4mm前後の白色小石粒が見える。				
		14	拓影写真機	I 跡 a 類	R101c46(背下)×2 R101c49(背上)×1 R101c28(背中)×1 R102b41(背下)×2 R102b38(背下)×2 R101c45(背下)×1	9	ハマダリのような、瓦割形の手の貝殻の調整板を調整板に加工した。連続状近直交文を丁寧なナラ調板の裏に施す。貝殻板を施した裏、ナラ調板を施した裏を持つ。取り出されたような形の細かな土粒で土はしまり、1mm以下の黒色砂粒をまばらに含む。表面は調整板が著しい。内面には貝殻板による調整板。				
		図解-5-2	21	15	復元機	I 跡 a 類	Q09(黒板)×13 Q09(白)×1	14	いびつだが、4層位の厚さを持つ。前方の貝殻板を全面に施した。ナラ調板を施す。前後半分は特に丁寧なナラ調である。口部調整板は丸みを帯びる。内面は貝殻板を施した。ナラ調。土は緻密だが厚手で重なる。厚さ1mm以下の白色砂粒、黒色砂粒が見えてくる。表面は平直で丁寧なナラ調を施す。		
					同一機	I 跡 a 類	Q09(黒板)×2 Q09(白)×1			3	
				16	復元機	I 跡 a 類	Q09(黒板)×3 Q10b15(背下)×2 R09c20(背下)×1 R09d30(背下)×1 R09d45(背下)×1	12	平口板の上部である。前方の貝殻板を全面に施した。ナラ調を施す。口部には平直板を施す。内面は丁寧なナラ調である。土は緻密だが厚さがやや中厚で、厚さ1mm以下の黒色砂粒と調整板が見えてくる。		
同一機	I 跡 a 類				S08(背下)×30 S08(背下)×1 S08(背上)×1 S08(背中)×1	23	平口板の上部である。貝殻の調整板が口部部に均等に施される。その後、ケズル板をナラ調板を全面に施す。その後、胴下部まで左右の前方方向の調整と右方向に引く調整を口部部に2列に施す。口部は調整板が平直である。内面は貝殻板を施した。ナラ調板を施す。土は緻密だが厚く、重なる。厚さ1mm以下の白色砂粒、黒色砂粒が見えてくる。表面には均等によく1mmの調整板が調整板を施す。表面中央には、板を透かす。貫通穴がある。				
17	同一機	I 跡 a 類	Q10b18(背下)×13 Q10c27(背下)×2	15	小形の平直調整板。表面は均等に施す。内外両面にナラ調を施した。貝殻板による調整板を施す。口部には丁寧な平直板を施す。平直板である。土には砂粒をよく含む。						
図解-5-3	22	18	拓影写真機	I 跡 a 類	R102b33(背下)×1 R102b47(背)×1 不明( )×1	3	ハマダリのような、瓦割形の手の貝殻の調整板を調整板に加工した裏層による連続状近直交文を丁寧なナラ調板の裏に施す。貝殻板を施した裏、ナラ調板を施した裏を持つ。取り出されたような形の細かな土粒で、しまりがある。4mm前後の白色小石粒が見える。				
		19	a	拓影写真機	I 跡 a 類	Q101d30(背)×5 Q100d4(背)×1 R101c46(背下)×2 R101c5(背上)×3 R101c45(背下)×1 R101d35(背下)×1	13	取り出し時の調整板を持つ。内外面の調整板はナラ、外面は細かなナラのような調整板がある。土はしまり、砂粒を中心に目立つ。			
			b	拓影写真機	I 跡 a 類	Q101d30(背)×5 Q100d4(背)×1 R101c46(背下)×2 R101c5(背上)×3 R101c45(背下)×1 R101d35(背下)×1			13		
20	a	拓影写真機	I 跡 a 類	R101c49(背)×1 R101d47(背)×1	2	ハマダリのような、瓦割形の手の貝殻の調整板を調整板に加工した裏層による連続状近直交文を丁寧なナラ調板の裏に施す。貝殻板を施した裏、ナラ調板を施した裏を持つ。取り出されたような形の細かな土粒で、しまりがある。4mm前後の白色小石粒が見える。口部部は均等に施す。表面は調整板が著しい。内面には貝殻板による調整板を施す。表面中央には、板を透かす。貫通穴がある。					
	b	拓影写真機	I 跡 a 類	R101c46(背下)×10 R101c49(背下)×2 R101d36(背下)×1 R101b51(背下)×1			14				





発掘調査番号	発掘調査区画番号	発掘調査番号	図化方法	分類	調査区画・発物番号(層位)×数量	出土数	備 考	
調査-5-7		31	拓影複製遺物	I層b1層	Q103b41(平上)×1 Q103b41(平下)×9 Q103b42(中中)×3 Q103b72(平下)×1	14	半径12~15cm。粘土はやや中密で、まばらに小石が混じる。LとR地紋を施した後に口唇部を磨り削って平周縁を調整。内面はナグ調整。	
		32	拓影複製遺物	I層b1層	Q103b73(平下)×11	11	半径16cm前後である。粘土はやや中密である。磨粒をまばらに含む。LとR地紋で、縦方向に同状になるように施す。口唇部にも同一部まで地紋を施す。縄文様文様はナグ調整。	
		33	拓影複製遺物	I層b1層	R103d40(平)×1 R103d11(平)×2	13	半径13~15cmの深部破片。粘土はやや中密でLとR地紋を施してから磨り削って地紋を消し、そこへLとR、LとL地紋を交互に施す。内面は丁寧なナグ調整である。	
		34	a	拓影複製遺物	I層b1層	R103a2(平)×18 R103a25(中中)×2 R103a50(平上)×1	21	半径20cm。粘土はやや中密で、磨粒が混じる。口唇部にはLとR地紋を施した後に、縦方向の地紋による調整を上から磨き込む。その後ナグ調整による地紋を行なう。磨粒はLとR地紋を施した後に口唇部地紋を磨り削り、そこへLとR地紋を施す。
			b	拓影複製遺物	I層b1層	R103a2(平)×6	6	
		35	拓影複製遺物	I層b1層	R103d2(平)×3 R103d40(平下)×3 R103d42(平上)×2	5	20cm前後の半径である。粘土はやや中密で、LとR地紋を磨り削る。磨粒が対向するところもある。地紋を磨り削った後、LとR、LとR地紋を2条ずつ、交互に施す。口唇部にはLとR地紋を施した。ナグ調整を施す。内面は縦方向のナグ調整である。	
		25	a	拓影複製遺物	I層b1層	Q102c21(平上)×8 Q102c26(平上)×2	10	半径12~15cm。粘土はやや中密で、まばらに小石が混じる。LとR地紋を施した後に、口唇部を磨り削り、その後にLとRと平入。次に、口唇部地紋を磨り削る。その後、LとR地紋を口唇部地紋と同様に施した。縦地紋を交互になるように4単位で施す。その後LとR地紋、縦方向の地紋を磨り削る。縦地紋を交互になるように4単位で施す。その後LとR地紋を交互に施す。内面は丁寧なナグ調整である。
				b	拓影複製遺物	I層b1層	Q102c37(平)×6	6
			37	拓影複製遺物	I層b1層	S97d36(平)×4 S97d36(平)×4 S97d12(中中)×6 S97d25(中中)×6	20	半径10~12cmである。粘土はやや中密で、縦径1cm以下の磨粒が混じる。LとR、LとRを交互に施す。口唇部にはLとRの地紋を施す。地紋はLとRとLとRの2種類あり、対向させている。
				同一破片	I層b1層	S97d23(中中)×1 S97d12(中中)×2 S97d12(中中)×2 S97d14(中中)×2 S97d23(中中)×1 S97d25(中中)×1	9	
38	拓影複製遺物				I層b1層	R103a20(平)×3	3	口唇部破片である。粘土はやや中密で、縦径1cm以下の磨粒が5cm前後の小石がまばらに混じる。LとR地紋を地紋として施し、口唇部にはLとR地紋を連続する。その後、ナグ調整を施し、口唇部を磨き込む。内面は丁寧なナグ調整である。
a	拓影複製遺物				I層b1層	R103a20(平)×3	3	磨り削る。粘土はやや中密で、縦径1cm以下の磨粒が5cm前後の小石がまばらに混じる。LとRとLとR地紋を交互に施して縦方向の同状に施す。内面は丁寧なナグ調整である。
	b	拓影複製遺物	I層b1層		R103a3(平下)×2 R103a9(中中)×2	4		
40	拓影複製遺物	I層b1層	Q102c47(平上)×5	5	磨り削る。粘土はやや中密である。磨粒をまばらに含むLとRとLとR地紋を交互に施すことにより同状にする。内面はナグ調整。			
同一破片	I層b1層	F101a11(平下)×2	2					
	41	拓影複製遺物	I層b1層	Q102c21(平)×3 Q102c27(平)×6 Q102c18(平上)×4 Q102c10(中中)×2 Q102c37(平)×2 Q102c10(中中)×1 Q102c10(中中)×3 Q102c37(平)×1 Q102c10(中中)×1	25	粘土はやや中密である。磨粒をまばらに含む。ナグ調整もしくは磨り削り後の磨り削りについて、LとL+Rの三本線地紋を縦方向に施した。上部に縦方向の同一破片による地紋を施す。その後全面を磨り削り、L+L+Rの三本線地紋を縦方向に施す。内面は縦方向のナグ調整である。磨った口唇部についても縦線地紋を施す。ナグ調整により成形する。		
42	拓影複製遺物	I層b1層	Q102c37(平)×5	5	磨り削る。粘土はやや中密である。磨粒と磨粒をまばらに含むLとR地紋を施した。LとL+Rの三本線地紋を縦方向に、さらにLとRの縦方向の磨粒地紋を磨り削る。その後、全面にナグ調整を施す。その際に磨いた破片の粘土の磨り削りを行う。内面は磨り削りナグ調整である。			
43	拓影複製遺物	I層b1層	Q102b25(中中)×2	3				
44	拓影複製遺物	I層b1層	Q102b25(中中)×3	3				
調査-5-8	27	拓影複製遺物	I層b1層	R102c34(中中)×3	3	磨り削る。LとRによる地紋であり、縄文様にナグ調整を施す。その後、磨り出した磨り削るに磨り削るを施して磨り削る。底面は磨り削りナグ調整であり、ナグ調整である。		
		同一破片	I層b1層	R102c34(中中)×1 R102b27(中中)×1	2			





表IV-7 包含層出土掲載再生土製品一覧

掲載図番号	掲載図版番号	掲載番号	調査区名	遺物番号	点数	層位	備考
IV-5-12	30	1	R102 b	40	1	Ⅲ層下位	貝殻条痕平底の破片からの転用 口唇部から4mmほどの擦り切りによる溝 平口縁で、内面、外面ともに貝殻条痕 円形の穿孔器表面から貫通させた後、裏面から調整のように開け直す
		2	R101 d	37	1	Ⅲ層下位	貝殻条痕平底の破片からの転用 口唇部から8mmほどの擦り切りによる溝 平口縁で、内面、外面ともに貝殻条痕
		3	R97 c	28	1	Ⅲ層下位	東鋼路Ⅲ式の転用 側縁は擦りによって調整 いびつな円形穿孔時に割れたものを再調整か 内面は板ナゲのような調整である
		4	Q103 b	24	1	Ⅲ層中位	東鋼路Ⅲ式 側縁は擦りによって調整 穿孔時に割れた痕跡 内面はナゲ調整
		5	N100	1	1	Ⅱ層	貝殻条痕縦圧痕の連続 内面はナゲ調整 きめ細かな胎土に粒径1mm以下の黒色砂粒が目立つ 縁辺は打ち欠き調整だが、凹部には擦り調整を確認
		6	Q110 b	8	1	Ⅲ層下位	打ち欠きによって調整 組紐圧痕を持つ土器を転用 内面には厚く煤が付着
		7	Q102 c	11	1	Ⅲ層中位	東鋼路Ⅲ式の転用 L R縄文による斜行縄文 内面はナゲ調整で、煤が付着する打ち欠き調整によって円形にする
		8	Q110 b	7	1	Ⅲ層下位	東鋼路Ⅲ式の転用 縦にR L縄を施した後、横にR L縄による縄線に施す 胎土はしまりがあり、砂粒が目立つ 内面はナゲ調整で煤が付着する

表IV-8 包含層出土掲載石器一覧

図番号	図版番号	掲載番号	分類	調査区(層位)	全長×幅×厚さ cm	重量 g	石質	備考
IV-5-13	31	1	石 鏃	R103 b 2・40(N上)	17.7×8.6×2.2	2.2	珪質頁岩	
		2	石 鏃	Q103 a・91(N)	23.2×11.3×2.7	0.8	珪質頁岩	
		3	石 鏃	M112・1(N)	55.5×11.2×3.6	2.3	珪質頁岩	
		4	石 鏃	Q108 d 7(Ⅲ中)	23.5×10.7×3.4	0.8	珪質頁岩	
		5	石 鏃	片 R102 a 35(Ⅲ下)	17.0×12.7×2.6	0.7	硬質頁岩	
		6	石 鏃	Q107・16(Ⅲ)	23.7×15.6×3.6	0.8	黒曜石	
		7	石 鏃	N103・6(Ⅲ上)	32.9×13.9×4.2	1.6	硬質頁岩	
		8	石 鏃	未製品 S97 d 13(Ⅲ中)	34.3×22.0×4.5	3.6	硬質頁岩	
		9	石 鏃	R103 a 4・55(N下)	30.6×12.9×5.4	1.9	黒曜石	
		10	石槍又はナイフ	Q103 c 15(Ⅲ中)	85.1×30.9×8.0	16	硬質頁岩	
		11	石槍又はナイフ	Q102 b 77(Ⅲ)	106.×31.0×10.8	28.1	硬質頁岩に珪質分が蓄状に入り込む	
		12	石槍又はナイフ	N104・3(Ⅲ)	92.8×34.9×17.0	38.2	メノウ質とも言える珪質頁岩	
		13	石 鏃	Q103 d 80(N)	60.2×17.8×9.6	10.7	珪質分の多い硬質頁岩	
		14	つまみ付ナイフ	Q99c(N)	73.0×61.5×14.0	37.6	珪質頁岩	
		15	つまみ付ナイフ	R103 a 42(Ⅲ下)	97.2×38.5×13.5	19	硬質頁岩	
		16	つまみ付ナイフ	Q101・16(Ⅲ)	75.8×21.0×7.2	8	珪質分の多い硬質頁岩	
		17	つまみ付ナイフ	Q102 c 12(Ⅲ中)	57.1×15.1×9.0	4.4	珪質分の多い硬質頁岩	
		18	つまみ付ナイフ	P101 a 2(Ⅲ下)	49.5×20.0×5.0	3.4	珪質分の多い硬質頁岩	
		19	つまみ付ナイフ	N99・13(Ⅲ下)	49.0×49.8×13.9	13.7	珪質頁岩	
		20	つまみ付ナイフ	R98 b 6(Ⅲ中)	69.5×35.0×7.0	10.8	珪質頁岩	
		21	つまみ付ナイフ	L100 b 2(Ⅲ上)	66.7×26.3×9.7	19	珪質頁岩	
		22	スクレイパー	R102 a 50(Ⅲ下)	57.3×35.1×14.8	22.4	硬質頁岩	塊状石器

図番号	図版番号	掲載番号	分類	調査区(層位)	全長×幅×厚さ mm	重量 g	石質	備考
IV-5-14	32	23	スクレイパー	R97c11(Ⅲ中)	55.3×30.8×10.5	16.5	硬質頁岩	再編調整石器と分類区分
		24	スクレイパー	R99c38(Ⅳ)	42.2×29.2×12.5	16.9	硬質頁岩	
		25	スクレイパー	R101b3(Ⅲ上)	46.9×23.6×9.3	7.1	珪質分の多い硬質頁岩	
		26	スクレイパー	N118-1(Ⅲ)	66.5×54.5×13.1	39.1	珪質頁岩	
		27	スクレイパー	Q100d11(Ⅲ中)	69.0×33.0×23.0	29.1	硬質頁岩	
		28	スクレイパー	Q101c3(Ⅳ下)	118.0×46×18	44.3	珪質頁岩	
		29	スクレイパー	Q107-5(Ⅲ)	71.7×32.4×16.9	28.7	珪質頁岩	
		30	スクレイパー	Q103d11(Ⅲ中)	36.8×22.0×4.7	3.5	硬質頁岩	
		31	スクレイパー	R103a1-46(Ⅳ上)	78.0×35.0×16.8	21.3	硬質頁岩	
		32	スクレイパー	O100-16(Ⅳ)	94.0×35.2×13.6	53.1	硬質頁岩	
		33	スクレイパー	R99b12(Ⅲ中)	44.0×76.0×15.2	47.7	珪質頁岩	
		34	スクレイパー	Q99-30(Ⅲ)	33.7×64.7×12.8	23.4	珪質頁岩	
		35	スクレイパー	S98-6(Ⅲ下)	78.5×44.0×14.5	45	珪質頁岩	
		IV-5-15	36	36	スクレイパー	N100-3(Ⅲ)	60.3×88.5×19.0	
37	スクレイパー			R102a17(Ⅲ中)	46.3×36.4×14.2	19	珪質頁岩	
38	スクレイパー			Q103c77(Ⅳ)	53.1×44.6×13.1	34	硬質頁岩	
39	スクレイパー			R103a2(Ⅳ上)	68.4×56.6×18.5	84.2	珪質頁岩	
IV-5-16	33	40	両面調整石器	R97b5(Ⅲ上)	85.4×123×38	370.4	珪質頁岩	
41		石 核	R106d(Ⅲ下)	193×109×107	2100	珪質頁岩		
42		石 斧	N104-2(Ⅲ)	95.0×45.0×16.0	96.6	緑色泥岩		
IV-5-15		43	43	石 斧	N104-1(Ⅲ)	95.0×47.0×16.5	117.5	緑色泥岩
	44		石斧再成未成品	P105c9(Ⅳ上)	76.5×33.5×11.2	55.2	片麻石	
IV-5-17	34	45	たたき石	N102-11(Ⅲ)	120.8×59.5×32.2	3022	安山岩	
		46	たたき石	M104-1(Ⅲ上)	128.0×83.1×49.0	750	砂岩	
		47	すり石	R102d29(Ⅲ上)	177.0×116.0×43.0	1250	安山岩	
		48	たたき石	R105a15(Ⅲ下)	105.0×75.0×32.0	3616	凝灰岩	
		49	たたき石	N102-6(Ⅲ)	89.0×58.5×19.5	1374	砂岩	
		50	たたき石	L100c2(Ⅲ上)	15.2×10.9×2.7	460	安山岩	
		51	すり石	R106c14(Ⅲ下)	7.4×19.8×4.3	910	凝灰岩	
				R110c11(Ⅲ下)				
		52	すり石	R102c59(Ⅲ下)	177.0×148.0×40.5	620	安山岩	
		IV-5-18	35	53	偏平打製石器	O103-5(Ⅲ下)	98.0×131.0×26.5	4234
54	偏平打製石器			O103-22(Ⅲ中)	86.0×131.5×26.5	396.6	安山岩	
55	偏平打製石器			M100-3(Ⅲ上)	108.0×132.5×24.2	316.8	凝灰岩	
56	偏平打製石器			M101-3(Ⅲ中)	93.0×146.0×25.5	393.6	安山岩	
57	偏平打製石器			M102-13(Ⅲ上)	103.0×144.0×17.1	316.4	安山岩	
58	偏平打製石器			O102-9(Ⅲ下), O102-2(Ⅲ上)	100×174.0×22.5	463.8	安山岩	
IV-5-19	36	59	北海道式石冠	P107c1(Ⅲ上)	96.5×134.5×51.0	785	安山岩	
		60	北海道式石冠	L100-6(Ⅲ下)	86.0×118.5×69.5	96.5	安山岩	
		61	北海道式石冠	O103-13(Ⅲ上)	121.0×142.5×68.0	1590	安山岩	
		62	北海道式石冠	R108d2-12(Ⅲ上)	11.5×9.8×9.3	790	凝灰岩	
		63	たたき石	M102-7(Ⅲ上)	130.0×76.0×61.5	6750	安山岩	
		64	すり石	M106-7(Ⅲ上)	96.0×84.5×64.5	615	凝灰岩	
		65	砥 石	L100-4(Ⅲ中)	12.05×9.0×1.74	275	安山岩	
66	砥 石	R102d(Ⅲ中)	95.0×60.0×26.3	1080	砂岩			
67	有溝砥石	M104-9(Ⅲ下)	58.0×52.3×77.7	36.3	凝灰岩			

IV ボンシラリカ1遺跡

図番号	図版番号	掲載番号	分類	調査区(層位)	全長×幅×厚さ mm	重量 g	石質	備考
IV-5-20		68	石 錘	Q97・1(表面採集)	52.5×64.0×14.2	63.9	流紋岩	
		69	石 錘	Q100 c 18(Ⅲ下)	49.5×62.0×15.2	50.9	流紋岩	
		70	石 錘	R102 c 10(Ⅲ上)	72.0×85.0×25.0	2034	流紋岩	
		71	石 錘	R105 b 4(Ⅲ上)	67.5×44.0×20.1	71.2	安山岩	
		72	石 錘	R106 b 1(Ⅲ上)	72.0×89.0×20.7	1113	安山岩	
IV-5-20	36	73	石 錘	R106 c 15(Ⅲ下)	73.0×75.0×20.5	1334	安山岩	
		74	石 錘	Q99・31(Ⅲ)	50.5×92.0×20.5	1206	安山岩	
		75	石 錘	O106・5(Ⅳ)	51.0×67.8×15.8	54.3	安山岩	
		76	石 錘	N104・4(Ⅲ)	71.5×97.0×16.5	1376	粘板岩	
		77	石 錘	M106・11(Ⅲ下)	56.0×90.5×12.5	59.4	流紋岩	
		78	石 錘	M105・4(Ⅲ上)	58.5×71.1×10.7	59.7	安山岩	
		79	石 錘	M102・5(Ⅳ)	68.5×70.0×20.0	99.7	凝灰岩	
		80	石 錘	M104・12(Ⅲ中)	51.9×51.6×19.8	51.4	安山岩	
	37	81	石 重	L100 c 5(Ⅲ中)	23.6×16.1×10.0	4920	安山岩	
		82	石 製品	N103 c 2(Ⅲ中)	22.2×47.0×7.3	4.8	珪質頁岩	
		83	石 製品	N103 c 1(Ⅲ上)	23.0×56.0×8.6	8.3	珪質頁岩	

## V 黒岩3遺跡

### 1 発掘区の設定

発掘区の設定は、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）八雲北工事区測量図（縮尺1000分の1）を使用し、工事区予定中央線上の中心杭S.T.A. 838とS.T.A. 839を結んだ線を基準のMラインとした。Mラインから4m毎に西側をL、K、J…、東側をN、O、P…とした。また、S.T.A. 838を通り、Mラインに直交する線を100ラインとした。さらにそれより4mごとに北側を101、102、103…とした。発掘区はこの4m方眼を基準にし、その南西側の交点（図では左上）のアルファベットと数字の組合せでグリッドの名称とした。また、調査の必要に応じて2m方眼に分割し、遺物の取上げを行った。そこではグリッドの基準（南西角）から反時計回りにa、b、c、dとした。

なお、この方眼の平面直角座標は第Ⅷ系で以下のとおりである。

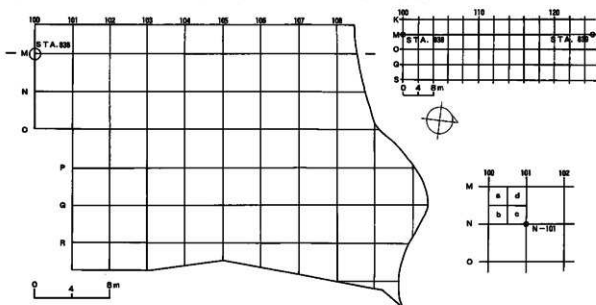
S.T.A. 838（調査区M-100） X=-181333.3108 Y=+3094.4334

S.T.A. 839（調査区M-125） X=-181234.5621 Y=+3078.6691

### 2 調査の方法

#### (1) 発掘調査の方法

発掘調査に先行し重機により表土の除去、根株の抜根を行った。調査区の設定杭、4m方眼の基準杭の設定は業者に委託した。調査はグリッド単位に行い、まず遺物の分布状況を把握するためにM-102、M-104、P-104、N-108、P-109、R-108・109を層位ごとに掘り下げた。その結果、各グリッドとも剥片、土器片が散漫に出土し、礫が非常に多いことが判明した。そこで、調査区全域をⅣ層まで層位ごとに手掘りして調査することにした。また、排土の関係から沢側から調査を行い、グリッドごと層位ごとに順次100ライン側へ掘り進んでいくことにした。調査工程の関係上、6月13日～7月13日はボンシリカ1遺跡の調査を行い、黒岩3遺跡の調査を中断した。



図V-1-1 発掘区設定図

調査再開後、調査区南側で住居跡が確認された。さらに南側の調査区外にも遺構が分布する可能性があるため、170㎡について調査区を拡張した。結果、遺構の分布はみられなかったが、遺物は当初の調査区と同様の密度で出土した。

遺物の取上げは、礫が非常に多いことから、土器や石器といった明らかに遺物とわかるものについては2m方眼の小発掘区で取上げ、それ以外のものについてはグリッド単位で取上げ、選別した。また、遺構の遺物については住居跡の場合、基本的に出土位置、標高、層位を記録したが、遺構を覆う自然堆積層のもの、フレイク・チップ集中については一括して取り上げた。

## (2) 整理の方法

現地では、遺物取上げ後、水洗・注記し、大まかな分類をした後、遺物台帳を作成した。遺物台帳は下書き後、マイクロソフトエクセルに入力し、集計した。なお、注記は以下のようにした。

(包含層)

(遺構)

クロ3- (グリッド) - (層位)

クロ3- (遺構名) - (遺物番号)

冬季の室内整理作業では、台帳の補正、遺物の接合作業、遺物の実測及び作図、集計、記録類の整理を行った。土器については分類の見直しを行い、接合を行った。接合にあたっては同一固体の把握に努めた。接合により器形の復元にいたるものがなかったため、破片資料の拓影図のみを掲載した。掲載にあたっては、おおよそ文様構成や器形のわかるものを選別した。石器については分類の見直し後、完形品を中心に器種や形態に隔たりのないよう代表的なものを選び出し実測した。また、掲載石器については長さ、幅、厚さ、重量を計測した。また、剥片については石器も含め同一母岩の識別に努めながら接合作業を行った。接合資料の掲載は剝離過程がわかるものについて選び出し実測した。

収納については、報告書掲載のものは図版に対応するように1点づつ収納した。それ以外については遺構出土のものは遺構ごとに分類毎に収納し、包含層出土のものはアルファベットラインごとに層位別に収納した。

## 3 基本層序

黒岩3遺跡の土層断面図を図V-3-2・3に示した。調査区は北東—南西方向に緩やかに傾斜しており、また緩やかな尾根を持つ。また、土層全体に頁岩・チャートの角礫が多く含まれた。角礫の大きさは中礫・大礫が多いが、人頭大の礫も少なくない。

I層 黒色土。いわゆる表土層。調査区の現況は植林による杉林と笹地であるが、笹地はかつての畑地が放棄されたものといわれた。層厚約8cm。

II層 黄褐色軽石。駒ヶ岳起源のKoordとみられる。噴出年代は1640年とされる。層厚約6cm。

III a層 褐色土。粘性、しまりとも強く、細粒。特にS-106杭付近では漸移的ながらさらに灰褐色土と褐色土に分層できた。灰褐色土は均質で、細粒であったため火山灰の可能性を考えて、顕微鏡観察を行ったが、風成の地表物質の混合堆積物とみられた。層厚約15~20cm。

III b層 暗黒褐色土。粘性、しまりとも弱い。乾燥するとクラック入る。顕微鏡観察を行った結果、本層の構成物はV層（ローム層）と同じで、風成の地表物質の混合層と見られた。層厚約15~20cm。

IV層 暗黄茶褐色土。粘性、しまりとも強い。漸移層。層厚約20cm。

V層 黄褐色土。粘性、しまりとも強い。いわゆるローム層。層厚は約

I	黒土
II	koord
III a	褐色土
III b	黒色土
IV	漸移層
V	ローム層

図V-3-1 基本層序



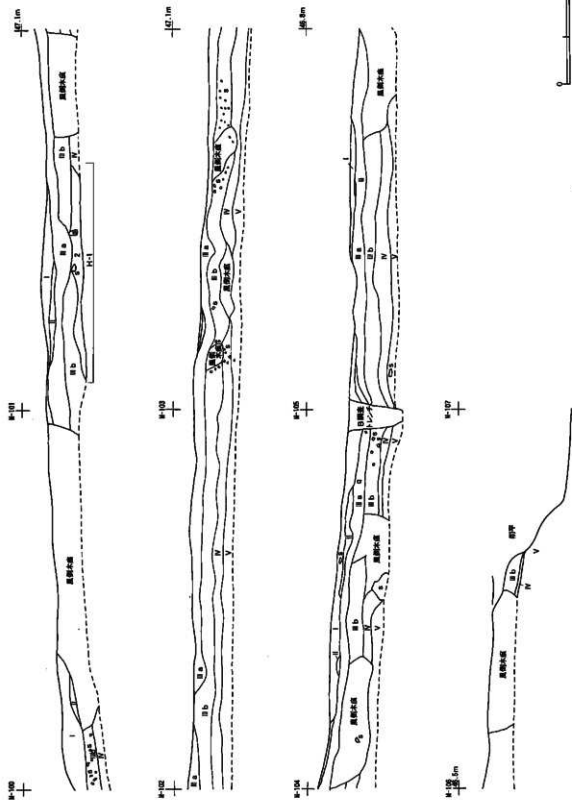
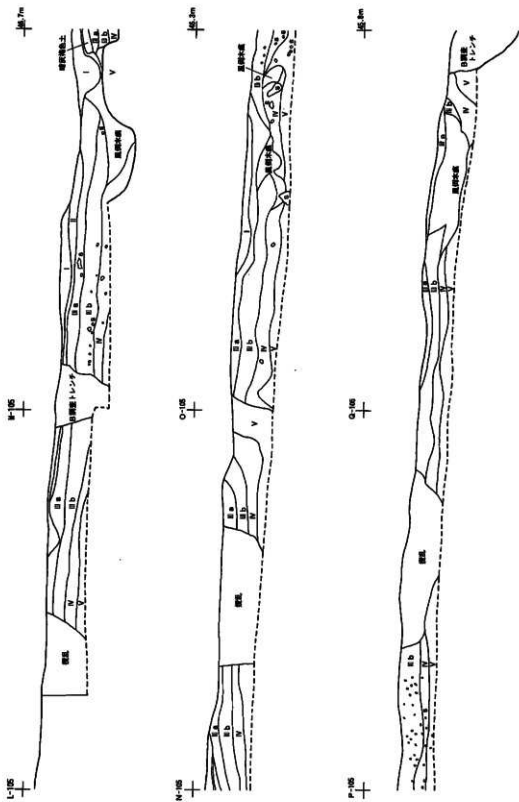


圖 V-3-2 土壤剖面圖(1)



図V-3-3 土層断面図(2)

35cmある。これより下位はシルト層で、層厚は約3mある。ローム層、シルト層には他の層に比べ多くの礫が含まれた。多くは頁岩の角礫であるが、チャートの円礫も含む。シルト層の下位には青灰色粘土層がみられた。

このうち明瞭ではないもののⅣ層から縄文時代早期、Ⅲb層から縄文時代中期、Ⅲa層から縄文時代後期の遺物が出土した。

#### 4 遺構と遺構出土遺物

##### 概要

今回調査した範囲からは、住居跡2軒(H-1・2)、焼土2か所(F-1・2)、フレイク・チップ集中5か所(FC-1~5)の遺構が検出された。

時期については、住居跡は床面、覆土の遺物から縄文時代中期末葉の遺構と推定された。住居の遺物の接合状況を見ると、H-1炉跡差し込み土器に接合するものが、H-2覆土から出土していることから、H-2→H-1の新旧関係が想定できる。焼土は検出層位から縄文時代の遺構とみられるが、遺物が伴っておらず、詳細な時期は不明である。フレイク・チップ集中については土器が共伴したFC-1については縄文時代後期前葉とみられるが、ほかは不明である。なお、FC-3は剥片を主体に、石器素材・Rフレイク・Uフレイク・石核が集中的に出土したもので、埋納されたものと考えられた。

##### (1) 住居跡

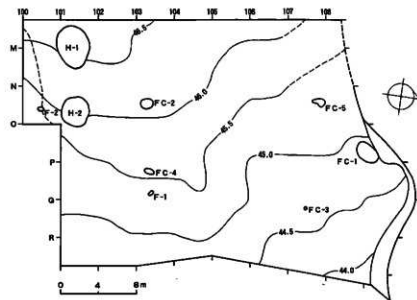
H-1 (図V-4-3・4、表V-1・3・6・7、図版43・44・47)

位置 L-100・101、M-100・101

規模 (441)/(437)×(310)/(302)×28

平面形 楕円形

確認 M-100グリッドをⅣ層上面まで掘り下げた時点で、石囲炉が検出された。同グリッドは風倒木が多く、平面から遺構の窪みを認識することができなかったが、Mラインをメインセクションに



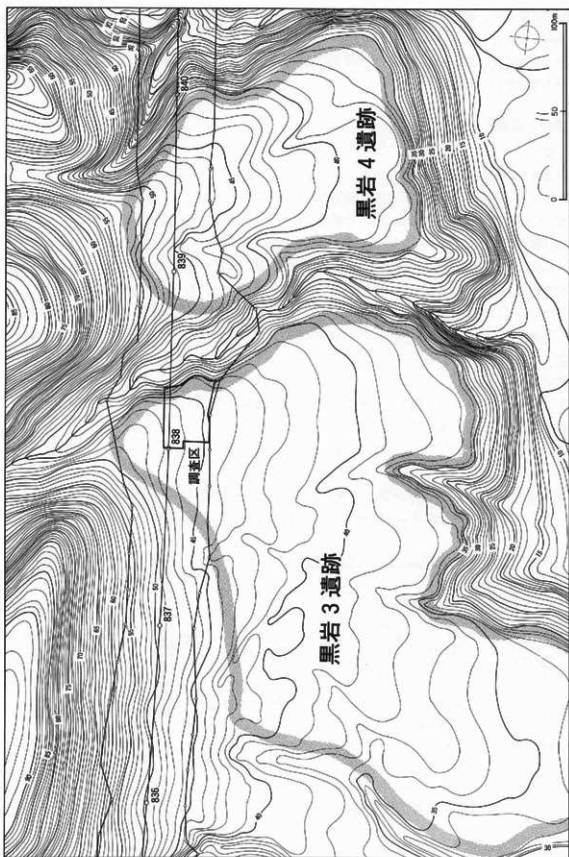
図V-4-1 遺構配置図

表V-1 検出遺構一覧

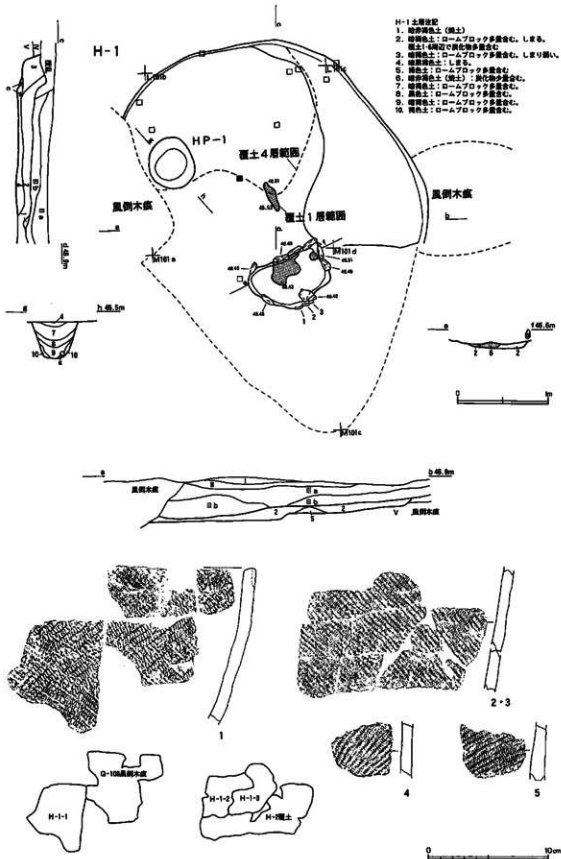
検出層位	H	F	FC
Ⅲa層上面			2
Ⅲa層			1
Ⅲb層上面			1
Ⅲb層	1	1	
Ⅳ層上面	2	1	

表V-2 H-1出土遺物  
点数一覧

出土層位	土器		礫
	Ⅲ群b類	剥片	
Ⅲb	6	27	
覆土2		7	
覆土3		2	
床		1	
炉	3		11
合計	9	37	11

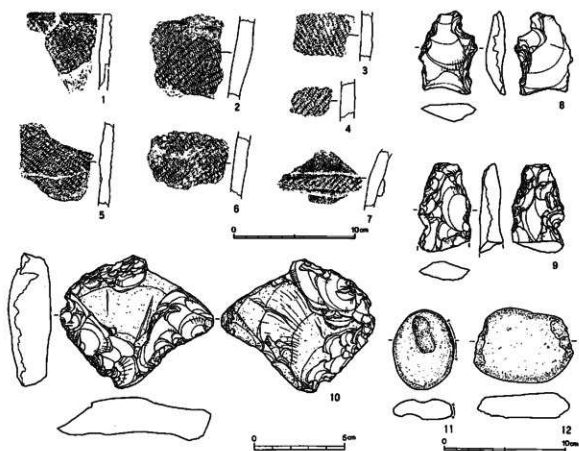
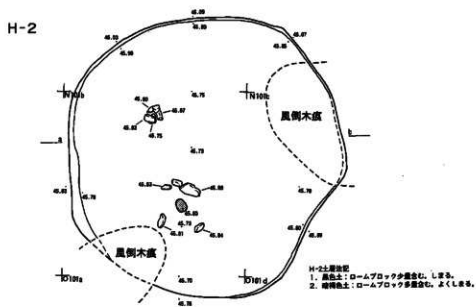


図V-4-2 周辺の地形と調査区

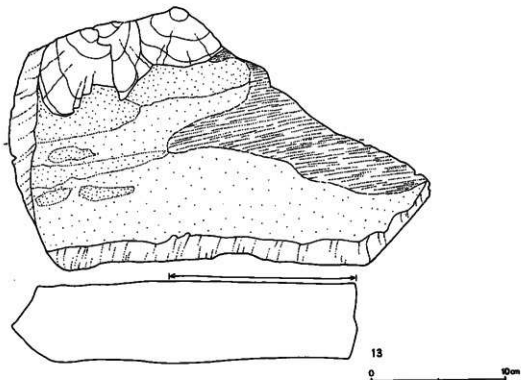


図V-4-3 H-1 (i)及び出土遺物





図V-4-5 H-2及びH-2出土遺物(1)



図V-4-6 H-2出土遺物(2)

遺物 覆土2層から剥片7点、覆土3層から剥片2点、床面から剥片1点、土器3点(炉の土器囲い)出土した。また、住居埋没後のⅢb層からは土器6点、剥片27点が出土している。このうち図示したのは土器4点。

1～3は、炉に差し込まれていたもので、Ⅲ群b類とみられる。1はQ-108風倒木痕出土土器と、2・3はH-2覆土出土土器と接合した。なお、差し込んだ方向は、口縁側を上に向けたものであった。1は、口縁部～胴部上位にかけての資料で、口唇はやや角張り、折り返し口縁となっている。口縁折り返し後、単節のRLとLRで交互に施文した羽状縄文にしている。2・3は、単節RLで斜縄文が施文される。胎土に砂粒が多いのが特徴。4・5は住居廃絶後の覆土(Ⅲb層)から出土したもので、共に単節LRによる斜縄文が施文される。

時期 住居使用時の遺物として確実な炉跡差込土器から縄文時代中期末の遺構と考えられる。

H-2 (図V-4-5・6、表V-3・6・7、図版45・47)

位置 N-101、O-101

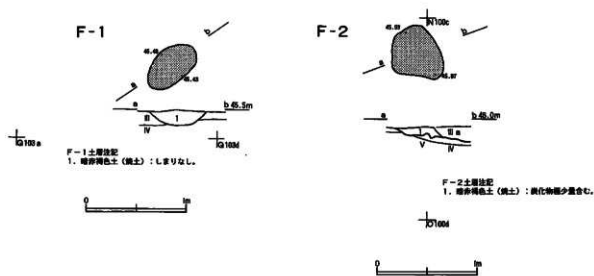
規模 303/301×(303)/(300)×20

平面形 円形

確認 N-101グリッドをⅣ層上面まで掘り下げた時点で、Ⅲb層の落ち込みとして確認した。

壁・床 掘り込みはやや浅く、Ⅲb層中に遺構構築面が存在したものとみられる。壁は西側ではやや急に立ち上がり、北側と南側では、やや緩やかな立ち上がりを示したが、東側では不明瞭になり、立ち上がりを確認することはできなかった。地形が西側から東側に掛けて緩やかに傾斜しており、H-1同様東側はほとんど掘り込まれなかったものとみられる。





図V-4-7 F-1・2

**炉 跡** 方形の石囲炉が確認された。明瞭な焼土は認められず、炭化物の集中が石囲いの中央に見られた。炉石は被熱していた。

**覆 土** 2層に分層した。

**柱 穴** 確認できなかった。ただ、住居南西側に3個の立石により三角形に配置された石組みがみられた。その下位に直径12cmの黒色土がみられたが根の可能性が強いものと判断した。あるいは組み石により柱の根元をおさえたものかもしれない。

**遺 物** 覆土から土器22点、剥片514点、スクレイパー1点、両面調整石器3点、Rフレイク3点、叩き石2点、台石1点、石錘1点、礫1点が出土している。剥片は覆土の西側でフレイク・チップ集中を形成していた。このうち図示したのは土器7点、スクレイパー1点、両面調整石器2点、叩き石1点、石錘1点、台石1点。

1～12は、いずれも覆土出土の土器で、Ⅲ群b類とみられる。1は口縁部で、単節LRを縦に回転させて斜縄文を施文している。口唇は角張る。2～6は斜縄文を施文したものの。7は無文帯上に貼付帯を付し、その上に単節LRで斜縄文を施文したものの。

8は、縦長剥片の側縁に刃部を作出したスクレイパー。頁岩製。9は頁岩製両面調整石器。恐らく筒状石器の基部とみられる。10は頁岩の偏平な角礫を素材にした両面調整石器。石器の未製品であろう。11は安山岩製の叩き石。偏平な礫の縁辺の一部に敲打痕が見られる。また、両面には自然に形成されたとみられる窪みがあるが、ちょうど指をかけやすい位置にある。12は安山岩製の石錘。偏平な礫の長軸両端に両面から打ち欠きを行っている。

13は組み石の一つで、凝灰岩製台石。部分的であるが両面にすり痕がみられ、一面の側縁には剥離が見られる。

**時 期** 遺物がいずれも住居廃絶後のものであるため、詳細な時期を明らかにすることはできない。しかし、H-1使用時の遺物が覆土に含まれたことから縄文時代中期末以前と推定できる。

(2) 焼土

F-1 (図V-4-7、表V-4、図版46)

位置 P-103

規模 57×33×16

平面形 楕円形

確認 III b層掘り下げ中に、焼土を確認した。

遺物 出土していない。

時期 層位から縄文時代に形成されたものとみられる。

F-2 (図V-4-7、表V-4、図版46)

位置 N-100

規模 58×49×6

平面形 不整形

確認 IV層上面精査中に、焼土を確認。

遺物 出土していない。

時期 層位から縄文時代早期に形成されたものとみられる。

(3) フレイク・チップ集中

FC-1 (図V-4-8、表V-5・6・7、図版46・48)

位置 O-108・109

規模 172×130

確認 II層除去後確認。

特徴 III a層上面～下部にかけて遺物が集中的に検出された。

遺物 土器13点、Rフレイク1点、両面調整石器4点、石核1点、剥片154点、礫1点が出土。このうち、土器2点、両面調整石器4点、石核1点を図示した。

1・2は、単節RLによる斜縄文が施文された土器で、同一個体の可能性が有る。IV群a1類とみられる。1は折り返し口縁を持つもので、縄文の施文は口縁折り返し後、折り返し部を含め施文している。口唇部はやや角張る。

3～6は頁岩製両面調整石器。このうち3～5は石槍又はナイフの未製品とみられる。6は、寛状石器の未製品とみられる。7は、頁岩製石核。平坦な自然面を打面に2点以上の剥片の剥離している。

図示した以外の石器は、4種以上の母岩からなるとみられる。

時期 土器から縄文時代後期前半の遺構と考えられる。

FC-2 (図V-4-8、表V-5・6・7、図版46・48)

位置 N-107

規模 130×100

確認 表土除去後確認。

特徴 III b層中に遺物が集中的に検出された。西側は風倒木痕に攪乱される。南側に大型剥片が、北側に小型剥片が特に集中していた。

遺物 土器1点、石核2点、剥片135点が出土。このうち、土器1点、石核1点を図示した。

1は単節LRを縦に施文し、やや縦の縄文を施す土器。胎土に繊維が含まれ、Ⅲ群a類とみられる。

2は頁岩製石核。図示した以外の石器は6種以上の母岩からなるとみられる。

時期 土器からは縄文時代中期前半とも考えられるが、数が少なく詳細は不明。

#### FC-3 (図V-4-9、表V-5・7、図版46・48)

位置 P-106

規模 30×22

確認 Ⅲa層掘り下げ中に確認した。

特徴 Ⅲa層中に遺物が集中的に検出された。掘り込みは確認されなかったが、出土状況から埋納(アボ)したものと考えられる。

遺物 Rフレイク9点、Uフレイク1点、石器素材6点、石核1点、剥片44点出土。剥片のうち1cm以下の碎片はみられなかった。また、全て良質な珪質頁岩製で、全て二つの母岩に分類される。ここでは、石器素材6点と接合資料1点を図示した。石器素材は同一母岩と見られ、縦長剥片素材とみられる1・2、横長剥片素材とみられる3～6がある。すべてに両面調整が見られるが、形態を整える程度のもので、刃部は形成されていない。部分的に両極打法によって剥離したとみられる面が見られる。石器素材と同一母岩のものはほかに剥片3点がみられるだけで、素材として持ち込まれた可能性が高い。7は石核1点、Rフレイク7点を含む18点が接合したものの。円礫を粗く調整して、相対する二面を作業面にする。打面は固定せず、求心状に剥離する。剥片は石器素材の大きさにおおむね似る。また、得られた剥片を石核にし、さらに剥離するものや、折って大きさを調整するものもある。接合資料と同一母岩のものはほかに34点あり、総重量848g。接合資料だけの重量は255g。これらは他の地点で剥離されたものを一括して埋納したものとみられる。

時期 時期を示す遺物がなく詳細は不明。層位から縄文時代後期の遺構とみられる。

#### FC-4 (図V-4-9、表V-5)

位置 P-103

規模 108×52

確認 Ⅲa層除去後確認。

特徴 Ⅲb層上面～下部にかけて遺物が集中的に検出された。大きな剥片が多い。南北にそれぞれ特に集中する地点がみられた。

遺物 剥片51点、礫1点出土。図示した遺物はない。剥片は3種の母岩からなる。

時期 時期を示す遺物がなく詳細は不明。層位から縄文時代後期の遺構とみられる。

#### FC-5 (図V-4-10、表V-5・7、図版46・48)

位置 N-103

規模 154×66

確認 表土除去後確認。

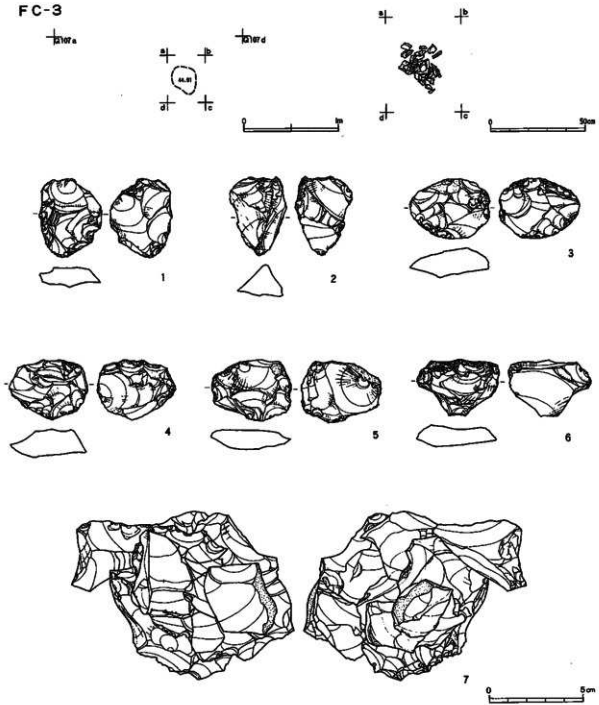
特徴 Ⅲa層上面～下部にかけて遺物が集中的に検出された。

遺物 石槍又はナイフ1点、Rフレイク1点、磨製石斧1点、石核1点、剥片267点、礫1点出土。

このうち、石槍又はナイフ1点、石核1点、磨製石斧1点を図示した。

1は頁岩製石槍又はナイフで、ポイントフレイク1点が接合した。横長剥片の腹面の側縁を調整し

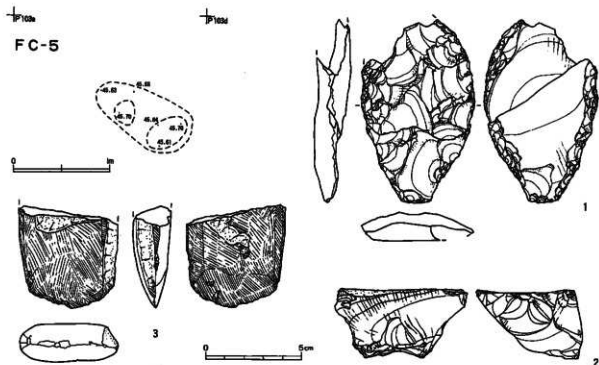




FC-4



図V-4-9 FC-3・4及び出土遺物



図V-4-10 FC-5及び出土遺物

打面を形成した後、背面側を調整している。接合したポイントフレークは背面の調整の際に反対の側縁まで大きく剥離してしまったもの。接合したポイントフレーク剥離後、本体は折損している。2は頁岩製石核。3は緑色泥岩製磨石。刃部は円刃で、左側に磨耗と剥離が見られる。

図示した以外の石器は3種以上の母岩からなる。

時期 時期を示す遺物がなく詳細は不明。層位から縄文時代後期の遺構とみられる。

## 5 包含層の遺物

### 概要

包含層からの遺物は土器・石器合わせて5328点出土した。層位別にみるとI層18点、III層687点、III a層2548点、III b層1454点、IV層194点、攪乱ほか391点出土した。

### (1) 土器・土製品

土器は、縄文時代早期、中期～後期前半のものがあるが、ほとんどが破片資料で、摩滅が激しい。早期は平底の条痕文土器、東銅路Ⅲ式、中茶路式がみられる。中期～後期前半では円筒上層式、ノダップⅡ式、余市式、大津式などがある。

### 縄文時代早期の土器

#### I群 a類 (図V-1・2-1～14、図版49)

地文に貝殻条痕文、貝殻押し文がみられるものを一括した。総数255点出土し、14(破片数63)点図示した。胎土には輝石が多い特徴が見られる。層位別ではIV層からの出土点数が最も多く、次いでIII b層が続く。分布は調査区南側に偏る。

1・2は同一個体で、口縁部を横走る幅の狭い貝殻条痕で区画し、内部を縦走る貝殻条痕で網状にする。口唇には斜位に貝殻腹縁を刺突する。胴部は貝殻押し引き文を施文する。4・5は同一個体で、口唇に貝殻腹縁の刺突がなされる。7・8は同一個体で、横位の貝殻条痕の地文に縦位と斜位の幅の狭い貝殻条痕文で菱形モチーフを描く。9は貝殻押し引き文で曲線を描く。11・12は同一個体で、尖底とみられる。表面には横位の貝殻条痕文を施し、内面も貝殻条痕で調整する。13・14は平底の底部。13は表面を横位の貝殻条痕文を施文し、内面は貝殻条痕文で調整する。14は表面と底部を貝殻押し引き文で施文。碟（長さ約70cm、幅約40cm）の傍らの窪みから出土したもので、出土状況を図V-2左及び図版46に示した。

#### I群b類（図V-3-15~24、図版49）

総数78点出土し、10（破片数24）点図示した。層位別では風倒木痕からの出土がほとんどであるが、ほかにⅢb層からの出土が目立つ。分布はN-106周辺に集中する。

15・16が同一個体で、L・R・Lの結束羽状縄文の上位に短縄文を施文する。胎土に石英が多いのが特徴。17・18は、L・R・Lの結束羽状縄文施文後、貼付帯を施す位置をヨコナデで調整し、貼付帯をあとづけている。貼付帯上には縦に縄圧痕を加える。19~24は同一個体で、口縁部は斜走する微隆起線文、その下位には横走する微隆起線文を施し、その間に結条帯圧痕文を施文する。口唇部には単節L・Rの斜縄文を施文する。胴部は単節L・R施文後、横位に微隆起線文を施す。胎土には海綿骨針を含む。15・16がb-1類、17・18がb-2類、19~24はb-3類にあたる。

#### 縄文時代中期の土器

##### Ⅲ群a類（図V-3-25~35、図版49・50）

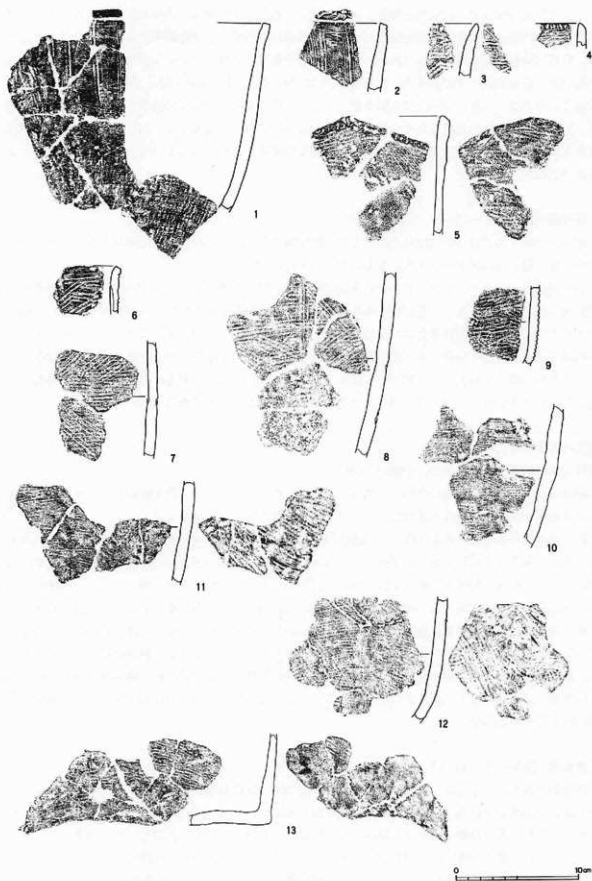
総数72点出土し、11（破片数35）点図示した。層位別ではⅢb層と風倒木痕からの出土が多く、次いでⅢa層が続く。分布は沢隅の突出部付近と調査区南西側に主に分布する。

25・26は貼付帯が見られるもの。25は波状口縁をもつもの。口縁突起部は粘土紐を渦巻状に積み上げ、孔ができるようにしている。文様はL・R・Lの結束羽状縄文施文後、貼付帯を網状に施す。口唇部にはらせん状に貼付帯を施す。27・28は口唇部に刻みが施されるもの。29・30は同一個体で、地文に単節L・Rの斜縄文施文後、横位に沈線を施す。口唇部には縄圧痕が施される。31は胴部破片で、L・R・Lの結束羽状縄文を施文する。また、内面が丁寧に磨かれている。32は波状口縁をもつもので、地文に熱糸文を施文する。口縁直下には横位に結条帯圧痕が施される。34は波状口縁をもつもので、附加条の単節L・Rの綾織り斜縄文を施文する。口唇部は溝線文が施され、突起部は右巻きの渦巻文にする。25・26はサイベリ沢式に比定されるものと考えられる。32・34は33・35も含め、見晴町式に平行するものとみなした。

##### Ⅲ群b類（図V-3-36~39、図版50）

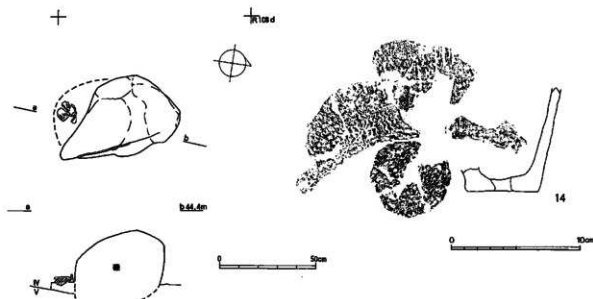
総数39点出土し、4（破片数11）点図示した。層位別ではⅢb層と風倒木痕からの出土が多く、次いでⅢa層が続く。分布は沢隅の突出部付近とN-103周辺に主に分布する。

36・37はやや厚手の胴部破片で、単節L・R、単節R・Lを交互に施文することで羽状縄文にし、その後、R・LとL・R縄文の境界に刺突を加えたもの。37では粗雑な貼付帯により横位に区画し、その後、貼付帯上も含め羽状縄文を施文する。さらに、貼付帯上に刺突を加え、貼付帯間を縦の刺突で区画している。38・39は口唇が角張ったやや薄手の口縁部で、単節L・R施文後、口縁に刺突を加える。胎土



図V-5-1 包含層出土の土器(1)





図V-5-2 包含層出土の土器(2)

には砂礫を含む。前者がノダップⅡ式、後者が煉瓦台式に比定されるものと考えられる。

#### 縄文時代後期の土器

##### Ⅳ群 a 1 類 (図V-4-40~50、図版50)

総数308点出土し、11(破片数24)点図示した。層位別ではⅢ a 層からの出土が多く、次いでⅢ b 層が続く。分布は調査区全域に及び、特に偏りはみられない。

41・42・44・45は折り返し口縁のもの。41は口縁折り返し後、単節LRと単節RLを羽状に施文する。42は口縁部に二条の貼付帯を付し、その間を無文帯とするもので、胴部に単節RLを縦位に施文後、貼付帯上に単節RLを斜位に施文。口唇にも単節RLを施文する。46・47・48は口縁部に線縄文が施されるもの。46は口縁部に二条の線縄文を付し、無文帯により口縁部と区画された胴部には単節LRを施文する。補修用の穿孔が一对みられる。47は口縁部貼付帯上に無節Rを施文し、線縄文を施したもの。貼付帯下位には線縄文によって区画された無文帯があり、その下位には無節Rの斜縄文が施文される。また、口唇にも斜縄文を施す。48は単節LR施文後、口縁部に二条の線縄文を加える。46~48は涌元式に伴うものと考えられる。

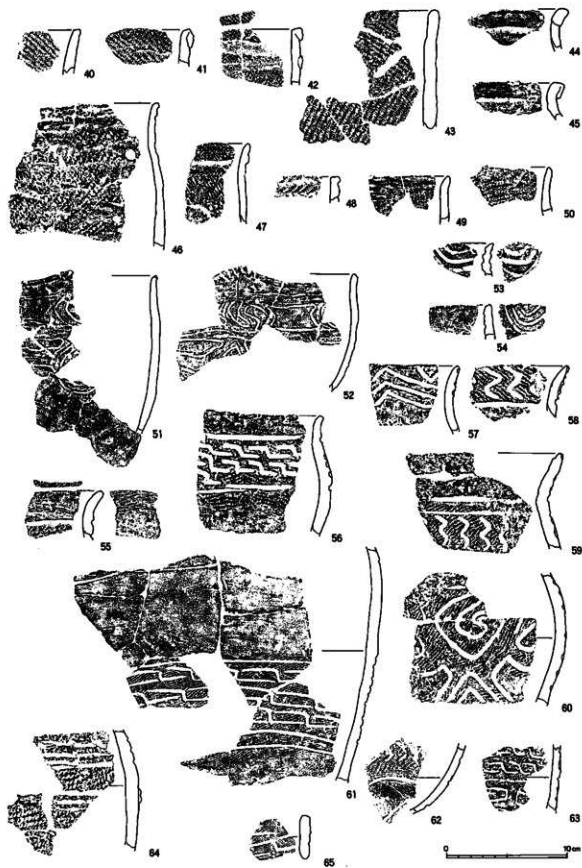
##### Ⅳ群 a 2 類 (図V-4-51~64、図版50)

総数206点出土し、14(破片数41)点図示した。層位別ではほとんどがⅢ a 層から出土。分布は、N-108、L-106、N-100、P-102、Q-104グリッドを中心に大きく5か所に集中が分かれる。

51・52は同一個体で、波状口縁のもの。波頂部には刻みを入れる。胴部上半を浅い沈線で区画し、二段にくずれた巴文を沈線で描く。胎土には海綿骨針を含む。53は小波状口縁の小突起両面に弧状線文が施されるもの。54は平縁の内面に弧状線文が施され、外面下位には横位の沈線が見られる。55は口縁の無文帯下に二条の横位沈線とその間に単節LRを横位に施文したもの。口唇と内面も単節LRで施文。57は口縁部を横位の沈線で区画し、沈線により鋸歯状文を施文したもの。56・61・63は鍵状



図V-5-3 包含層出土の土器(3)



図V-5-4 包含層出土の土器(4)及び土製品

文が施されたもの。56は口縁部が無文で、その下位はくびれ頸部をなすもの。胴部上半の張り出し部には地文に横位の単節LRを施し、二条の横位の沈線で区画した中に二段の鍵状文を施文する。61は地文に単節LRを横位に施文し、二条の沈線で区画した後、3段の鍵状文を充填する。区画外は擦り消している。63は地文に横位の単節LRを施文し、鍵状文、クランク状文<sup>7</sup>が描かれるもの。58・59・60・62は地文に横位の短鋸歯状文が施されたもの。58は口縁部破片で、沈線で区画した中に単節LRを施文し、縦位短鋸歯状文を施す。59・60は同一個体で、口縁部は無文。その下位はくびれ、頸部をなす。胴部上半の張り出し部には地文に単節LRを施し、上部に二条の横位沈線、下部に縦位短鋸歯状文、渦文、カニのハサミ状文を施文。62は上部に沈線で区画された中に単節LRを施文後、縦位短鋸歯状文が充填し、下部は縄文擦り消し後、沈線で曲線が描いたもの。

### 土製品

65はIV群a2類の土器片を磨き三角形に整えたもの。文様は地文に単節LRを施文し、鍵状文を描いたもの。

### (2) 石器

石器は、遺跡の立地する段丘堆積物に質の悪い頁岩の角礫が多く含まれることから礫が非常に多かった。また、それらを荒く剥離した剥片も多数見られた。剥片石器の石質はほとんど頁岩であるが、これら現地の頁岩が用いられることは少なく、より良質の頁岩を素材にしている。

剥片の分布傾向を見ると、住居跡が確認された周辺のL~N-100~103、沢側に突出した部分にあたるN~P-107~109に集中する状況がある。また、層別ではⅢa層からの出土が最も多く、次いでⅢb層が多い。

石器の出土量を見ると、石鏃、Rフレイク、すり石が多く、石鏃、磨製石斧、石槍、スクレイパー、筥状石器が続くが10点前後である。つまみ付きナイフ、台石、砥石、石鏃、ナイフ、石皿、楔形石器などは少ない。石器では特に石鏃、断面三角形のすり石といった早期の特徴を持つ石器が多い。また、両面調整石器は石槍素材と見られるものが多く、また剥片接合資料にも石槍製作を目的としたものが散見される。

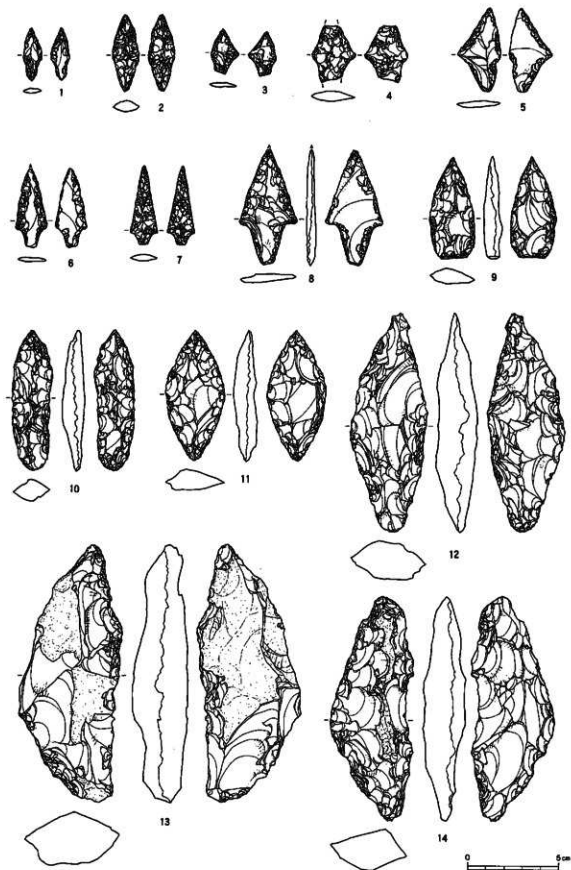
#### 石鏃 (図V-5-1~Ⅴ、図版51)

総数11点出土し、8点図示した。1が安山岩製で、2・3・4が黒曜石製。ほかは全て頁岩製。黒曜石製の石器はほかにはなく、剥片も黒曜石製は410点のうち22点と5%を占めるに過ぎない。分布は、主に調査区南西側と、沢側に突出する部分に分布する。出土層位はⅢa層に多く、Ⅲb層、Ⅳ層と数を減じる。Ⅲa出土の7については形態から後期の所産とみられる。

1・2は茎部と刃部の境界が不明瞭なもの。3~5は有茎であるが、かえしの一方が不明瞭なもの。6~8は有茎石鏃。素材は縦長剥片を用いるもの(3・5)、横長剥片を用いるもの(1・6・8)がある。調整は両面調整するもの(2・4・7)、縁辺だけを両面調整するもの(1・3・5・6)、片面を全面調整し、両面調整は縁辺に限られるもの(8)がある。なお、8は長さ、幅とも石槍と分類するべきものだが、厚さから石鏃に分類した。

#### 石槍・ナイフ (図V-5-9~14、図版51)

総数6点出土し、全て図示した。いずれも頁岩製。分布は主に沢側に突出部分に分布する。出土層



図V-5-5 包含層出土の石器(1)

位には偏りはみられない。

9～11が石槍、12～14がナイフとみられる。石槍としたものはいずれも尖った先端部をもち、全ての縁辺に細部調整を施している。9は縦長剥片を素材としたようで、基部に打面を残す。ナイフとしたものはいずれも横長剥片の両面を荒く調整したもので、部分的に片面の細部調整を行い刃部としている。

#### つまみ付きナイフ（図V-6-15～19、図版51）

総数7点出土し、5点図示した。いずれも頁岩製。分布は主に沢側の突出部分と調査区西側に分布する。出土層位には偏りはみられない。

15・16は縦長剥片の背面を調整し、右側縁に刃部を持つ。腹面側右の側面には細部調整が見られ、背面調整の打面にしている。なお、15の腹面左の側縁には磨耗痕が見られる。両者は早期の所産と見られ、いずれもⅢb層から出土している。17・18は粗雑な作りで、つまみ部が不明瞭なもの。19はつまみ部を欠損している。

#### 筥状石器（図V-6-20～25、図版51）

総数9点出土し、6点図示した。いずれも頁岩製。分布は主に調査区南側に分布する。出土層位は1点がⅣ層出土で、ほかはⅢa層、Ⅲb層出土。

23～25は横長剥片素材で、刃部に素材の鋭角な縁辺を当て、二次調整を施さない。いわゆるトランシェ様石器。早期の所産と見られるが、出土層位にはばらつきが見られる。ほかは両面を荒く調整し、一端に刃部を作出する。

#### スクレイパー（図V-7-26～30、図版52）

総数19点出土し、5点図示した。いずれも頁岩製。分布は調査区西側を除き広く分布する。出土層位はⅢa層が多い。

26・27は直線的な刃部を持つもの。両者は同一母岩。27は背面に自然面残す刃部と反対の側縁には刃潰しとみられる細部調整がなされる。28は縦長剥片を片面調整し、端部を刃部にしたもので、いわゆるエンドスクレイパー。刃部の調整は荒い。29は縦長剥片の片面を調整し、端部両側縁を刃部にした。特に左側縁には急斜度剥離により刃部としている。30は右側縁にやや急斜度の凹刃を作るノッチドスクレイパー。

#### 石錐（図V-7-31、図版52）

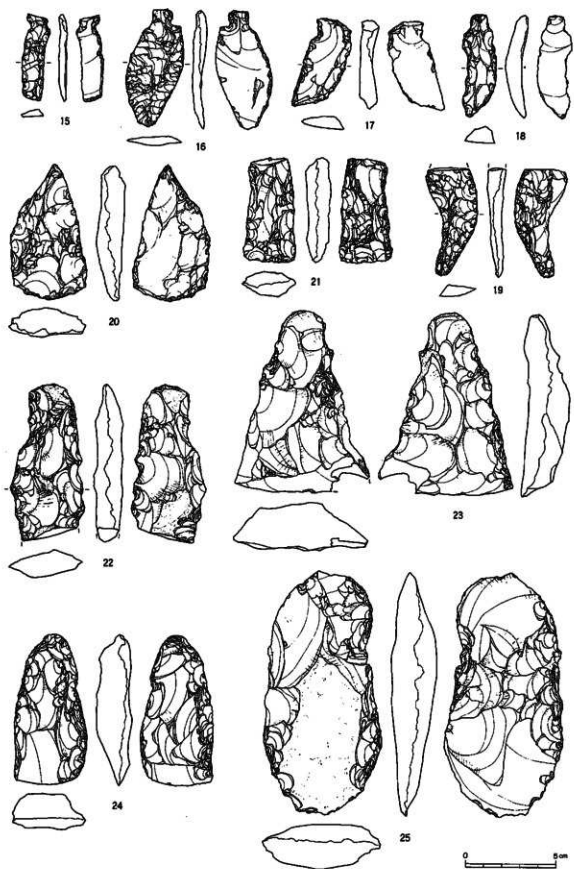
総数1点の出土。頁岩製。Ⅲ層出土。31は縦長剥片の端部側両面を細部調整し、尖った先端を作り出している。先端は折れ欠損。

#### 楔形石器（図V-7-32、図版52）

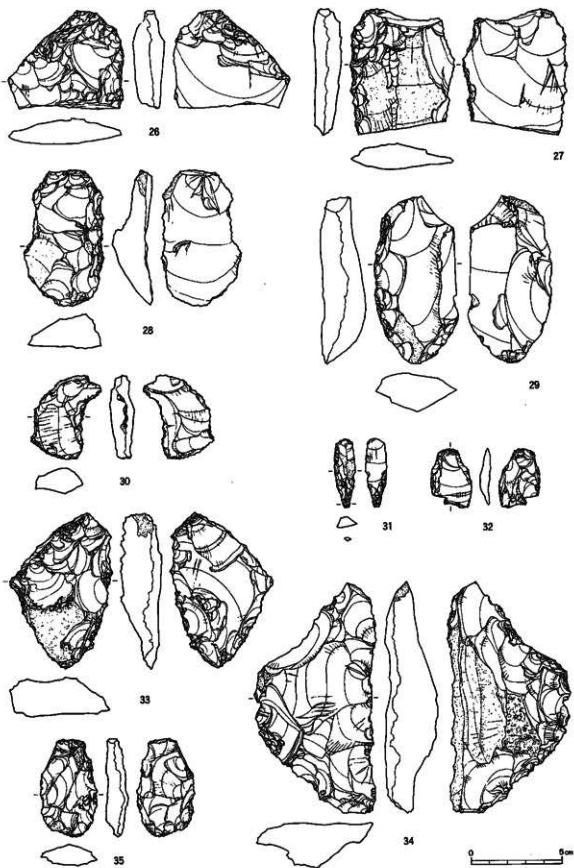
総数1点の出土。頁岩製。Ⅲa層出土。断面が紡錘形になるように両側面を調整している。使用にあたっては長軸方向に打撃を加えている。

#### 両面調整石器（図V-7・8-33～36、図版52）

総数8点出土し、4点図示した。いずれも頁岩製。分布は沢側の突出部分と調査区南側に分布する。

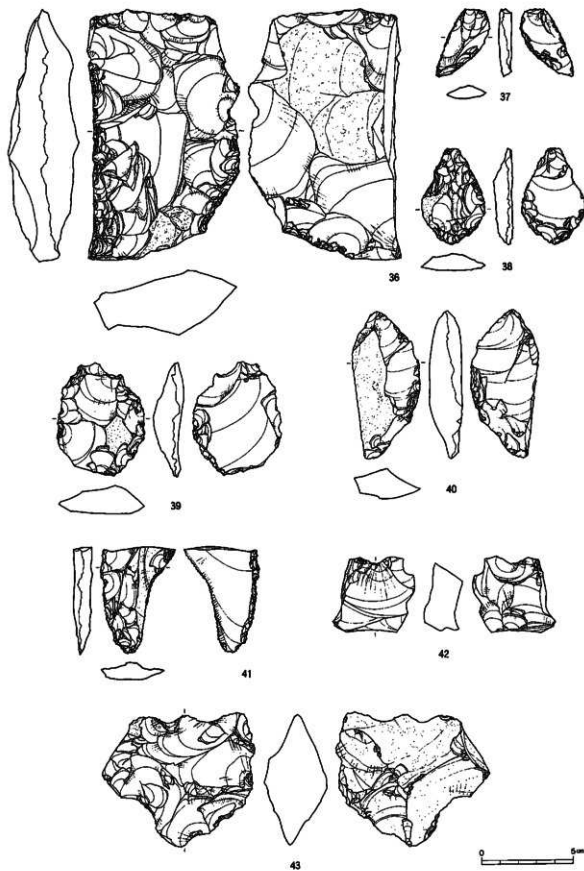


図V-5-6 包含層出土の石器(2)



図V-5-7 包含層出土の石器(3)





図V-5-8 包含層出土の石器(4)

出土層位はⅢa層が多い。

35は縦長剥片の両面を荒く調整したもの。形態から筥状石器の素材の可能性が考えられる。33は横長剥片の両面を荒く調整したもの。石槍未製品と考えられる。34は横長剥片の両面を荒く調整したものの。36は偏平な礫を両面から荒く調整したものが折れ欠損し、一方を折れ面からさらに調整したもの。

#### Rフレイク・Uフレイク (図V-8-37~41、図版52)

総数27点出土し、5点図示した。1点が安山岩製で、ほかは全て頁岩製。分布は主に沢側の突出部分に分布する。出土層位には偏りはみられない。

37は縦長剥片の両側縁に細部調整を入れたもの。38は縦長剥片の背面と、腹面の下半部を荒く調整したもの。背面側左側縁上部には細部調整がなされる。39は縦長剥片の背面を中心に荒く調整したもの。40は縦長剥片の右側縁下半部両面を荒く調整したもの。41は横長剥片の打点側の腹面側を細部調整した後、そこを打面に背面側を荒く調整したもの。端部には微細剥離が見られる。

#### 石核 (図V-8・9-42~45、図版52)

総数103点出土し、4点図示した。2点がメノウ製のほかは全て頁岩製。分布は調査区全域に広く分布する。出土層位はⅢa層が多い。

42は打面を頻繁に変えながら剥片を剥離したもの。44は原石面を打面に数枚の剥片を剥離した後、作業面は変えず打面を180度変え、数枚剥片を剥離している。後、さらに打面と作業面を入替3枚以上の剥片を剥離している。43・45は大型剥片の背面(原石面)を打面に、主剥離面側を周縁から剥離したもの。

#### 磨製石斧 (図V-9-46~51、図版53)

総数10点出土し、6点図示した。石材は緑色泥岩、片岩、蛇紋岩を用いる。分布・出土層位とも大きな偏りは見られない。

46・47はのみ形で、46は基部が欠損。表面と側面、刃部を磨き調整により形態を整える。表面は刃部を除き節理面を残す。刃部は弧状で、片凸刃。47は刃部欠損。全面を磨き調整する。48は全面を磨き調整により、形態を整える。刃部は両刃で弧状。49は両凸刃の刃部片。全面に丁寧な磨き調整がなされる。刃部は偏刃。50は全面を叩き調整後、刃部を中心に磨き調整により、形態を整える。刃部は両刃で弧状。51は礫を素材にし、刃部と基部を剥離により調整した後、全面を磨き調整している。磨き調整は粗く凹凸が残る。刃部は片刃状で、使用による潰れが残る。

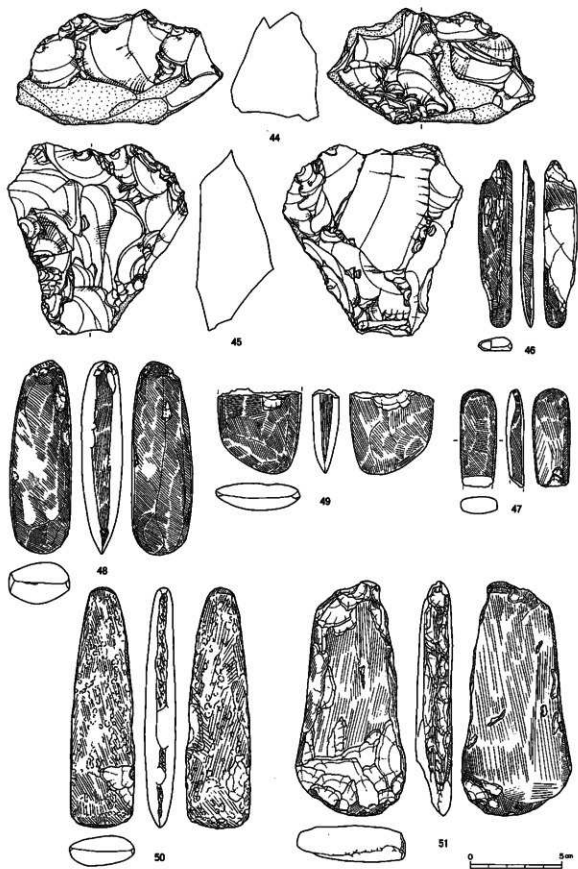
#### たたき石 (図V-10-52~54、図版54)

総数17点出土し、3点図示した。安山岩製が多い。分布は主に調査区東側に分布する。出土層位はとくに偏りはみられない。

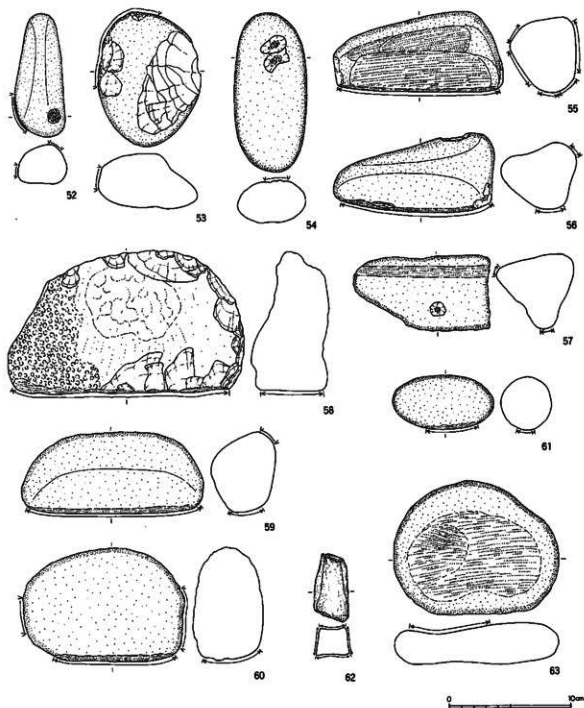
52は棒状の礫側縁の一端に敲打痕が残るもの。53は拳大の円礫の側縁に敲打痕が残る、一部は敲打により大きく剥離している。54は棒状礫の両面に敲打痕が残る。

#### すり石 (図V-10-55~61、図版54)

総数24点出土し、7点図示した。安山岩製が多い。分布は、沢側の突出部分と住居跡周辺に主に分布する。出土層位は特に偏りは見られない。

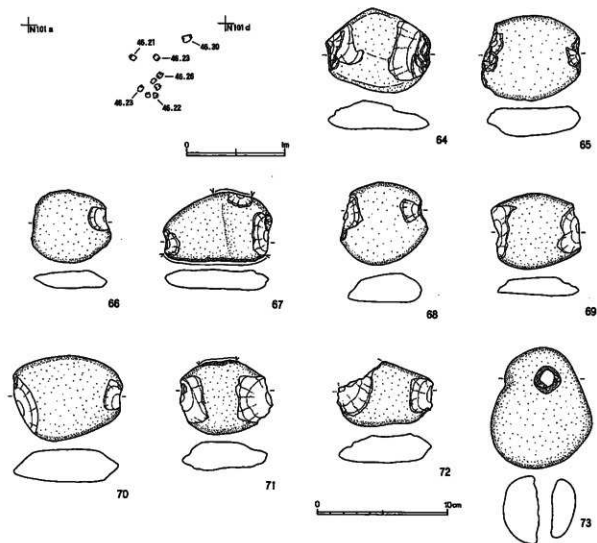


図V-5-9 包含層出土の石器(5)



図V-5-10 包含層出土の石器(6)

55-57は断面が隅丸三角形の礫の稜をするもので、早期の所産とみられる。55は稜の一つが集中的に使用され、使用面から両端を打ち欠き調整している。また、平面も使用している。56は使用面から両端及び一側縁を打ち欠き調整している。57は側面には窪みが見られ、くぼみ石としても機能したものとみられる。58は円礫を利用し、周縁を打ち欠いて作られている。使用面とみられる部分は自然面の凹凸が残る未製品とみられる。59は棒状の礫の側縁が使用されている。反対の側縁には敲打痕が残る。60は円礫を利用し、周縁を敲打により作られている。使用面とみられる部分は敲打の凹凸が残る。



図V-5-11 包含層出土の石器(7)

り未製品とみられる。61は円礫の一部を使用したもの。

#### 砥石 (図V-10-62、図版54)

総数2点出土し、1点図示した。砂岩製。位置はH-2に近い。層位は共にⅢa層。62は長軸の4面を使用するが、内一面が顕著に凹んでいる。

#### 石皿・台石 (図V-10-63、図版54)

総数6点出土し、1点を図示した。分布・層位とも特に偏りは見られない。63は扁平な円礫の一面を使用したもので、10×5cmの範囲が窪む。

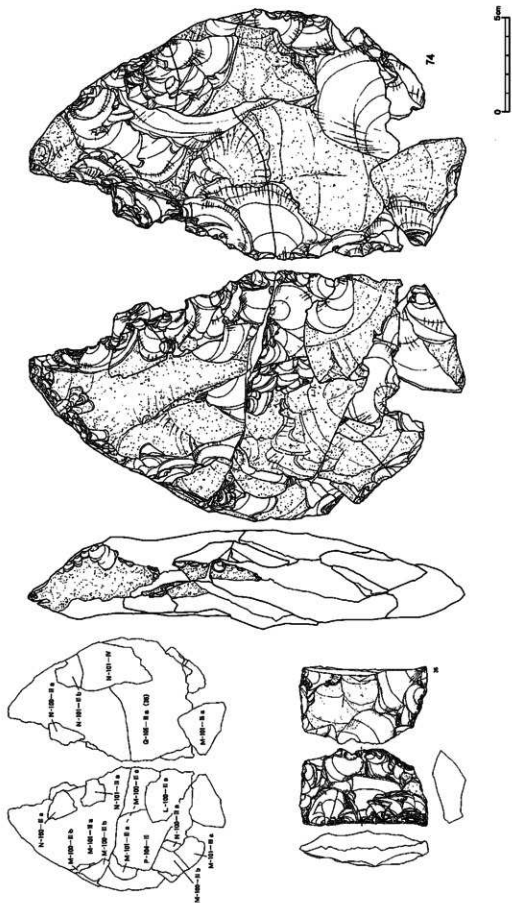
#### 石錘 (図V-11-64~73、図版54)

総数78点出土し、10点図示した。片岩1点、頁岩2点、砂岩1点以外は全て安山岩製。分布は調査区南側に偏る。出土層位はⅢb層に多い。

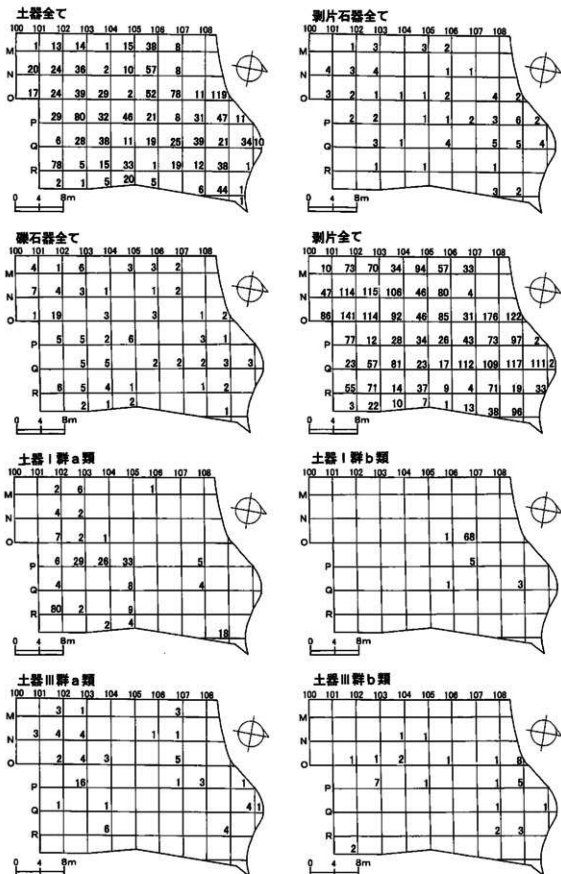
64～72はN-101グリッド出土の9点で、出土状況を図V-11左上、図版46に示した。このようにまとまって出土したのはこれら以外になく、他の石錘は単独で出土した。いずれも偏平な円礫の長軸両端を打ち欠いて抉りを作るもので、早期の所産とみられる。64は片面のみ打ち欠く。67は両側縁を叩いて調整している。71は一側縁にも打ち欠きがなされている。73は円礫に穿孔したもの。穿孔は両面からなされる。

接合資料（図V-12-74、図版53）

接合資料は主に剥片2点が同じグリッドないし隣接するグリッド間で接合するものがほとんどであった。しかし、時間的制約もあり点数までは把握していない。石核や狭義の石器に接合するものは少なく、ここでは最も良い接合状態を示した1点を図示するにとどめた。74は36の両面調整石器にRフレイク1点、剥片14点が接合したもの。偏平な頁岩の円礫を素材に、両面を粗く調整したところで半分に折損している。折損後36については再度調整するが、もう一方は放棄されている。剥離・調整は調査区南西角で行われたようであるが、36及びRフレイクは調査区中央東側で出土している。

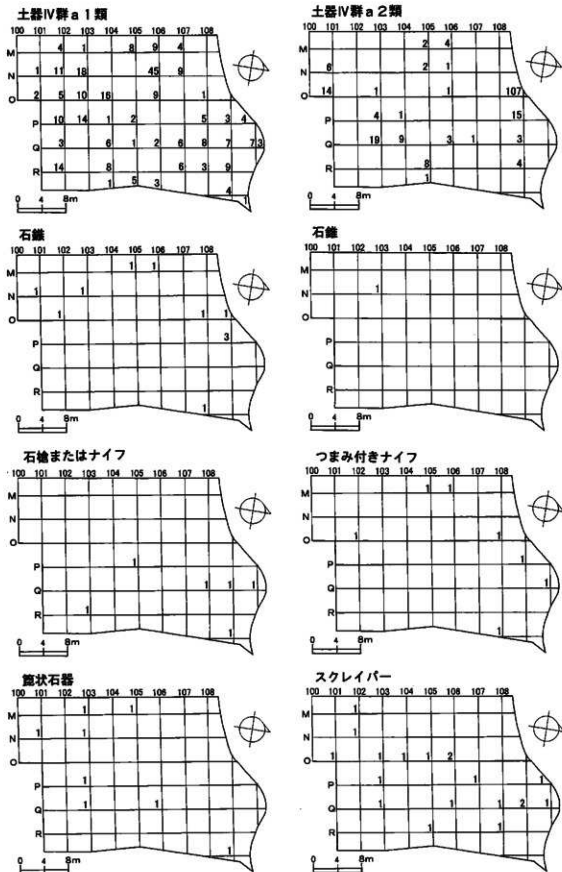


図V-5-12 包含層出土の石鏡(8)

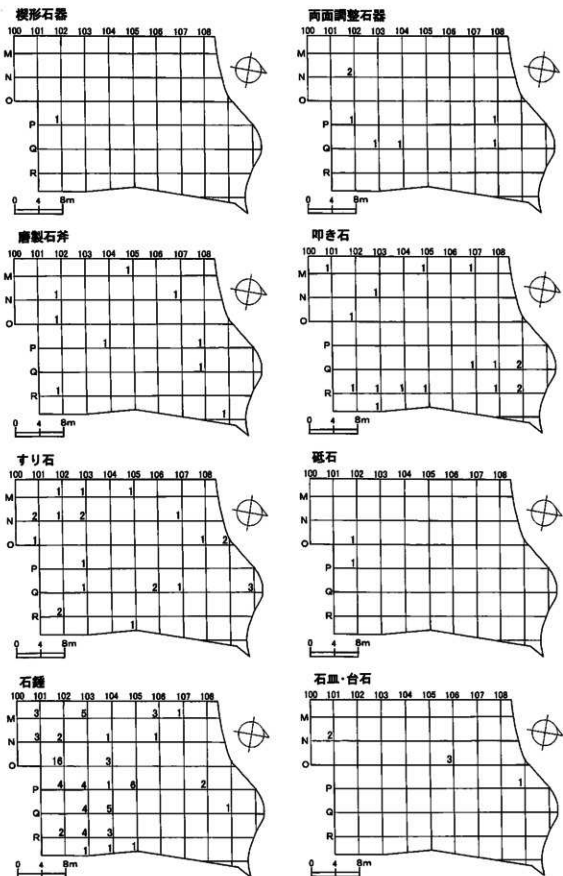


図V-5-13 包含層出土遺物の分布(1)





図V-5-14 包含層出土遺物の分布(2)



図V-5-15 包含層出土遺物の分布(3)

表V-3 遺構規模一覧(住居跡)

遺構名	確認土層	位置	規模(単位cm)			平面形	時期
			長軸(上端/下端)	短軸(上端/下端)	深さ		
H-1	IV層上面	L-100・101、M-100・101	(441)/(437)	(310)/(302)	28	楕円形	縄文中期末
H-2	IV層上面	N-0101、O-101	303/301	(303)/(300)	20	円形	縄文中期末以前

表V-4 遺構規模一覧(焼土)

遺構名	確認土層	位置	規模(単位cm)			平面形	時期
			長軸	短軸	深さ		
F-1	III b層	P-103	57	33	16	楕円形	縄文
F-2	IV層上面	N-100	58	49	6	不整形	縄文早期?

表V-5 遺構規模一覧(フレイク・チップ集中)

遺構名	確認土層	位置	規模(単位cm)		時期
			長軸	短軸	
FC-1	III a層上面	O-108・109	172	130	縄文後期前半
FC-2	III b層	N-107	130	100	縄文中期前半か?
FC-3	III a層	P-106	30	22	縄文後期か?
FC-4	III b層上面	P-103	108	52	縄文後期か?
FC-5	III a層上面	N-103	154	66	縄文後期か?

表V-6 遺構出土掲載土器一覧

遺構番号	因番号	図版番号	番号	遺物番号 および グリッド	点数	総点数	層位	分類	文様	胎土	部位	備考
H-1	V-4-1	47	1	H-1-12	1	5	床挿入	III b	単筋のR LとL Rで交互に編み文、羽状にする		口縁部～胴部上位	折り返し口縁
			—	Q-108	4		風倒木痕					
			2	H-1-13	2	10	床挿入	III b	単筋R Lの斜縄文	砂粒多い	胴部中位	
			3	H-1-14	2		床挿入					
			—	H-2覆土	6		覆土					
4		1	III b	III b	単筋L Rの斜縄文	砂粒多い	胴部中位					
5		1	III b	III b	単筋L Rの斜縄文		胴部中位					
H-2	V-4-3	47	1		3	10	H-2覆土	III b	単筋L R縦の斜縄文	砂粒多い	口縁部	角張った口縁
			2		1		H-2覆土	III b	単筋L Rの斜縄文	砂粒多い	胴部中位	
			3		1		H-2覆土	III b	単筋L Rの斜縄文		胴部中位	
			4		1		H-2覆土	III b	単筋L R縦の斜縄文	砂粒多い	胴部中位	
			5		1		H-2覆土	III b	単筋L Rの斜縄文		胴部中位	
			6		1		H-2覆土	III b	単筋L Rの斜縄文		胴部中位	
			7		1		H-2覆土	III b	無文帯上に貼付帯を付し、その上に単筋L Rの斜縄文		胴部中位	
FC-1	V-4-6	48	1		4	5	III a	IV a-1	単筋R Lの斜縄文	繊維含む	口縁部～胴部上位	折り返し口縁
			2		5		III a	IV a-1	単筋R Lの斜縄文	繊維含む	胴部中位	
FC-2			1		1	III b	III a	単筋L R縦でやや縦の縄文	小溝多い	胴部中位		

表V-7 遺構出土陶磁器一覽

遺構名	図番号	図版番号	番号	器種	層位	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
H-2	V-4-3	47	8	スクレイパー	覆土	頁岩	44.8	30.3	10.0	10.6	
			9	両面調整石器	覆土	頁岩 (47.5)	28.0	11.4	14.4		刃部折れ欠損。筒状石器か。
			10	両面調整石器	覆土	頁岩	71.9	83.0	19.7	112.8	
			11	叩き石	覆土	安山岩	64.5	48.6	16.8	72.8	
			12	石鐮	覆土	安山岩	59.3	79.5	19.9	119.4	
	V-4-4		13	台石	床面	凝灰岩	101.0	301.0	72.0	4900.0	
FC-1	V-4-6		3	両面調整石器	Ⅲ a	頁岩	110.0	44.0	19.9	91.0	石鐮未製品か。
			4	両面調整石器	Ⅲ a	頁岩 (57.0)	51.2	14.5	30.2	折れ欠損。石鐮未製品か。	
			5	両面調整石器	Ⅲ a	頁岩 (39.3)	30.5	7.5	8.2	折れ欠損。石鐮未製品か。	
FC-2			6	両面調整石器	Ⅲ a	頁岩 (57.1)	27.1	12.1	15.2	剥離欠損。	
			7	石核	Ⅲ a	頁岩	32.5	73.4	30.0	52.0	
FC-3	V-4-7	48	2	石核	Ⅲ b	頁岩	85.6	59.2	30.5	177.2	
			1	石器素材	Ⅲ a	頁岩	41.1	32.6	11.5	11.6	同一母岩
			2	石器素材	Ⅲ a	頁岩	41.4	29.0	16.5	11.0	
			3	石器素材	Ⅲ a	頁岩	31.7	42.5	14.0	14.6	
			4	石器素材	Ⅲ a	頁岩	32.2	41.2	15.2	13.2	
			5	石器素材	Ⅲ a	頁岩	32.4	41.6	11.0	12.6	
			6	石器素材	Ⅲ a	頁岩	30.3	43.0	10.4	11.6	
7	接合資料	Ⅲ a	頁岩	—	—	—	255.0	同一母岩剥片 総重量848.0。			
FC-5	V-4-8		1	石管またはナイフ	Ⅲ a	頁岩 (95.0)	58.2	16.2	61.4	2点接合。折れ欠損。	
			2	石核	Ⅲ a	頁岩	34.8	53.3	64.2	106.5	
			3	磨製石斧	Ⅲ a	緑色泥岩 (54.1)	50.3	19.0	76.0	基部折れ欠損。	

表V-8 包含層出土陶磁器・土製品一覽

遺構名	図番号	番号	グループ	点数	形状	層位	分類	文様	内面	口縁	胎土	部位	備考			
V-5-1		1	O-100	10	11	Ⅳ	1 a	口縁部と胴部中に褐色十字形網目状の模様を施す。内面は褐色の土質で厚く塗られた。胴部下部には具線形引き文。	具線形斜位に斜交	輝石多い	口縁部-胴部下位	口縁部				
														E-100	1	Ⅲ a
		2	O-104	1		Ⅲ a	1 a									
		3	N-101	1		風割中破	Ⅳ	1 a	2条単位の内縁で施文。縦帯状のモチーフがみられる。	2条単位の内縁で施文。縦帯状のモチーフがみられる。		輝石多い	口縁部			
		4	Q-101	1		Ⅲ b	1 a		縦帯具線形模文。胴めに具線形模文下	縦帯具線形模文	具線形斜交	輝石多い	口縁部			
		5	Q-101	3		Ⅲ b	1 a					輝石多い	口縁部-胴部上位			
		6	O-102	2		Ⅳ	1 a		胴部の具線形模文。4条単位の内縁を斜めに施文			輝石多い	口縁部			
		7	O-102	2		Ⅳ	1 a		胴部の具線形模文。3条単位の内縁を斜めに施文			輝石多い	胴部中位			
		8	O-102	7		Ⅳ	1 a					輝石多い	胴部中位			
		9	N-101	1		風割中破	Ⅳ	1 a	具線形引き文で胴部を施す	縦帯		輝石多い	胴部中位	完全欠		
		10	O-100	4		Ⅳ	1 a		縦帯具線形模文			輝石多い	胴部中位			
		11	Q-101	4		Ⅳ	1 a		縦帯具線形模文	具線形模文		輝石多い	胴部下位			
		12	Q-101	6	7		Ⅳ	1 a					輝石多い	胴部下位		
13	L-102	6														
V-5-2		14	R-100	11		Ⅳ	1 a	具線形引き文			輝石多い	胴部下位-底部		底面に具線形引き文		
V-5-3	40	15	O-106	1	2		Ⅲ a	L E-R Lの縦帯具線形模文の上段に具線形模文			石質多い	胴部中位	胴部中位			
																16
		17	Q-105	5		Ⅲ b	1 b-2		L E-R Lの縦帯具線形模文。胴部上部より胴部下部まで施文ありと判っている。胴部上部には縦帯具線形模文を加える。			緻密	胴部中位			



調査号	図面番号	番号	グリッド	点数	形状	方位	分類	文 様	内 容	口 数	出土	部 位	備考		
V-5-4	50	52	O-108	8	■a	北	Ⅱa Ⅱ					口縁部-胴部上段			
		53	R-104	1	■a	北	Ⅱa Ⅱ	小波状口縁に帯状縁文。	小波状口縁に帯状縁文。				口縁部	小波状口縁	
		54	M-105	1	■a	北	Ⅱa Ⅱ	口縁の縁文等下に波線	波状縁文				縁部付鉢心	口縁部	
		55	P-106	1	■a	北	Ⅱa Ⅱ	口縁の縁文等下に二条の波状縁文とその間に帯状しを縦状に施す	口縁内面を帯状しにより縁状縁文				帯状し及の波状縁文	口縁部	
		56	Q-104	1	■a	北	Ⅱa Ⅱ	口縁部は帯文。その下段はくびれ縁部をなす。胴部上半の縁り出し部には帯文と帯状の縁部上段を施す。二条の帯状の波線で区画した中に二段の縁状文を施す。					口縁部-胴部上段		
		57	M-104	1	I	北	Ⅱa Ⅱ	口縁部を帯状の波線で区画し、その上に波線により縁部上段を施す。						口縁部	
		58	N-108	2	■a	北	Ⅱa Ⅱ	口縁部を波線で区画し、帯文に縁部上段を施す。縁部付鉢心状縁文を施す。						口縁部	
		59	M-100	4	■a	北	Ⅱa Ⅱ	口縁部は帯文。その下段はくびれ縁部をなす。胴部上半の縁り出し部には帯文と帯状の縁部上段を施す。二条の波状の波線、下段に帯状縁部縁文、波文、カノノハ等と縁文を施す。						口縁部-胴部上段	
		60	M-100	2	■a	北	Ⅱa Ⅱ							胴部中位	
		61	P-102	10	■b	北	Ⅱa Ⅱ	帯文に帯状しを縦状に施す。二条の波線で区画された縁部上段を施す。区画内は縁り出し。					縁部付鉢心	胴部中位	
		62	P-105	2	■a	北	Ⅱa Ⅱ	上部は波線で区画された中に帯文に帯状しを施す。縁部付鉢心状縁文が施されている。下部は帯文が施り施され波線で、縁部が施される。					縁部付鉢心	胴部下段	
		63	P-103	1	■a	北	Ⅱa Ⅱ	縁文に帯状の帯状しを施す。波状縁文、クラック状文が施される。						胴部中位	
		64	M-105	6	■a	北	Ⅱa Ⅱ	帯文に帯状しを施す。波線と縁部付鉢心で区画する。縁部付鉢心には縁部上段を施す。						胴部中位	
		65	P-102	1	■a	北	Ⅱa Ⅱ	帯文に帯状しを施す。波状縁文を施す。							土製品

表V-9 包含層出土掲載石器一覧

調査号	図面番号	番号	グリッド	形状	部 類	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
V-5-5	51	1	L-104	■a	石鏃	安山岩	28.0	6.9	3.0	0.8	
		2	L-105	■a	石鏃	燧石	41.5	14.4	5.6	2.8	
		3	N-106	■a	石鏃	燧石	28.0	15.2	3.0	0.8	基部折れ(調査?)
		4	O-108	■b	石鏃	燧石	23.5	23.6	5.0	3.2	先端・基部折れ。
		5	N-100	■a	石鏃	燧石	45.4	23.6	4.0	3.2	
		6	M-102	■b	石鏃	燧石	43.3	16.9	2.7	1.6	先端欠損。
		7	M-102	■a	石鏃	燧石	43.0	14.6	4.0	1.6	基部折れ(調査?)。
		8	O-108	■b	石鏃	燧石	40.9	31.7	4.3	6.6	先端欠損。
		9	Q-102	■b	石鏃またはナイフ	燧石	35.4	24.8	3.6	12.3	石骨
		10	P-107	■a	石鏃またはナイフ	燧石	36.7	21.9	12.3	18.0	石骨
		11	P-109	■b	石鏃またはナイフ	燧石	30.5	32.6	11.6	24.0	石骨
		12	R-108	■a	石鏃またはナイフ	燧石	118.9	41.3	26.7	86.3	ナイフ
		13	O-104	■b	石鏃またはナイフ	燧石	141.2	58.8	28.4	103.4	ナイフ
		14	P-108	■a	石鏃またはナイフ	燧石	123.4	43.5	21.4	93.7	ナイフ
		V-5-6	52	15	L-105	■a	つまみ付きナイフ	燧石	47.4	12.5	3.9
16	P-109			■b	つまみ付きナイフ	燧石	64.2	30.7	6.7	11.0	早期のもの
17	L-104			■a	つまみ付きナイフ	燧石	48.0	23.7	9.5	11.4	
18	N-107			■a	つまみ付きナイフ	燧石	56.0	17.8	8.8	9.0	
19	O-108			■b	つまみ付きナイフ	燧石	53.5	27.4	8.8	11.5	つまみ部折れ欠損。
20	R-108			■b	磨石	燧石	73.8	41.2	14.2	39.4	
21	L-104			■a	磨石	燧石	536.9	26.7	13.1	23.7	基部折れ欠損。
22	M-102			■a	磨石	燧石	536.9	40.5	25.3	45.6	基部折れ欠損。
23	M-100			■a	磨石	燧石	96.8	73.4	21.3	118.2	トランシェ磨石
24	L-102			■a	磨石	燧石	82.7	40.6	16.3	60.8	トランシェ磨石
25	S-106			■a	磨石	燧石	122.4	64.6	25.1	172.8	トランシェ磨石
26	R-105			■a	スタレイル	燧石	153.4	62.9	15.9	49.0	素材層剥離折れ欠損。
27	N-105			■a	スタレイル	燧石	168.0	56.3	15.3	37.6	ナイフスタレイル。素材層剥離折れ欠損。
28	R-104			■a	スタレイル	燧石	73.2	43.0	18.7	49.7	エンドスタレイル
29	M-101			■a	スタレイル	燧石	92.0	45.9	19.5	86.4	新刃のエンドスタレイル
30	R-105	■b	スタレイル	燧石	45.7	28.6	12.9	17.9	ノックスタレイル		
31	M-102	■a	石鏃	燧石	37.1	11.6	5.2	2.2	先端折れ欠損。		

調査号	遺物	グリッド	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備	考	
V-5-7		32	O-101	Ⅱa	燧石器	チャート	33.4	22.4	6.3	4.4		
		33	F-103	Ⅱb	両面調整石器	頁岩	64.8	66.7	20.6	67.9		石器未製品か。
		34	M-105	Ⅱa	両面調整石器	頁岩	128.3	64.6	28.0	174.7		石器未製品か。
		35	O-107	Ⅱa	両面調整石器	頁岩	33.0	30.9	11.1	17.2		片状の石器材料か。
V-5-8	53	36	Q-105	Ⅱa	両面調整石器	頁岩	135.0	78.6	27.5	302.0		石器未製品か。
		37	M-107	Ⅱb	エフレイク	頁岩	35.9	30.0	6.9	5.0		
		38	F-107	Ⅱa	エフレイク	頁岩	51.4	33.9	10.0	14.2		石器材料か。
		39	O-106	Ⅱa	エフレイク	頁岩	61.9	47.7	14.6	37.4		石器材料か。
		40	F-106	Ⅱb	エフレイク	頁岩	79.0	36.7	17.4	47.8		石器材料か。
		41	N-108	Ⅲ	エフレイク	頁岩	(98.4)	39.6	9.5	16.6		石器未製品か。
		42	N-107	Ⅱb	芯頭	頁岩	40.2	39.3	19.1	24.1		
		43	Q-104	Ⅱa	芯頭	頁岩	8.9	71.1	33.0	136.8		
V-5-9	53	44	R-106	風刺木炭	石灰	頁岩	114.0	59.7	52.1	385.4		
		45	L-104	Ⅱb	石灰	頁岩	103.8	98.6	42.0	361.0		
		46	N-101	Ⅱa	磨製石斧	片岩	(90.0)	17.9	6.3	17.5		基部破れ欠損。のみ部。
		47	Q-101	Ⅱb	磨製石斧	片岩	52.1	19.8	9.7	18.4		基部破れ欠損。のみ部。
		48	表鏡	磨製石斧	緑色花崗	104.5	32.5	22.1	125.8			
		49	M-106	Ⅱb	磨製石斧	緑花崗	(45.0)	44.9	14.1	37.2		基部破れ欠損。
		50	L-104	Ⅱa	磨製石斧	片岩	129.7	34.2	15.8	161.2		
		51	O-107	Ⅱb	磨製石斧	片岩	136.5	59.2	18.6	215.8		
V-5-10	54	52	F-107	Ⅱb	たたき石	安山岩	100.0	40.2	35.7	211.0		
		53	Q-108	Ⅱa	たたき石	安山岩	106.5	84.0	45.0	532.4		
		54	F-108	Ⅱa	たたき石	安山岩	129.0	69.0	35.3	367.6		
		55	L-104	Ⅱb	すり石	安山岩	130.0	86.0	67.3	798.0		基部三角形のすり石
		56	L-102	Ⅲ	すり石	安山岩	131.0	83.9	61.2	698.0		基部三角形のすり石
		57	F-102	Ⅱb	すり石	砂岩	(112.0)	81.0	56.5	397.6		基部三角形のすり石。(はら石を含む)
		58	M-101	Ⅱb	すり石	砂岩	152.5	102.5	67.9	1,770.0		使用時に凹凸が残り、基部小。
		59	F-109	Ⅱb	すり石	安山岩	143.0	66.0	51.4	626.0		すり面の凹凸が残り、基部小。
		60	M-106	Ⅱa	すり石	安山岩	132.0	91.5	56.5	612.0		使用時に凹凸が残る。基部小。
		61	Q-101	Ⅱa	すり石	安山岩	82.0	44.0	43.9	253.4		
V-5-11	54	62	O-101	Ⅱa	燧石	砂岩	(87.3)	28.0	23.5	45.6		
		63	O-108	Ⅱa	燧石	安山岩	130.6	108.0	33.9	726.0		
		64	N-103	Ⅱb	燧石	頁岩	78.0	64.0	26.9	115.0		燧石軸。
		65	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	74.0	64.0	22.2	116.6		燧石軸。
		66	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	61.0	35.0	14.8	54.3		燧石軸。
		67	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	83.0	52.5	18.1	108.0		燧石軸。
		68	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	66.0	62.5	22.4	114.4		燧石軸。
		69	N-101	Ⅱb	燧石	砂岩	66.0	37.5	14.2	65.0		燧石軸。
		70	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	84.0	64.5	24.8	165.8		燧石軸。
		71	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	70.0	56.0	22.1	104.3		燧石軸。
V-5-12	53	72	N-101	Ⅱb	燧石	安山岩	73.0	49.0	21.8	86.2		燧石軸。
		73	表鏡	燧石	安山岩	82.0	77.9	64.2	436.6		円頭に穿孔したもの。穿孔は両面からなされる。	
		M-101	Ⅱa	両面調整石器								
		L-100	Ⅱa									
		M-100	Ⅱa									
		M-100	Ⅱb									
		M-100	Ⅱb									
		M-101	Ⅱa									
		M-101	Ⅱa	洞内	頁岩	-	-	-	1,130.0		基部及びエフレイク1点、両面調整石器1点、鏡片1枚の群。ここには36が記入していない。	
		N-100	Ⅱa									
N-100	Ⅱa											
N-101	Ⅱa											
N-101	Ⅱb											
N-101	Ⅲ											
F-104	Ⅲ	エフレイク										

## VI 調査の成果と課題

### 1 ボンシラリカ1遺跡について

遺跡を調査した結果、注目すべきと判断した事柄を6点あげてまとめとする。

●中茶路式の土坑墓：中茶路式が覆土上部からまともに出て出土した土坑P-2を検出した。出土した土器は胴部下部分のみで、さらに一部が直線的に打ち欠かかれている。隣接するP-1も規模、覆土、構築面ともに類似しており、2基とも遺構が調査区外に広がっているため、明言はできないが、同種類の土坑墓である可能性がある。このようにコッタロ・中茶路式の半完形品を伴う土坑の類例が数例あり、1998年の余市町登町11遺跡の報告に詳しい（藤原 1998）。当遺跡と類似する形状のものとしては紋別市柳沢遺跡、苫小牧市美沢2遺跡がある。同じ調査区から複数の、当期の土器の出土を伴う土坑を検出した遺跡として静川5遺跡がある。しかし、土器の出土状況について他遺跡の例では、より床面に近くからの出土で、口縁部を含む胴部である場合が多く、違いがある。

今回の調査で、検出した遺構については規模と覆土から墓であるという見解を出した。

●縄文時代早期前半、I群a類土器：連続して施される貝殻腹線圧痕について、縦位のものと同横位のもの2種類がある。縦位のものについて、中野B遺跡（1996 当センター）で分離された、根崎式の範疇にはいる可能性もの（6、7）もあると考えるが、I群a類土器に絡条体圧痕を持つ個体がなく、そもそもI群a類土器の出土点数自体が多くないため、より包括的な傾向を捉える意味で、住吉町式の名称を用いた。本遺跡出土の、貝殻腹線文押し引き等（1、3、5）を充填する、菱形のモチーフの類例として縦位の貝殻連続刺突を充填する静内町駒場7遺跡のものがある。2が平底になった様な無文地に沈線を施した土器も駒場7遺跡から出土している。物見台式の可能性を持つものは小破片1つ（4）のみで、鳴川式を思わせる破片はなかった。出土した土器群は住吉町式の範疇で、より新しい一群を思わせる。平底のものについては、陸帯を持つもの、絡条体圧痕を持つものはなく、アルトリ式を思わせる要素を持つ破片はなかった。平底の個体については、芦別市滝里4遺跡、奥尻町青苗E遺跡のように沈線が連続して施されるもので、虎杖浜3遺跡A地点出土と同じ瓶形状の土器（17）、虎杖浜1遺跡の遺物に似たいびつな4単位の土器（16）、の出土があった。ムシリI式にある様な、丸底味を帯びた平底形態（12）のものがあるなど、器形的にも本遺跡出土のI群a類は、尖底から、平底への過渡期の一環と捉える事とした。住吉町式のうち比較的新しい一群とその直後の土器群、又は領塚正浩氏が提唱した虎杖浜式（1997、1998 領塚）の範疇にその直前を加えた土器群の出土と解釈した。

●縄文時代早期後半I群b1類、東銅路Ⅱ式土器：近年、長万部町富野3遺跡やオバルベツ2遺跡においてセンター分類、I群b1類のうちでも東銅路Ⅱ式の出土が目立っている。そのため当調査区においても破片資料について、見直しを行ったが、むしろ典型的な東銅路Ⅲ式の遺跡であることが明らかとなった。I群a類と比較して、大、中型の器形が多く平坦面をしっかりと作り出す口唇部。全体に地紋を施したのち、底部きわ、胴部中央、口縁部から口唇部にかけてナデつけて擦り消しそこへ圧痕文を施す。板積みとも言える輪積みで器を成形し、化粧粘土のように水分をよく含んだ粘土を継ぎ目に薄く塗りつけ、指頭でナデつける調整が見受けられる。このような器形の大きさ、成形方法、施文方法を持つ土器として、東北地方北部の土器型式である早稲田V類があり、早期の同じ時期である。表館遺跡をはじめとして資料を実見したが、化粧粘土のように新たな水分をよく含んだ粘土を継ぎ目



に薄く塗りつけ、指頭で撫でつける調整は、東銅路Ⅲ式より顕著である。

●縄文時代中期前半Ⅲ群 a 類土器：平成12年度の通常発掘調査の調査区内で5個体の復元（58～62）と、1個体の残存率の高い個体（69）が出土した。いずれも円筒上層 c 式から d 式の前半と言える範囲の個体である。しかし3個体まとまるとの出土（58～60）は明らかに共存する土器であり、同一時期の土器様相を示しているといえる。また出土状況から2点の石製品は当期のものという可能性がある。

●剥片石器：当地は頁岩の採取が容易である。石核及び両面調整石器、スクレイパーについて観察した結果、縦長剥片を取ることが容易な石材を選択する傾向が概略見られた。縦長剥片が取れない石核は大きな塊であってもそのまま放置されるように見受けられ、剥片が取りやすいものは両面調整石器になるまで使いこまれるように見受けられる。明らかに篋形のスクレイパーについては1点のみの出土であった。傾向として、縦長剥片を主とする、短冊形の剥片について、両側縁の端部を用いる傾向があり、これは両面調整のスクレイパー（24、25、35、38）に顕著である。篋型の石器の使用方法を意識した可能性がある。つまみ付きナイフについては定型的な一例があった（16、17）。縦長剥片を素材として用いる。表面は剥離が全面におよぶ。表面右側縁に連続する剥離が巡る。表面右側縁は搔器様な急角度の刃部形態である。稜線は直線的で整然とする。つまみ部分は両面からの細かい剥離を巡らせて丁寧に造る。出土状況から、縄文時代早期の遺物である可能性が高い。7か所確認した、フレイク・チップの集中についてはその出土層位から、早期よりは新しい前期または中期の可能性を考える

●ボンシラリカという土地：当遺跡が面する無名の沢河口と伝承でボンシラリカ川と呼ばれる川の河口に挟まれた海岸の土地はかつて、アイヌの居住地であり、ボンシラリカと呼ばれていた。元来、アイヌの居住地としては黒岩と、シラリカに連続していたものと考えられ、この地において伝ボンシラリカ川の側に居住地があった様子を松浦武四郎の「蝦夷日誌 黒岩之図 従右其三」という絵図が示している。時を経て明治になってからは、新たに無名の沢河口寄りに、大川地区が形成されている。ブイタウシナイ川河口切替え等、花浦地区の土地改良が進み、花浦・山崎側に人の動きが活発になったためか、大川地区は字が「山崎」に設定されていた。しかし、人間の動き（漁業組合の管轄区、小中学校の校区等）は、土地の連続性によるものか、黒岩地区との関連が深く、昭和51年に八雲町議会は条例改正により、字を「黒岩」に変更し、実態に合わせた。

（大森司）

## 2 黒岩3遺跡について

調査の成果としては、縄文時代中期末のものとみられる住居跡2軒、縄文時代後期前半とみられるフレイク・チップ集中5か所、縄文時代のものとしてみられる焼土2基が検出され、包含層からは縄文時代早期・中期・後期の遺物が出土した。各包含層の時期は出土土器からおおよそⅣ～Ⅲb層が早期、Ⅲb層が中期、Ⅲa層が後期とみられるが、風倒木痕などの攪乱が激しく厳密に分けられるものではない。また、黒岩3遺跡の調査区は、図V-1-1に示したように、想定される遺跡の範囲のはずれにあたり、調査面積もほんの一部分に過ぎない。したがって、ここで遺跡の性格を詳細に考えることはできないが、調査で判明した大まかな時期ごとのトピックスを挙げることにする。

縄文時代早期については焼土（F-2）以外の遺構は確認されなかったが、遺物量は後期に次いで多かった。特に石器についてはつまみ付きナイフ、すり石、石錘といった早期の特徴を持つ石器が多量にみられた。その内、石錘が最も多く認められた。ほとんどが単独で出土したものであったが、大き

さは長さ5~9cm、幅4~8cmで、長幅比(長さ/幅)は1~1.2と非常にまとまりが良い。石錘の石材はいずれも安山岩で、素材は遺跡に近い海岸で採集できる偏平な円礫であった。このことから素材採集の際に類似した大きさを選択していたものと考えられる。しかし重量は、約55~125gまで特に偏りはみられない。なお、包含層出土石器で図示したN-100グリッド出土石錘9点はまとまって出土したものであるが、その大きさは長さ6~8cm、幅5~6cmにおおむねおさまり、重量は65~73g、104~116g、166gと大きく3つのグループに分かれた。以上のことからすると、素材採集の際には主に大きさと選択するが、重量にはばらつきが出るため、使用にあたっては重量のばらつきを抑えるためにいくつかの重量グループを組み合わせてバランスをとっていた状況が伺われる。なお、このような状況から使用目的については、漁網用沈子が考えられる。

ところで、早期のものとみられる遺物は調査区南側に偏って分布を見た。その分布状況を見ると調査区東側の未調査地区に早期の遺構がある可能性が考えられる。

縄文時代中期については焼土(F-1)、フレイク・チップ集中(FC-2・4)のほか、中期末葉とみられる住居跡が調査区南西側に2軒かたまって検出された。住居跡はいずれも石囲炉をもち、形態は楕円形と円形。柱穴は1基が確認できたに過ぎない。また、緩やかな斜面にあたるため西側は明瞭に掘り込み、東側は余り掘り込まずに住居を構築した状況がみられた。当該時期の住居跡は卵形で、方形の石囲炉跡をもち、先端部ピットを持つものが多いという。H-1では風倒木による攪乱が周囲を取り囲むようになり、遺存状況は余り良いものではなかったが、おおむね当該時期の特徴を持つものである。石囲炉は、長方形で、住居長軸に対し直行する。北西側の石囲いの遺存状況は良く、整ったL字形を呈していたが、他の部分は礫が抜き取られたのか配列が乱れていた。また、炉跡東側では礫の傍らに土器片を差し込んでいた。先端部ピットについてはM-101杭付近で根跡と処理したピットが見られた。あるいはそれが先端部ピットであった可能性がある。柱穴については1基を確認したに過ぎない。時間的制約もあり精査が不十分であったためでもあるが、風倒木痕が複雑に絡み合い確認が困難であった。H-2についても柱穴は確認できず、掘り込みと石囲炉を検出したに過ぎないが、炉跡南西側には3点の長方形の礫を立てて三角形に組んだ組石が確認された。組み石の下にはピット上の落ち込みが見られたが根跡と判断した。これについては柱の根元を押さえた可能性があったのではないかと考えている。また、形態は円形としたが東側の壁が不明瞭で、斜面にかかっていた事から、楕円形であった可能性も否定できない。この2件の住居は遺物の接合状況から同時存在ではなく、東側が古く、西側が新しいことが確認された。

中期の土器の分布を見ると、大きく調査区南側と沢側の突出部付近の2か所に集中する状況が見られる。沢側の突出部付近は住居跡が確認された調査区南西側に比べ風倒木痕の密度がさらに濃く、遺構を確認することはできなかった。

縄文時代後期については最も遺物量が多い。この時期の遺構としてはフレイク・チップ集中(FC-1・3・5)がある。特にFC-3は詳細な時期は不明なもの、チップを含まず、石器素材、Rフレイク、Uフレイク、石核、剥片が集約的に出土したもので埋納跡と考えられる。出土状況は約30cm四方の範囲に石器が折り重なって出土したもので、深さは15cmほどであった。掘り込みは確認されなかったが、出土状況から埋納坑が存在したものと考えられる。石器石材は大きく2種あり、1種は石器素材に限られ、もう1種は接合するRフレイク、Uフレイク、石核、剥片であった。石器素材については内園3遺跡、内園6遺跡、上白滝7遺跡などで黒曜石製品が確認されていたが、ここでは全て頁岩製品であった。大きさは長さ約3~4cm、幅約1~2cm、厚さ約1~1.7cm重量約11~15gにまとまる。内園6遺跡では長さ・幅に差はなく、厚さ・重量に差が見られたことから、大きさや形状を

描えることが重要視されていた可能性が指摘されている。ところで、どの器種の素材かが問題となるが、この大きさの石器としては石鏃や石錐、石鈎が考えられている。しかし、黒岩3遺跡出土の石器素材の厚さは1~2cmであるのに対し、石鏃の厚さは0.3~0.4cmのものが多く、また石鏃の素材も薄手の剥片を用いている状況から石鏃の素材としての可能性は限りなく低い。また、石錐にしても同じような状況がある。ほかに石器素材とほぼ同じ大きさのものとしては楔形石器が挙げられる。当調査区からはチャート製のものが1点出土したに過ぎないが、石器素材にも長軸方向の階段状剥離のほか、短軸方向の粗い調整剥離を認めることができ、可能性を指摘しておく。一方、接合資料及び同一母岩の剥片は、Rフレイクを含むものの石器素材と同様の物は見られない。ただ、長さがおおむね3~4cmで、長幅比が1:1~1:1.5のものが多く、広義の石器素材であった可能性がある。ただ、同一母岩の石核も含まれており石器素材とは目的を異にしていたものと考えられる。

(福井)

## 〔引用・参考文献〕

- 石本省三 (1975) 『函館空港第4地点』  
 江坂輝弥 (1955) 『青森県下北部ムシリ遺跡』『日本考古学年報』3  
 (1957) 『ムシリⅠ式土器について』『先史考古学』5  
 (1957) 『青森県下北部東通村、尻屋、物見台遺跡調査報告』『考古学雑誌』36-4  
 遠藤香澄 (1997) 『北海道芦別市滝里4遺跡のⅠ群a類について』『野村崇先生還暦記念論集』  
 大沼忠春 (1981) 『北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について』『考古学雑誌』66-4  
 大場利夫・扇谷昌康・竹田輝男 (1962) 『白老町杖浜遺跡の発掘調査について』『北方文化研究報告』17  
 奥尻町教育委員会 (1998) 『育苗遺跡』E地区  
 (1998) 『育苗遺跡』F地区  
 長田豊作ほか編 (1975) 『花浦郷土史』  
 久保 泰ほか (1983) 『白坂』松前町教育委員会  
 小島朋夏 (1999) 『北海道式石冠の分布とその意義』『北海道考古学』35  
 堺 比呂志 (1993) 『菅江真澄と北海道』  
 鈴木克彦 (1999) 『北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年』『北海道考古学』35  
 (1999) 『北海道渡島・松山地域の後期前~中葉の編年—北海道西南部の縄文後期の編年学的研究2—』『國學院大学考古学資料館紀要』15  
 (2000) 『北海道後志・胆振地域の中期末葉から後期前葉の編年—北海道西南部の縄文後期の編年学的研究4—』『北海道考古学』36  
 高橋正勝 (1972) 『北海道における縄文時代中期の終末(1)』『北海道青年人類科学研究会誌』9  
 (1972) 『北海道における縄文時代中期の終末(2)』『北海道青年人類科学研究会誌』10  
 田中英司 (1995) 『日本先史時代のデボ』『考古学雑誌』80-2  
 富樫泰時 (1976) 『トランシェ様石器について』『東北考古学の諸問題』  
 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター (1996) 『静川5遺跡発掘調査報告書』  
 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター (1998) 『柏原27・ニナルカ・静川5・6遺跡発掘調査報告書』  
 七飯町教育委員会 (2000) 『国立療養所裏遺跡』  
 日本考古学協会1999年度銅路大会実行委員会 (1999) 『海峡と北の考古学—文化の接点を探る—』

## 資料集Ⅰ・テーマ1:旧石器から縄文へ

- 羽賀憲二ほか(1977)『S267・268遺跡』札幌市文化財調査報告書XIV  
(1977)「早期北海道平底土器様式」『縄文土器大観』1
- 函館市教育委員会(1997)『湯川貝塚』
- 橋本勝男(1984)「特殊な筒状石器についての一考察(その1)」—「段間型筒状石器」の提唱—『太  
平臺史意』第3号  
(1984)「特殊な筒状石器についての一考察(その2)」—「段間型筒状石器」再考—『太  
平臺史意』第5号
- 深川市教育委員会(1999)『内園3遺跡Ⅱ』
- 藤原秀樹ほか(1998)「登町11遺跡工事立会調査報告」『余市水産博物館研究報告』第1号
- 古原敏弘ほか(1982)「駒場7遺跡における考古学的調査」北海道静内町教育委員会  
(1985)「静内町清水丘における考古学的調査」北海道静内町教育委員会
- 北海道教育委員会(1987)『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』  
『北海道先史時代の「はじまり」と「おわり」に関する検討・討論』実行委員会編(1994)  
『北海道におけるはじまりに関する土器の諸様相』シンポジウム資料集
- 北海道埋蔵文化財センター(1991)『函館市中野A遺跡』  
(1992)『函館市中野A遺跡(Ⅱ)』  
(1996)『函館市中野B遺跡(Ⅰ)』  
(1996)『函館市中野B遺跡(Ⅱ)』  
(1985)『登別市千歳5遺跡』  
(1999)『白滝遺跡群Ⅰ 上白滝7遺跡』  
(2000)『長万部町花岡2遺跡・花岡3遺跡』  
(2000)『長万部町豊野6遺跡』  
(2000)『八雲町シラリカ2遺跡』  
(2000)『深川市内園6遺跡』
- 北海道文化財保護協会(1999)『長万部町オバルベツ2遺跡』
- 松浦武四郎(秋葉實翻刻・編)(1999)『校訂 蝦夷日誌』北海道出版企画センター
- 松前町教育委員会(1988)『寺町貝塚』
- 門別町教育委員会(1996)『ケノマイ遺跡』
- 紋別市・紋別市教育委員会(1982)『柳沢遺跡(2)』
- 八雲町教育委員会(1987)『柴浜1遺跡』  
(1980)『山崎遺跡発掘調査報告書』  
(1992)『コタン温泉遺跡』
- 領塚正浩(1996)「東北地方北部における縄文早期前半の土器編年(上)」『史観』27  
(1996)「東北地方北部における縄文早期前半の土器編年(下)」『史観』28  
(1997)「住吉町遺跡の編年的位置」『人間・遺跡・遺物3—麻生優先生退官記念論集—』  
(1998)「虎杖浜式土器とその周辺」(北海道埋蔵文化財センター研修会資料)

## 写真図版



1 遺跡遠景（南から）



2 遺跡遠景（南西から）



1 25%調査状況(北西から)



2 FC-2 検出状況



1 遺構確認調査状況 (北から)



2 遺構確認調査終了状況 (北西から)





1 Pライン以西 表土除去後状況(北東から)



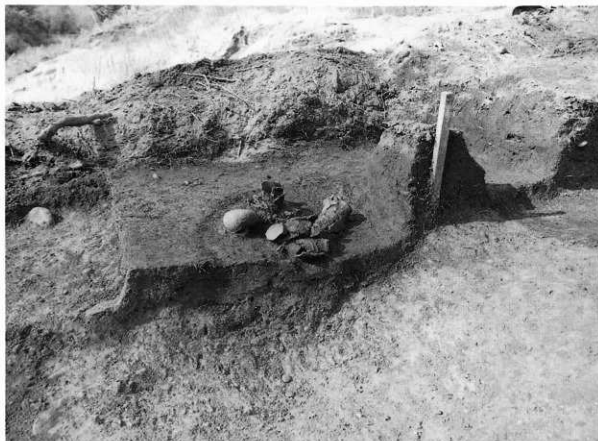
2 包含層調査状況(北東から)



1 旧河道埋没後の土層出土遺物（北東から）



2 旧河道検出状況（南西から）



1 L100グリッド遺物出土状況1(東から)



2 L100グリッド遺物出土状況2(北から)



1 P～M103ライン土層堆積状況(北から)



2 Pライン以西 包含層調査終了状況(北西から)



1 Pライン以东 表土除去後状況(北東から)



2 S～P103ライン土層堆積状況(北から)



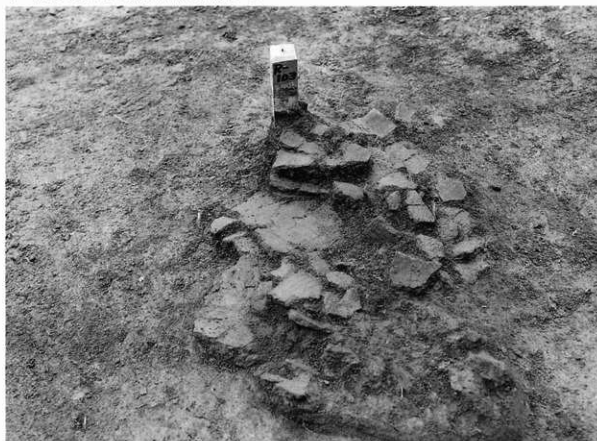
1 FC-3 検出状況およびQ103、R103Ⅲ層上面遺物検出状況（北東から）



2 Q103、R103Ⅲ層中位遺物検出状況（北東から）



1 R103Ⅲ層中位土器検出状況(北東から)



2 R103Ⅲ層下位土器検出状況(北東から)



1 FC-4 検出状況 (南から)



2 FC-5 検出状況 (南東から)



3 R109グリッド土器検出状況 (西から)





1 H-1 覆土上位遺物出土状況 (南から)



2 H-1 覆土下位遺物出土状況 (北から)



1 H-1完掘状況(南東から)



2 H-1土層断面(西から)



1 H-2 遺物出土状況 (西から)



2 H-2 土層断面 (西から)



3 H-2 完掘状況 (南西から)



1 FC-6 検出状況 (東から)



2 P-1 土層堆積状況および完掘 (北から)



1 P-2 遺物出土状況 (北西から)



2 P-2 土層堆積状況 (西から)



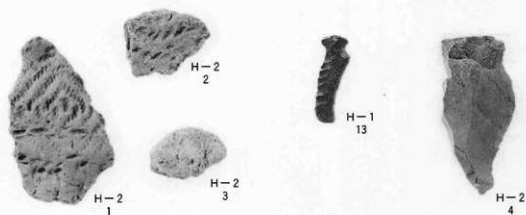
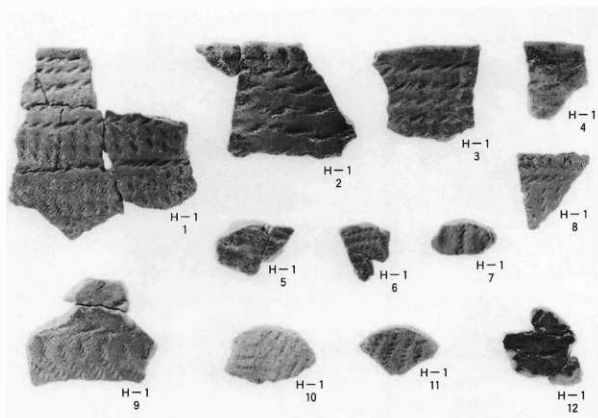
3 P-2 完掘状況 (北西から)



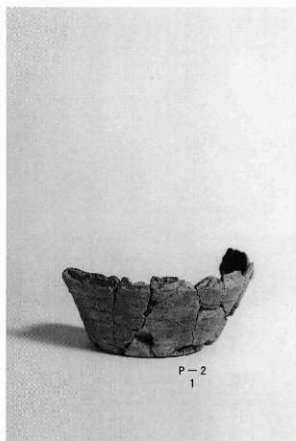
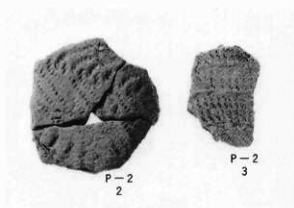
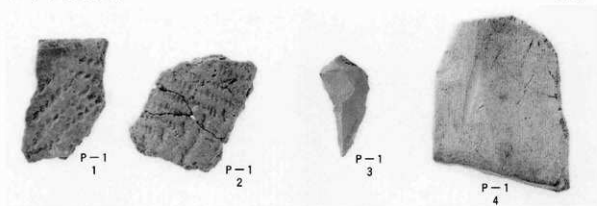
1 Pライン以東作業状況(北西から)



2 遺跡遠景と無名の沢(南西から)

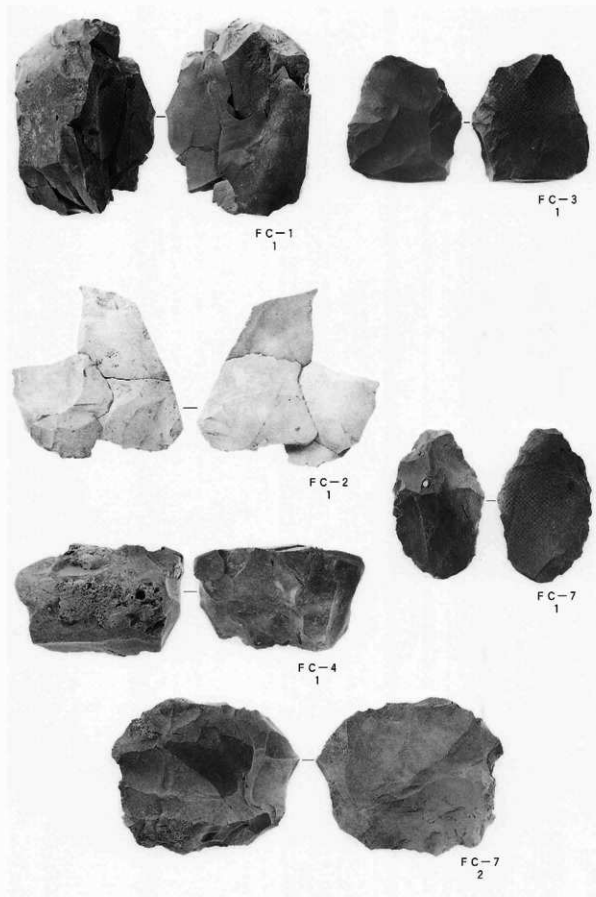


遺構出土遺物(1)



遺構出土遺物(2)

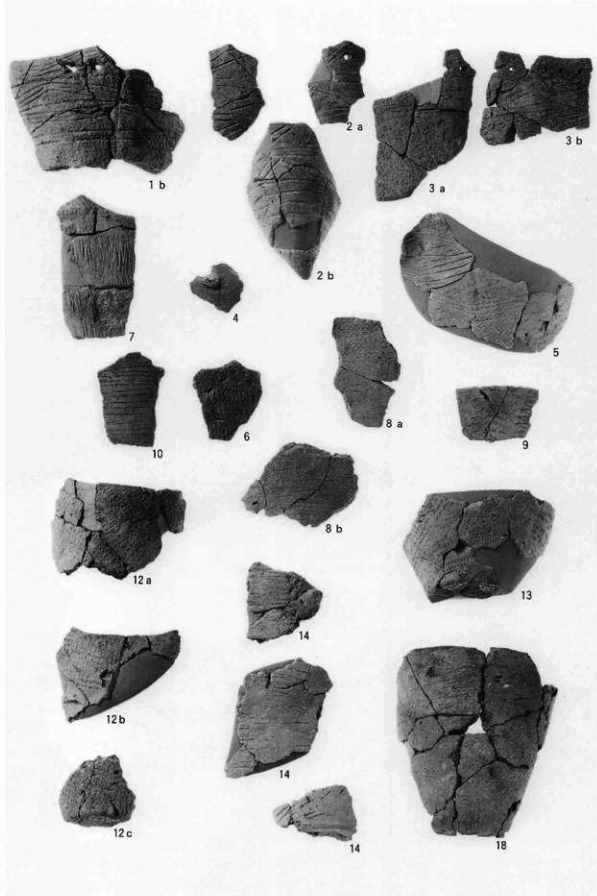




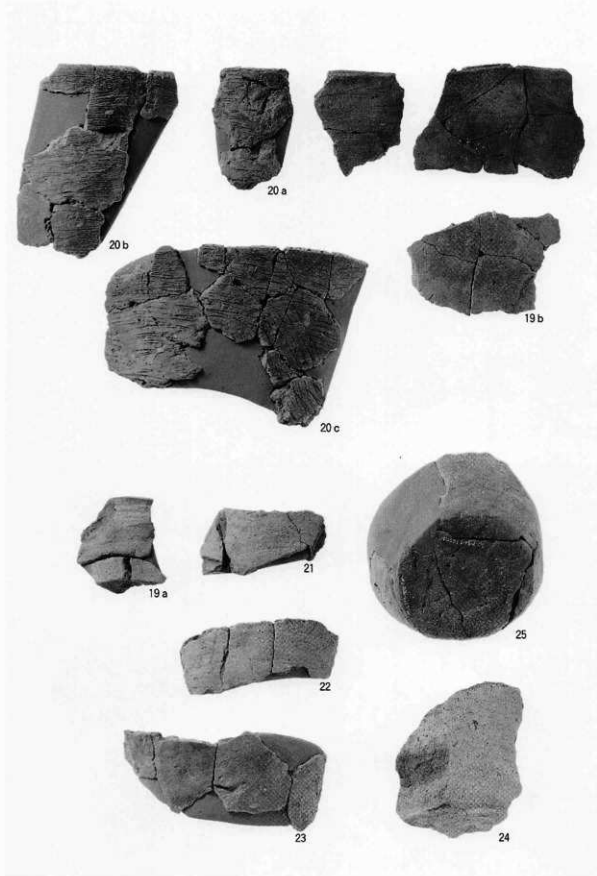
遺構出土遺物(3)



包含層出土土器(1)



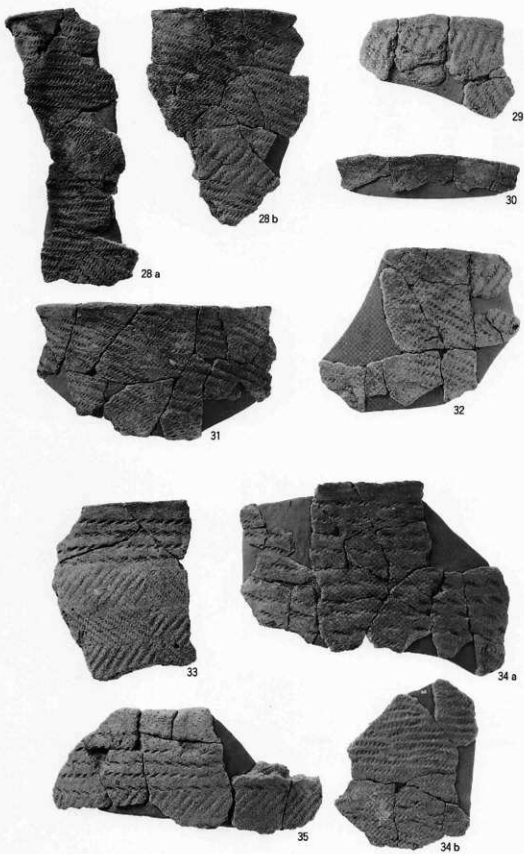
包含層出土土器(2)



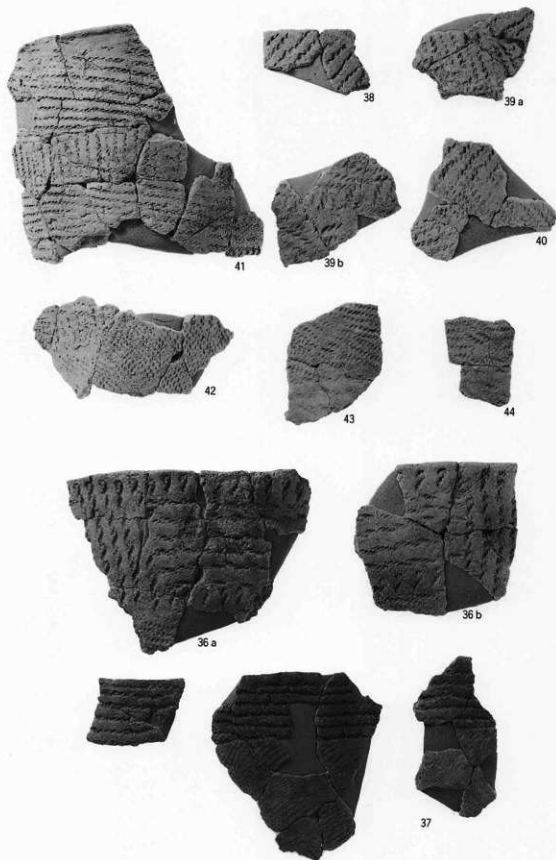
包含層出土土器(3)



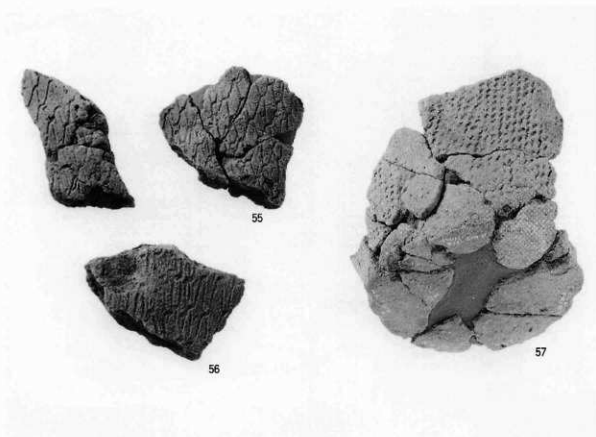
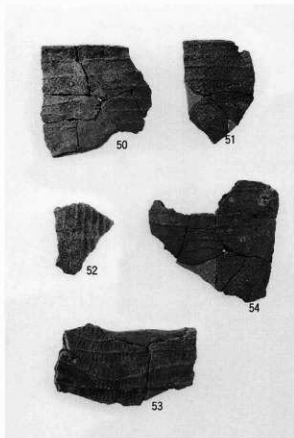
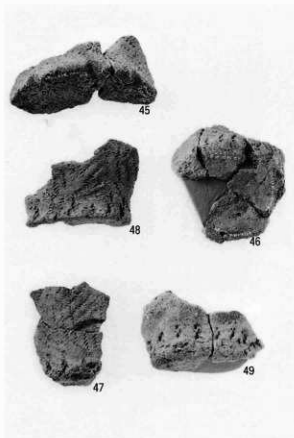
包含層出土土器(4)



包含層出土土器(5)



包含層出土土器(6)

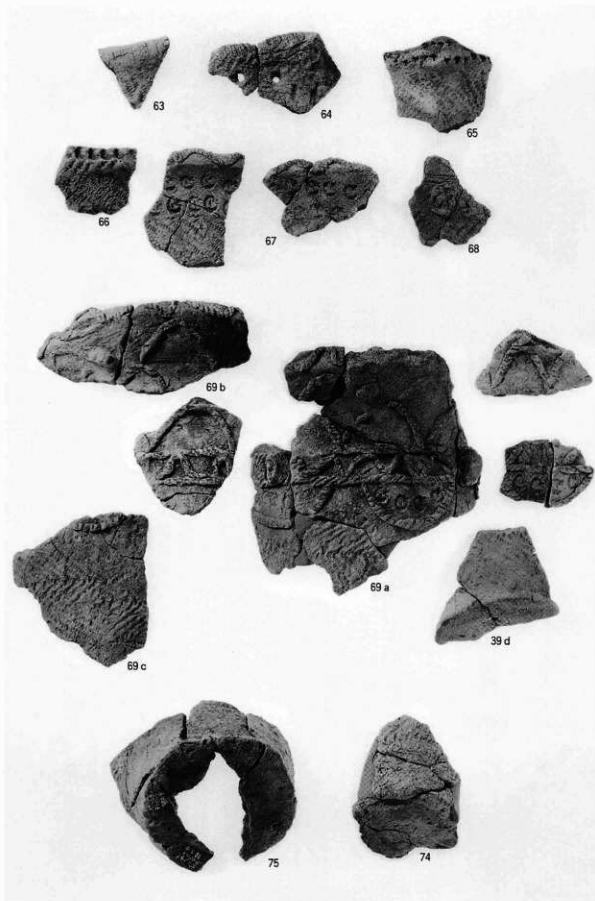


包含層出土土器(7)

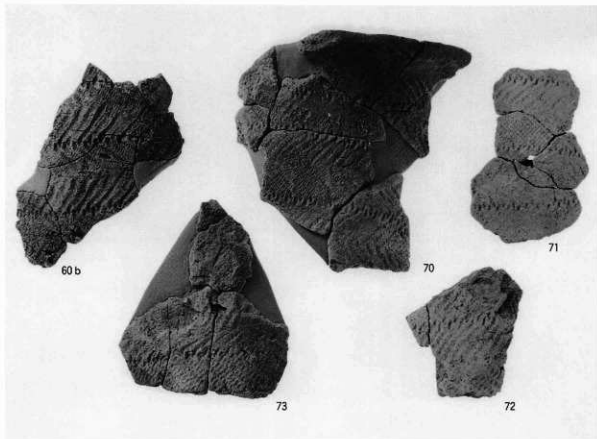




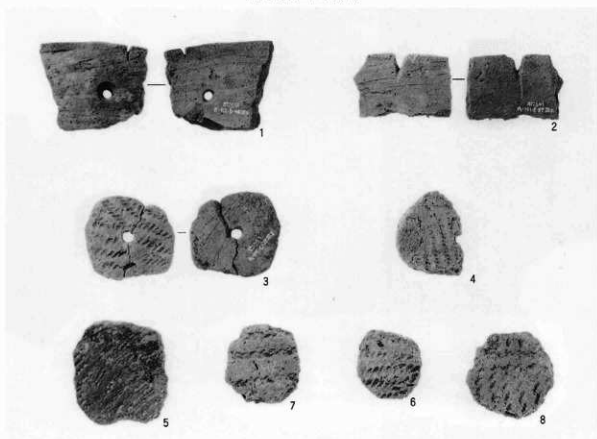
包含層出土土器(8)



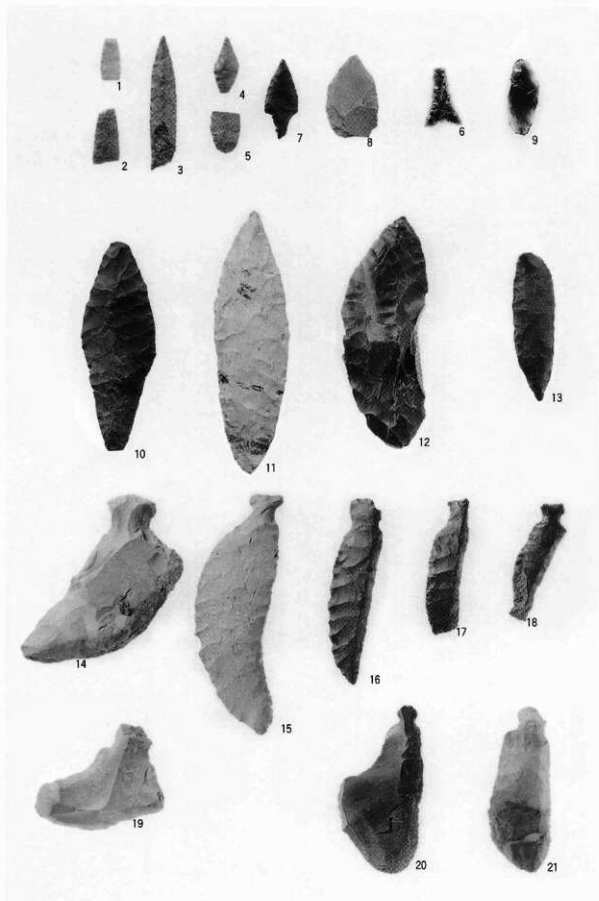
包含層出土土器(9)



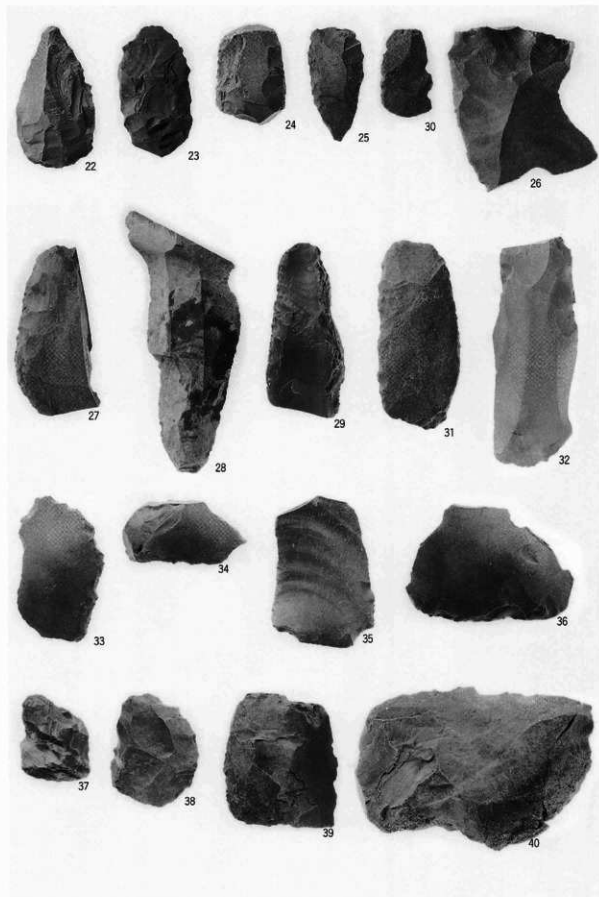
包含層出土土器(10)



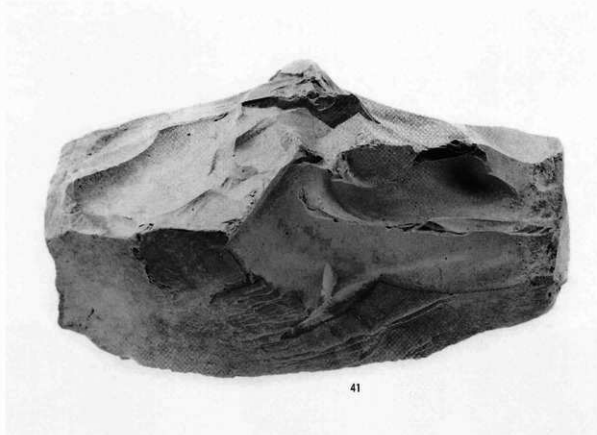
包含層出土再生土製品



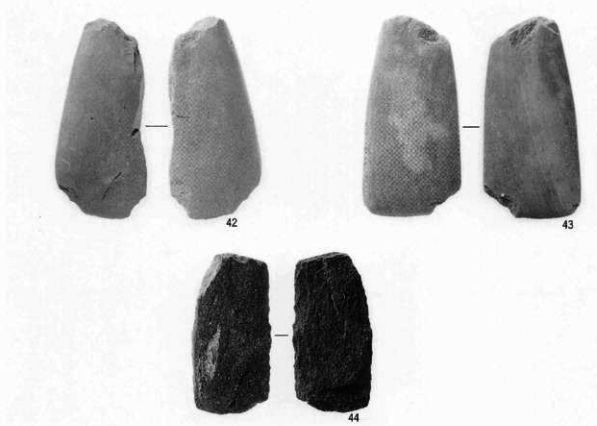
包含層出土石器(1)



包含層出土石器(2)



41

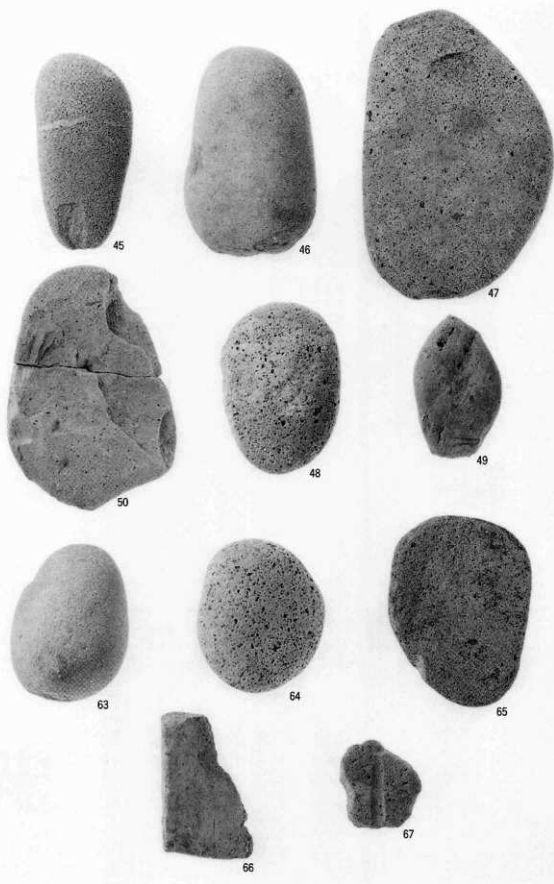


42

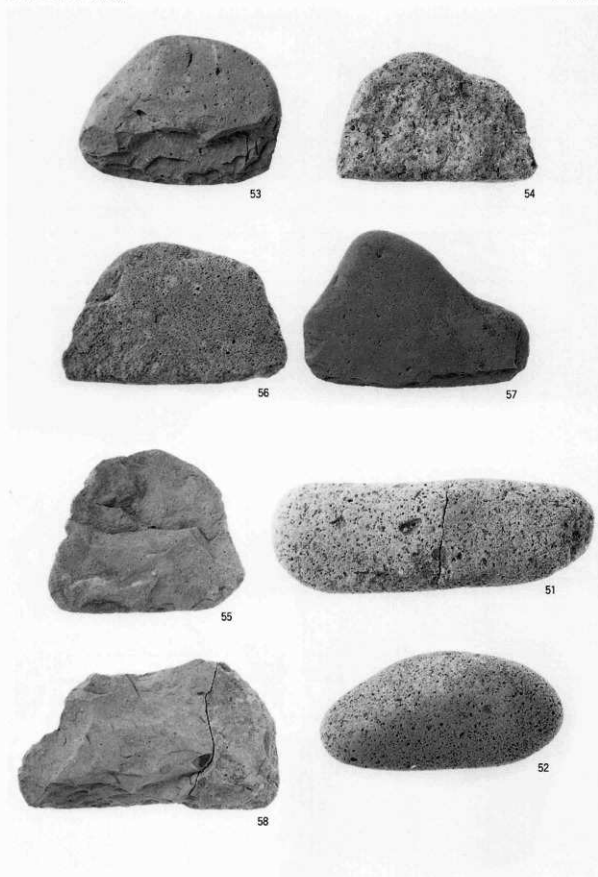
43

44

包含層出土石器(3)

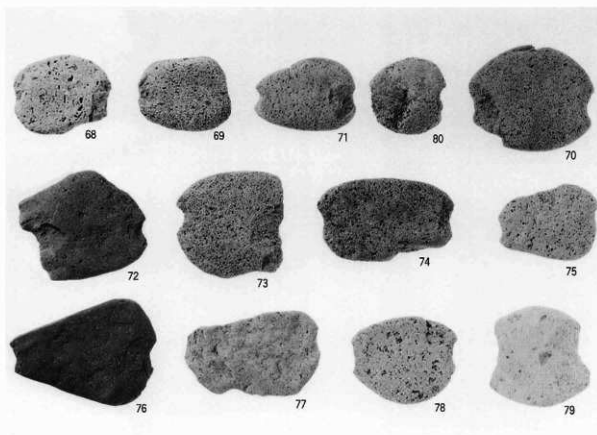
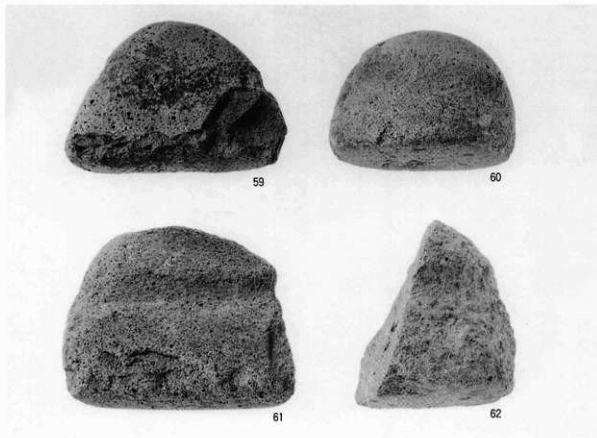


包含層出土石器(4)

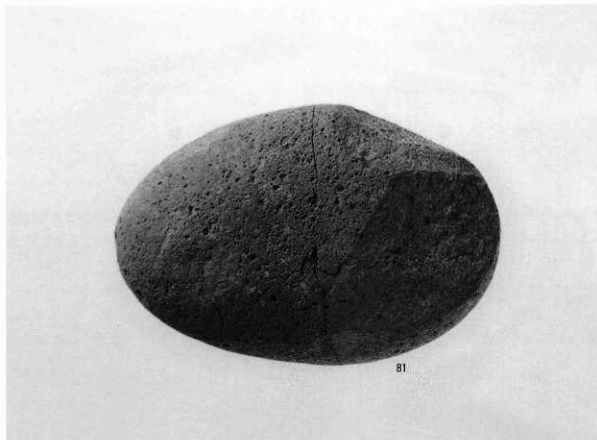


包含層出土石器(5)

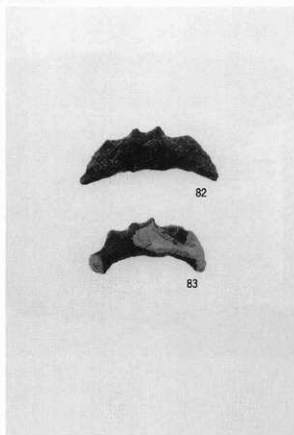




包含層出土石器(6)



包含層出土石器(7)



包含層出土石製品



黒岩3遺跡周辺の空中写真

(この写真は昭和22年9月撮影の空中写真を複製したものである)



1 遺跡遠景（北西から）



2 遺跡近景（北から）



1 調査状況 (西から)



2 調査状況 (南西から)



1 遺物出土状況（南から）



2 調査区完掘状況（南から）



1 メインセクション (Mライン) (東から)



2 メインセクション (105ライン) (南東から)



3 Mラインセクションアップ (東から)



4 105ラインセクションアップ (南から)



1 H-1 完掘状況 (南西から)



2 H-1 検出状況 (西から)



3 H-1 覆土上面焼土検出状況 (西から)



4 H-1 土層断面 (東から)





1 H-1 炉跡完掘状況 (東から)



2 H-1 炉跡検出状況 (北東から)



1 H-2 完掘状況 (南東から)



2 H-2 土層断面 (東から)



3 H-2 炉跡完掘状況 (東から)



1 F-1 検出状況 (南から)



2 F-2 土層断面 (南西から)



3 FC-1 検出状況 (北東から)



4 FC-2 検出状況 (北から)



5 FC-3 検出状況 (東から)



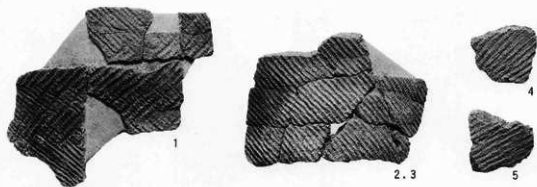
6 FC-5 検出状況 (西から)



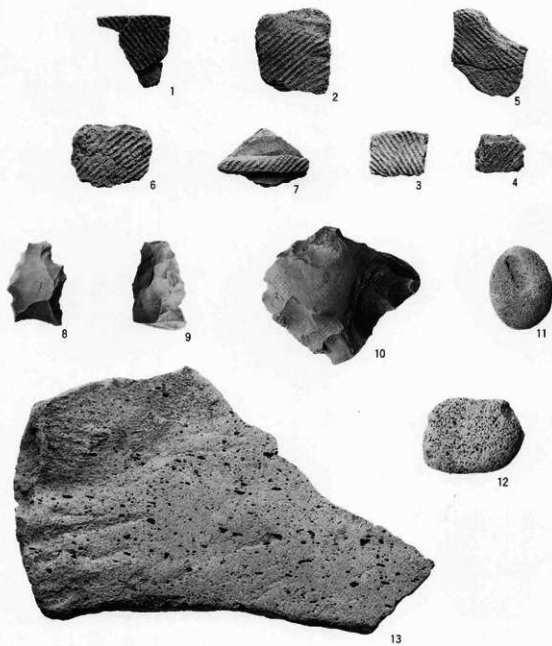
7 R-108 土器出土状況 (南東から)



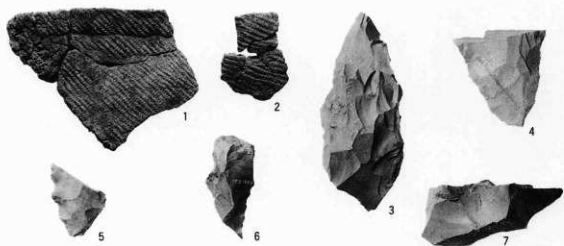
8 N-101 石錘集中出土状況 (南西から)



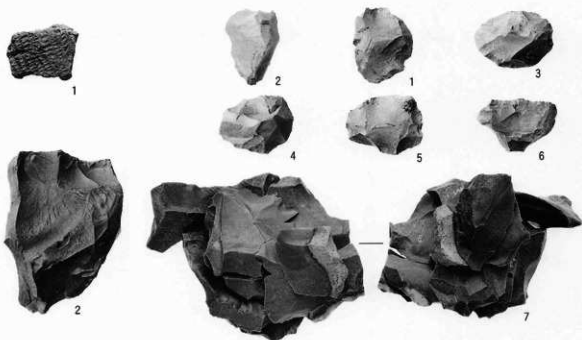
1 H-1の遺物



2 H-2の遺物

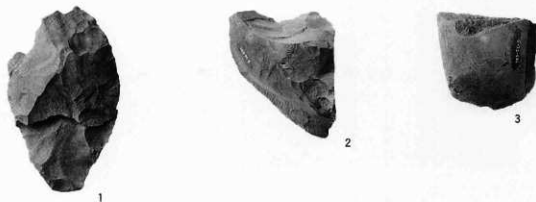


1 FC-1の遺物

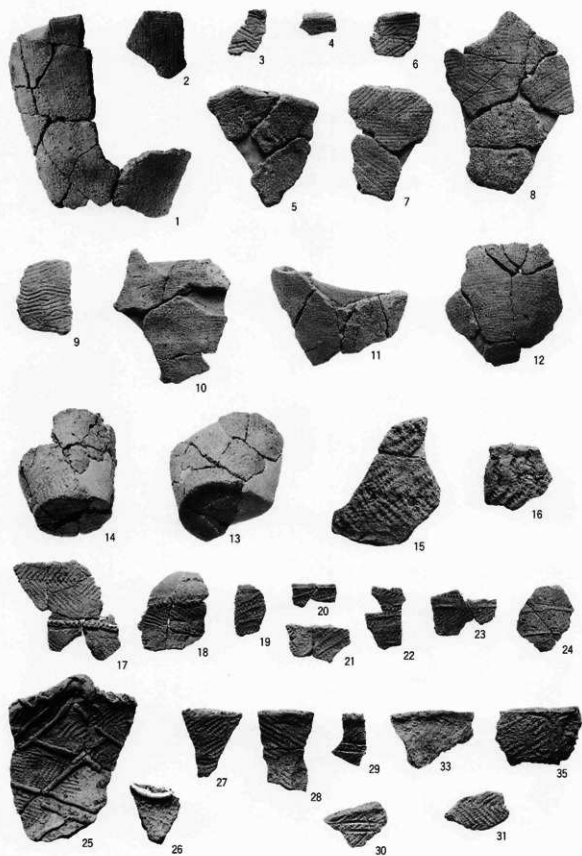


2 FC-2の遺物

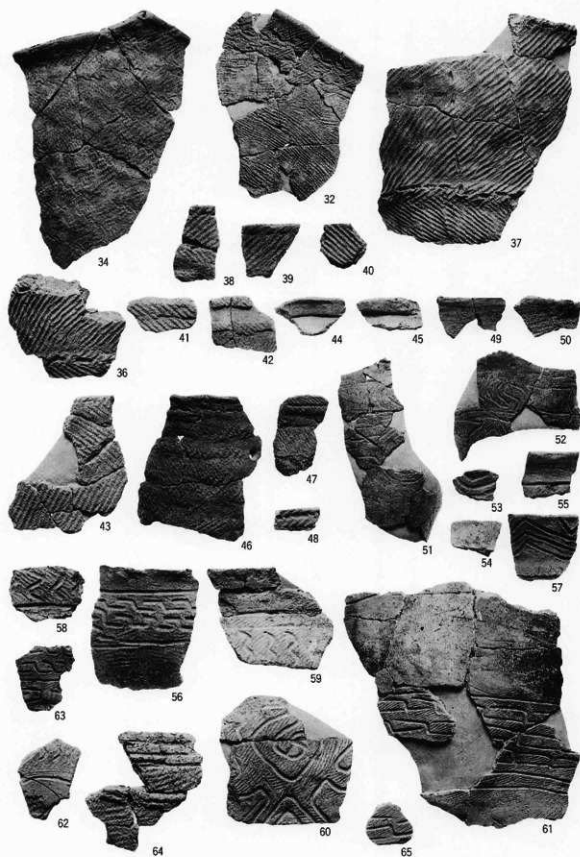
3 FC-3の遺物



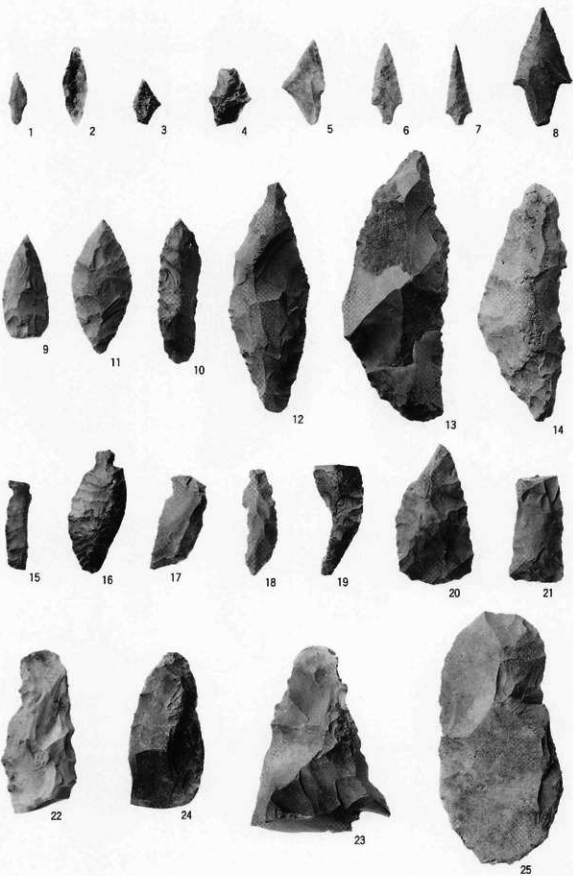
4 FC-5の遺物



包含層出土土器(1)



包含層出土土器(2)・土製品

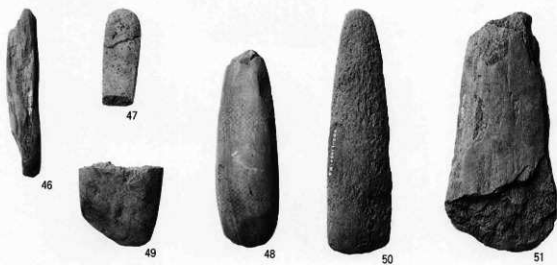
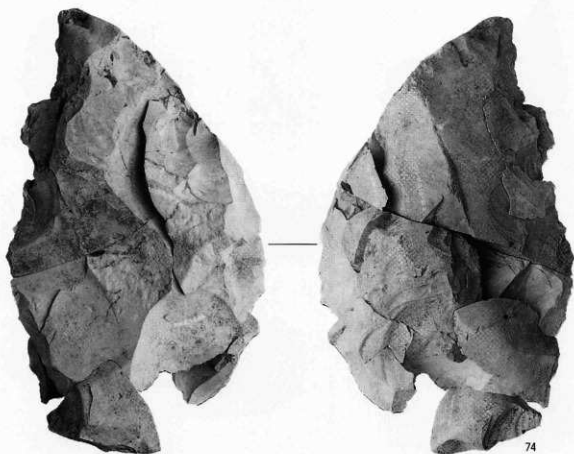


包含層出土石器(1)

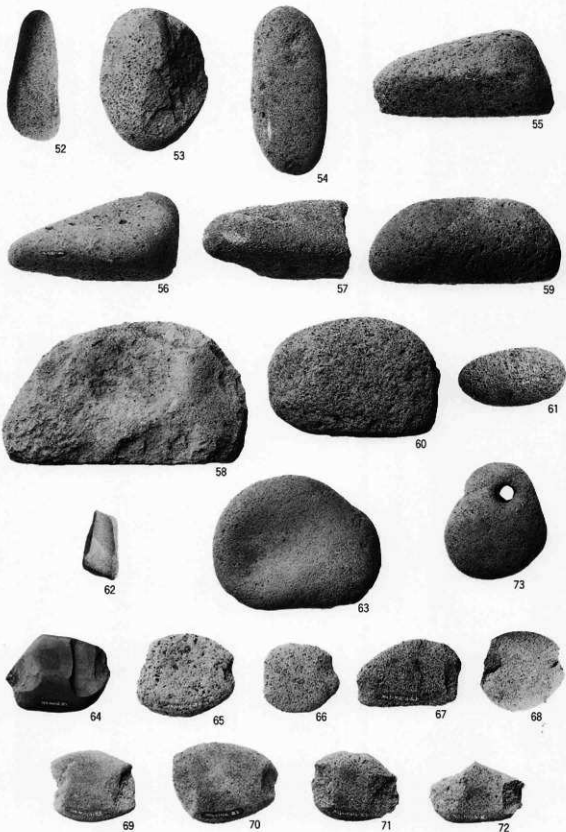




包含層出土石器(2)



包含層出土石器(3)



包含層出土石器(4)

# 報告書抄録

ふりがな	やくもちょう ほんしりりか1いせき・くろいわ3いせき							
書名	八雲町 ボンシラリカ1遺跡・黒岩3遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道(七飯～長万部間)埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第155集							
編著者名	福井淳一、大森司 統							
編集機関	北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ボンシラリカ 1遺跡	北海道 山越郡 八雲町 黒岩 702-2他	1346	B-16-61	42° 20' 9"	140° 16' 50"	19990717 ～ 19991029  20000613 ～ 20000719	1352   608	道路建設 (北海道縦貫自動車道)
黒岩3遺跡	北海道 山越郡 八雲町 黒岩 593-2他	1346	B-16-63	42° 22' 3"	140° 17' 18"	20000601 ～ 20000829 (中断期間 20000613 ～ 20000713)	960	河上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
ボンシラリカ 1遺跡	遺物包含地	縄文時代 早期 前期 中期	住居跡 2軒 土坑 2基 フレイクチップ集中 7か所	縄文土器等 (貝殻文土器、東銅路Ⅲ式、中茶路式、円筒土器下層式、円筒土器上層式、再生土製品、焼成粘土塊) 石器等 (石鏃、石槍・ナイフ、スクレイパー、つまみ付きナイフ、石鏃、石核、両面調整石器、Rフレイク、Uフレイク、石斧、たたき石、振り石、北海道式石冠、偏平打製石器、砥石、石鏃、石皿・台石、剥片、礫)				
黒岩3遺跡	遺物包含地	縄文時代 早期 中期 後期	住居跡 2軒 焼土 2か所 フレイクチップ集中 5か所	縄文土器等 (貝殻文土器、東銅路Ⅲ式、コックロ式、中茶路式、円筒土器上層式、ノダップⅡ式、煉瓦台式、余市式、大津式、白坂3式、再生土製品) 石器等 (石鏃、石槍・ナイフ、スクレイパー、つまみ付きナイフ、石鏃、匙状石器、楔形石器、石核、両面調整石器、Rフレイク、Uフレイク、石器素材、石斧、たたき石、振り石、砥石、石鏃、石皿・台石、剥片、礫)			フレイクチップ集中のうち1基が埋納跡	

---

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第155集

八雲町

## ポンシラリカ 1 遺跡・黒岩 3 遺跡

—北海道縦貫自動車道(七飯～長万部間)埋蔵文化財発掘調査報告書—  
平成13年 3月30日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒060-0832 江別市西野橋685番地-1  
TEL (011) 386-3231

印刷 株式会社 北海道機関紙印刷所  
〒060-0806 札幌市北区北6条西7丁目  
TEL (011) 716-6141

---